貝塚市埋蔵文化財調査報告　第69集

地蔵堂遺跡発掘調査概要5

2005. 3 . 31

貝 塚 市 教 育 委 員 会

はじめに

大阪府南部に位置する貝塚市は、南は和泉山脈に接し、北は大阪湾に面しており変化に富んだ自然環境が残されています。

地蔵堂遺跡は、地蔵堂地区に広がる遺跡であります。熊野街道の通る交通の要衝でもあり、史跡「地蔵堂丸山古墳」、平安時代後期の寺院「地蔵堂廃寺」、中世の集落跡を発見しています。

市立南小学校は、これまでにも校舎の増築、体育館の建設などで調査を行い、方墳や円墳といった古墳を発見し、地蔵堂古墳群が存在することが明らかとなっておりました。

今回の調査で新たに古墳を発見し地蔵堂古墳群の実態が明らかとなりました。また、中世の柱穴、溝、井戸など集落の遺構を発見しました。

これらの成果は、本市ならびに周辺地域の歴史を明らかにするうえで、まことに有意義なことと考えています。

本調査報告書の刊行が、皆様の文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護・保存・研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、関係各位には多大なご協力を頂き、ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも本市における文化財保護行政に対する、一層のご理解とご支援をお願いいたします。

平成17年3月31日

貝塚市教育委員会
教育長　山　本　太三郎

図 版 目 次

図版１　検出遺構
　　調査地全景
図版２　検出遺構
　　調査区南西部
図版３　検出遺構
　１．調査区全景
　２．調査区北東部
図版４　検出遺構
　１．調査区南西部
　２．同上
図版５　検出遺構
　１．調査区南部　２号墳（SD－5011）
　２．調査区南部
図版６　検出遺構
　１．１号墳（SD－5303）
　２．同上
図版７　検出遺構
　１．２号墳（SD－5011）
　２．２号墳、５号墳
図版８　検出遺構
　１．５号墳（SD－5022）
　２．同上
図版９　検出遺構
　１．６号墳（SX－5136）
　２．同上
図版10　検出遺構
　１．SD－5126
　２．同上
図版11　検出遺構
　１．SD－5132
　２．同上
図版12　検出遺構
　１．SD－5009
　２．SD－5017
図版13　検出遺構
　１．SD－5020
　２．SD－5137
図版14　検出遺構
　１．SD－5120、SD－5300、SX－5003
　２．SD－5120、SD－5300
図版15　検出遺構
　１．SE－5121　掘削状況
　２．SE－5121　完掘状況
図版16　検出遺構
　１．SK－5004
　２．SK－5346
図版17　検出遺構
　１．柱穴群
　２．柱穴群
図版18　出土遺物
　SD－5011（２～７、24）、SD－5022（21、22）、SD－5303（23）出土土器
図版19　出土遺物
　SD－5011（１、８、18、19）、SD－5022（９、16、25、26）出土土器
図版20　出土遺物
　SD－5126（10～12、14、15）、SD－5132（13、17、20）、遺物包含層第3層（219）出土土器
図版21　出土遺物
　SK－5004（30～36、38～44、47、49）、SK－5075（60、62～64）出土土器
図版22　出土遺物
　SE－5121（68、70、72、75、76）、SD－5011（79、95、105、106）出土土器
図版23　出土遺物
　SD－5022（120）、Pit－5208（144）、Pit－5310（140）、SX－5002（155～158、173～175）出土土器
図版24　出土遺物
　SX－5006（176、177、199、201、203）、SX－5024（191、200）、SX－5081（183）、SX－5119（198）、SX－5134（202）、SX－5333（193）出土土器
図版25　出土遺物
　遺物包含層第5層（210、216、220）、遺物包含層第4層（217、218、221、222）出土土器
図版26　出土遺物
　緑釉陶器（27、28）、青磁（227、229、230）、白磁（223、231～233、248）
図版27　出土遺物
　金属製品（234～236）、金属滓（237）、フイゴの羽口（238）

挿　図　目　次

図１　貝塚市位置図
図２　貝塚市遺跡分布図（部分）
図３　調査地位置図
図４　地区割図
図５　柱状土層図
図６　遺構配置図
図７　２号墳（SD－5011）平・断面図
図８　５号墳（SD－5022）平・断面図
図９　SD－5009、SD－5017、SD－5021、SD－5132、SD－5137、SD－5303（１号墳）平・断面図
図10　SD－5120、SD－5122、SD－5126、SX－5136（６号墳）、SD－5300平・断面図
図11　SE－5121平・断面図
図12　SK－5004平・断面図
図13　SK－5346平・断面図
図14　２号墳（SD－5011）出土須恵器
図15　SD－5011（２～８、18、19、24）、SD－5022（９、16、21、22、25、26）、SD－5126（10～12、14、15）、SD－5132（13、17、20）、SD－5303（23）出土須恵器
図16　緑釉陶器
図17　SK－5004出土土器
図18　SK－5072（50、51、59）、SK－5075（52～58、60、62～64）、SK－5148（61）出土土器
図19　SE－5121出土土器
図20　SD－5011出土土器
図21　SD－5021（109、110）、SD－5022（108、111～115、118～121、124、125、127）、SD－5023（107）、SD－5122（116、117、123）、SD－5137（122、126、128、129）出土土器
図22　Pit－5029（143）、Pit－5040（138）、Pit－5067（130）、Pit－5068（133）、Pit－5104（134、139）、Pit－5128（131、141）、Pit－5146（136）、Pit－5161（135）、Pit－5208（144）、Pit－5252（137、142）、Pit－5264（132）、Pit－5310（140）出土土器
図23　SX－5002出土土器
図24　SX－5001（181、196）、SX－5006（176、177、179、185～189、199、201、203）、SX－5024（191、195、197、200）、SX－5031（184）、SX－5076（178、192）、SX－5081（183）、SX－5119（198）、SX－5133（180、190、194）、SX－5134（182、202）、SX－5333（193）出土土器
図25　遺物包含層第５層（204、205、210、216、220）、遺物包含層第４層（206、207、209、211～214、217、218、221、222）、遺物包含層第３層（208、215、219）出土土器
図26　青磁（224～230）、白磁（223、231～233）
図27　金属製品（234～236）、金属滓（237）、フイゴの羽口（238）
図28　出土平瓦
図29　出土平瓦
図30　「大塚」の地字のある場所

例　　言

1．本書は、貝塚市教育委員会総務課の依頼により、大阪府貝塚市地蔵堂286に所在する地蔵堂遺跡において実施した、貝塚市立南小学校増築工事に伴う事前発掘調査の概要報告である。

2．発掘調査は確認調査を平成15年７月31日～平成15年８月１日、２次発掘調査を平成15年12月10日～平成16年４月16日にかけて実施した。なお内業調査については本書刊行をもって終了した。

3．調査にあたっては、貝塚市教育委員会総務課ならびに貝塚市役所建築住宅課に多大な御理解と御協力を得た。ここに記して、感謝の意を表します。

4．発掘調査は貝塚市教育委員会社会教育課、学芸員三浦基が担当した。
内業調査および本書作成にかかる諸作業については、下記の諸氏の参加を得て実施したものである。
　岡本恵子、畑中道子

5．本書で用いた標高は、東京湾平均海水面（T．P.）を基準とした。

6．本書の土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帳』1993年度版を用いた。

7．本書の執筆・編集は三浦が行った。

8．遺物写真撮影は三浦が行った。

9．出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会において保管している。

目　　次

はじめに

例　　言

目　　次　（本文目次、図版目次、挿図目次）

第１章　調査に至る経過…… 1

第２章　位置と環境…… 3

第３章　調査結果…… 5

１．調査の概要…… 5

２．基本層序…… 6

３．検出遺構…… 6

４．出土遺物 …… 16

第４章　まとめ…… 30

第１章　調査に至る経過

貝塚市教育委員会総務課の依頼により、地蔵堂に所在する地蔵堂遺跡において実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告である。

貝塚市立南小学校（貝塚市地蔵堂286）増築工事にあたり平成15年７月25日埋蔵文化財発掘通知書が提出された。当該地は地蔵堂丸山古墳、地蔵堂廃寺、中世の集落跡として周知されている地蔵堂遺跡の範囲にあたる。

南小学校ではこれまでにも、体育館の建設、校舎の増築などで確認調査や本調査を実施しており、方墳２基、円墳２基、中世の掘立柱建物、井戸などの遺構を発見していた。今回の調査はこれまでに発見した円墳に隣接した地点であり、円墳の周溝の続きや新たな古墳発見の可能性が高いと予想された。

確認調査は、平成15年７月31日から８月１日にかけて市教育委員会が実施した。

調査は、建物建設予定部分に調査区（第１区、第２区）の合計56.50㎡の調査区を設定し、実施した。

確認調査の結果、古墳時代の遺構、中世の遺構、遺物包含層を検出した。特に古墳時代の遺構は、従前の発掘調査で検出した埋没古墳と同一古墳群をなす可能性があるものである。また、中世の遺構、地層堆積状況からは、本調査地が中世以降農地として使用されたことが明らかとなった。

この成果を受け、教育委員会総務課との協議を重ねた結果、建物建設により遺跡に影響を及ぼす部分において本格的発掘調査を行うこととなった。

発掘調査の期間は平成15年12月10日から平成16年４月16日である。

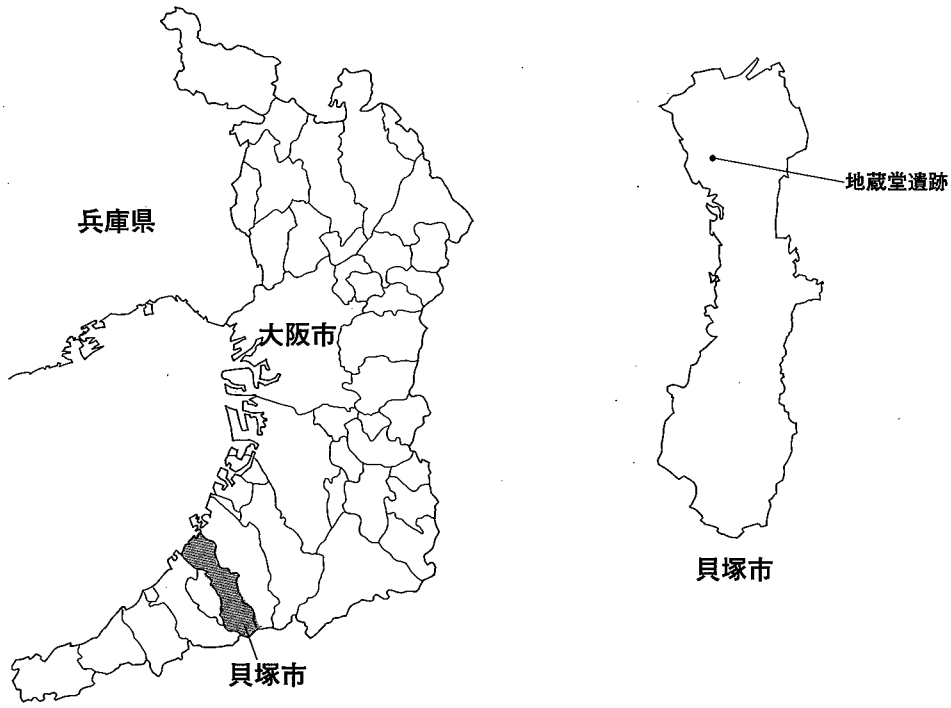
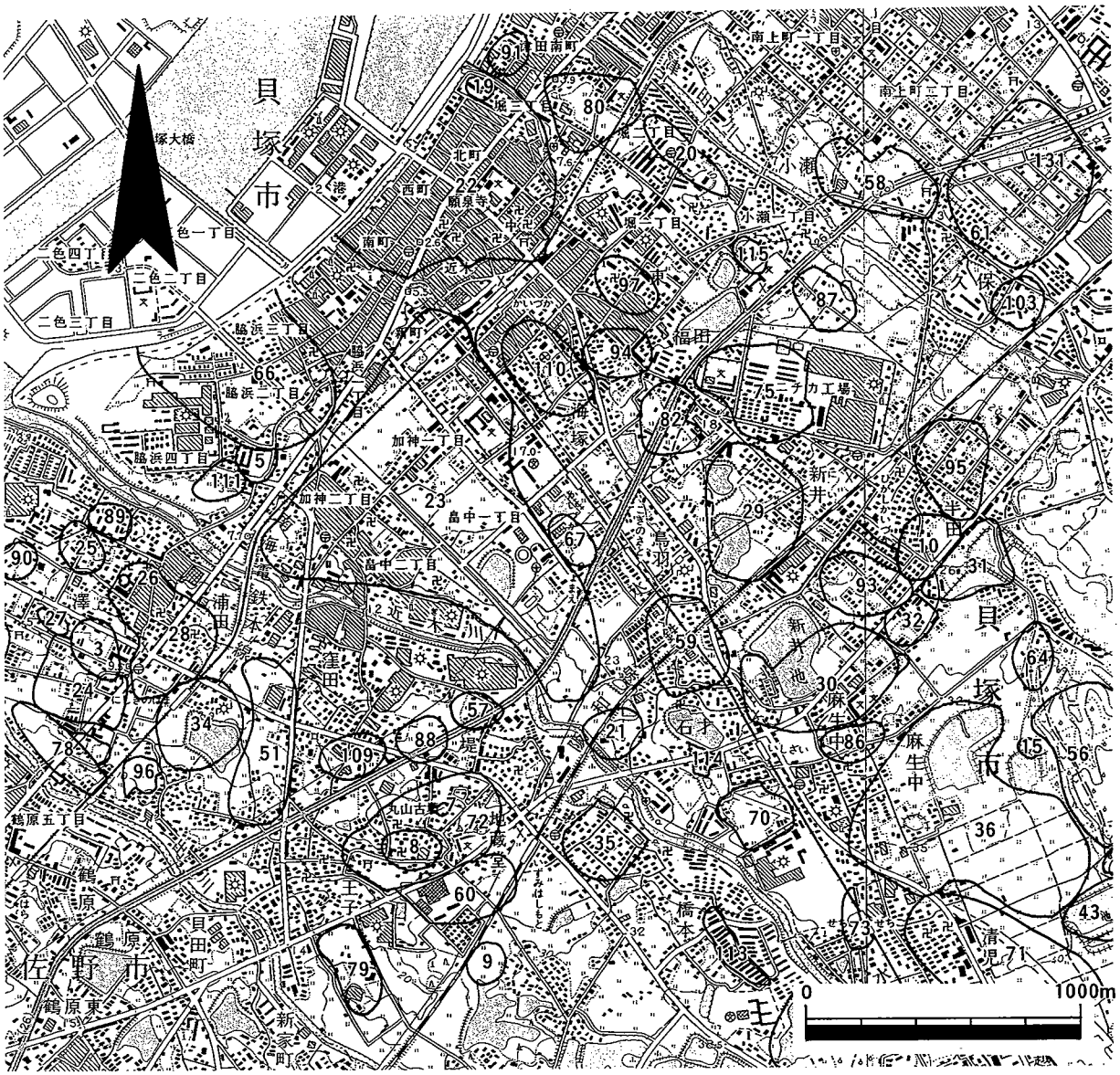


図１　貝塚市位置図



3．沢遺跡　5．長楽寺　7．地蔵堂丸山古墳　8．地蔵堂廃寺　9．下新出遺跡　10．秦廃寺　15．麻生中新池遺跡　19．泉州麻生塩壺出土地　20．堀遺跡　21．橋本遺跡　22．貝塚寺内町遺跡　23．加治・神前・畠中遺跡　24．明楽寺跡　25．沢共同墓地遺跡　26．沢西出遺跡　27．沢海岸北遺跡　28．沢城跡　29．新井・鳥羽遺跡　30．新井ノ池遺跡　31．半田遺跡　32．麻生中遺跡　34．澱池遺跡　35．積善寺城跡　36．清児遺跡　43．二ツ池遺跡　51．窪田遺跡・窪田廃寺　56．半田遺跡（清児地区）　57．堤遺跡　58．小瀬五所山遺跡　59．石才遺跡　60．王子遺跡　61．土生遺跡　64．海岸寺山遺跡　66．脇浜遺跡　67．今池遺跡　70．石才南遺跡　71．名越遺跡　72．地蔵堂遺跡　73．名越西遺跡　75．新井・鳥羽北遺跡　78．沢西遺跡　79．王子西遺跡　80．津田遺跡　82．福田遺跡　86．麻生中出口遺跡　87．小瀬遺跡　88．堤三宅遺跡　89．沢新開遺跡　90．沢タナジリ遺跡　91．堀新遺跡　93．麻生中下代遺跡　94．堀秋毛遺跡　95．半田北遺跡　96．沢老ノ塚遺跡　97．東遺跡　103．久保遺跡　109．窪田ハマデ遺跡　110．海塚遺跡　111．脇浜川端遺跡　113．橋本岸ノ下遺跡　114．麻生中薬師寺堂遺跡　115．谷池遺跡　131．（岸和田）土生遺跡

図2　貝塚市遺跡分布図（部分）

第２章　位置と環境

地蔵堂遺跡は貝塚市のほぼ中央部、近木川左岸の段丘上に位置する標高24～25mの地点である。熊野街道が通り貝塚市内唯一の前方後円墳史跡地蔵堂丸山古墳、地蔵堂廃寺を含む遺跡である。

地蔵堂丸山古墳は昭和31年に国史跡に指定された前方後円墳で、平成12年、平成13年に外周溝の改修及び管理用フェンス設置に伴う確認調査を行った。結果、古墳が３段築成である可能性が高いこと、出土した埴輪の時期が４世紀末ころのものであることがわかり、諸説あった古墳の築造時期が古墳時代前期末であることが明らかとなった。

本遺跡では、平成５年に実施した民間開発に伴う調査で、14世紀後半の土器が出土し、区画溝、井戸などを検出しており、地蔵堂廃寺に関わる人々の居住スペースあるいは僧坊のような施設があったと考えられる。

小学校敷地内でのこれまでの調査（小学校体育館建設、校舎増築等に伴う発掘調査）では、方墳２基、円墳２基が確認されている。いずれの古墳においても平安時代から中世にかけての開発により墳丘、埋葬施設は削平され、周溝が残るのみの状況である。

周辺の遺跡としては、北に弥生から中世の集落跡である加治・神前・畠中遺跡、古墳時代の散布地堤遺跡、中世の集落跡堤三宅遺跡、中世の集落跡窪田ハマデ遺跡、東には中世の城郭跡である積善寺城跡、西には弥生から中世の散布地、寺院跡の窪田遺跡・窪田廃寺、南には古墳から江戸時代の集落跡王子遺跡、奈良から平安時代の集落跡王子西遺跡、古墳時代の散布地下新出遺跡などがある。

これらの遺跡のほか、中世末期に紀州根来寺の勢力下となった時期には、多くの城が築かれた。本遺跡周辺では、畠中城、沢城、高井城跡、積善寺城跡、森城跡、三ケ山城跡、千石堀城跡など多くの城跡および伝承が残る。

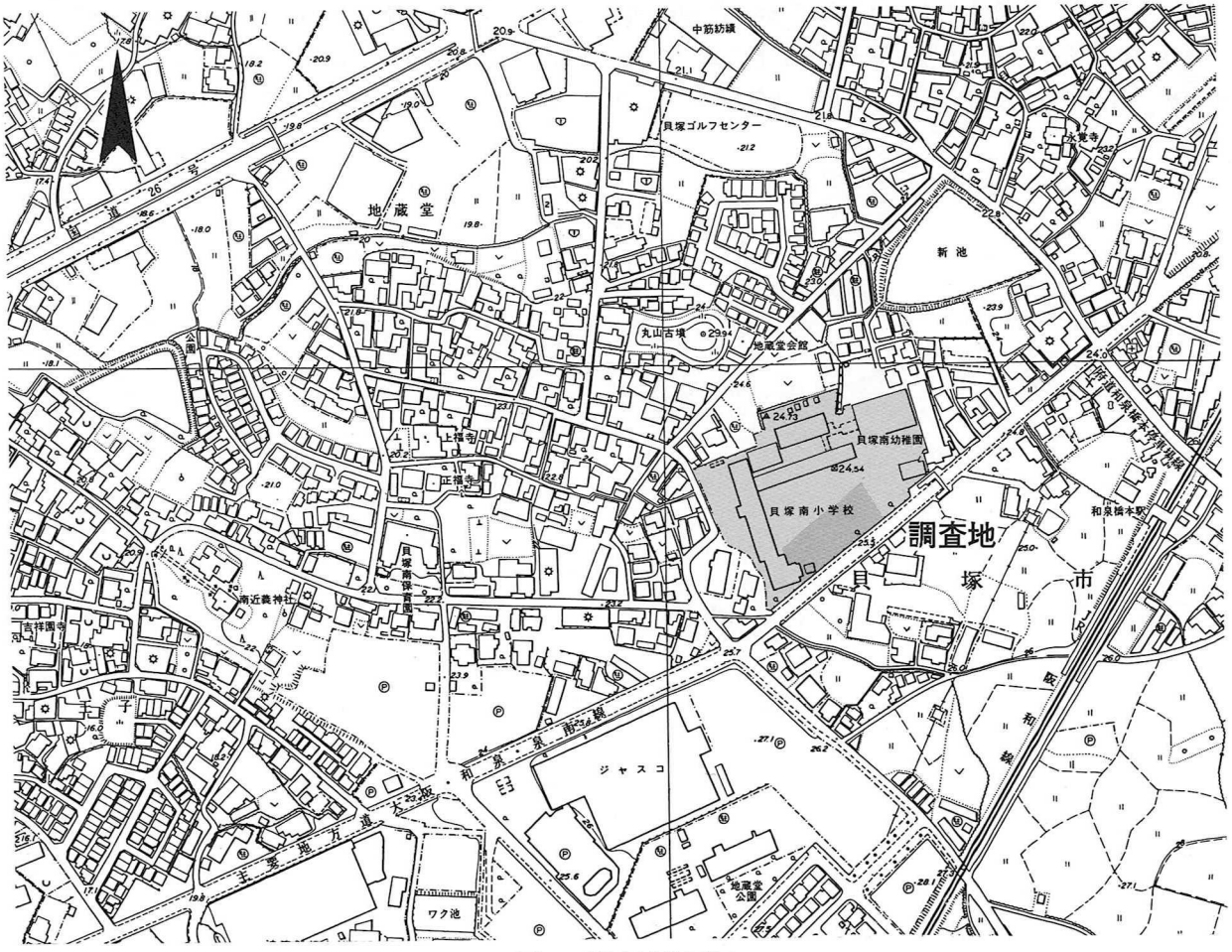


図３　調査地位置図

最近の成果としては、積善寺城跡で絵図にしるされた濠の一部が調査で明らかとなり、絵図のみでしか確認できなかった城の状況が明らかになりつつある。

特に本遺跡に関わりが深いと考えられる王子遺跡は、地名からもわかるように熊野九十九王子の一つと推定されている。昭和60年の発掘調査では鎌倉時代の集落の一画を発見しており、熊野行幸にかかわる人々の集落の可能性もあり地蔵堂廃寺、吉祥園寺、南近義神社のある本遺跡一帯は、交通の要衝であり政治的にも重要な役割を担っていたと考えられる。

また、本遺跡に含まれる地蔵堂廃寺は、現在の正福寺周辺がその場所である。正福寺は真言宗御室派。宝憧山惣持院。本尊は木造将軍地蔵菩薩騎馬像（頭部は平安時代、他の部分は江戸時代の制作）である。伝承等から永禄年間に焼失した「勝軍寺」が推定されている。古くは近義地蔵堂あるいは将軍寺と呼ばれ、地蔵堂の地名は当寺に由来する。

1135（長承４）年の『地蔵堂結縁八講縁起』には、日暹という老僧が建てた草庵をもとに、道俗結衆によって地蔵菩薩像が寄進され、1122（保安３）年に開かれたと記されている。1257（正嘉元）年刊の『泉州志』には、淳和天皇の時代（823～833）に建立され、宝塔、涅槃堂、薬師堂、鐘楼、浴室、四門、六坊を備えていたと記される。1257（正嘉元）年には西大寺の叡尊（1201～90、真言律宗中興の祖、謚は興正菩薩）が当地で説戒し、高野山円達房以下1,173人に菩薩戒を授けていることからも、この地方の中心寺院であったことがうかがわれる。

永禄年間（1558～70）には、三好氏の兵火にかかり焼失した。その後、1661（寛文元）年、快円によって再興され、寺号を改めて仁和寺末となった。

現在境内には本堂の地蔵堂、大師堂、鐘楼の基壇跡（1934、昭和９年の室戸台風で倒壊）が残る。ほかに1698（元禄11）年建立の五智如来堂があったが、明治年間（1868～1912）に取り壊された。また、昭和56、57年に実施した境内の発掘調査では、平安時代後期と考えられる地山削り出しの基壇の塔跡を検出し、平安時代後期から江戸時代にかけての瓦が出土した。正応三年（1290）軒丸瓦、永亨十年（1438）丸瓦、安四年平瓦の年号を記した銘文瓦が３点出土しており、瓦年代の指標となっている。また、境内にある小堂には、1579（天正７）年の庚申板碑、石造の青面金剛立像、一石に３体の地蔵菩薩立像を刻した六地蔵と思われる石仏などがある。

第３章　調査結果

１．調査の概要

調査は、校舎増築により破壊を受ける部分、約1,200㎡について調査区を設定した。調査区は国家座標X＝－174.235、Y＝－59.110を基準にして５ｍ×５ｍの区画、東西方向に15区画（A～O)、南北方向に12区画（１～12)を設定した。

調査は、確認調査における遺物包含層第３層、第４層を機械で掘削し、地山上面で遺構検出を実施した。

調査区は当初一度に設定し、実施する予定であったが、体育倉庫部分及びその周辺部分については倉庫移転撤去後に調査実施となった。航空写真は２回撮影し、１回目は遺構検出状況、２回目は遺構掘削後の状況及び写真測量を実施した。調査では、旧校舎とみられる基礎、体育遊具基礎などにより破壊されている部分が存在したが、良好な状態で遺構が残っていた。

調査区西側から中央部にかけては、古墳周溝、柱穴、溝などを多数検出した。特に従前の調査で発見した１号墳、２号墳の周溝を検出しており、１号墳の周溝の一部と２号墳の周溝の７割以上を確認することができた。

また、柱穴を多数検出しており、これまでに確認した掘立柱建物の続き及び新たに建物を復元できる可能性もでてきた。調査区東側の状況は、西側から東側にかけて段差があり、柱穴等の遺構はほとんど見られず、主に鋤溝、溝を検出しており状況の違いが見られた。

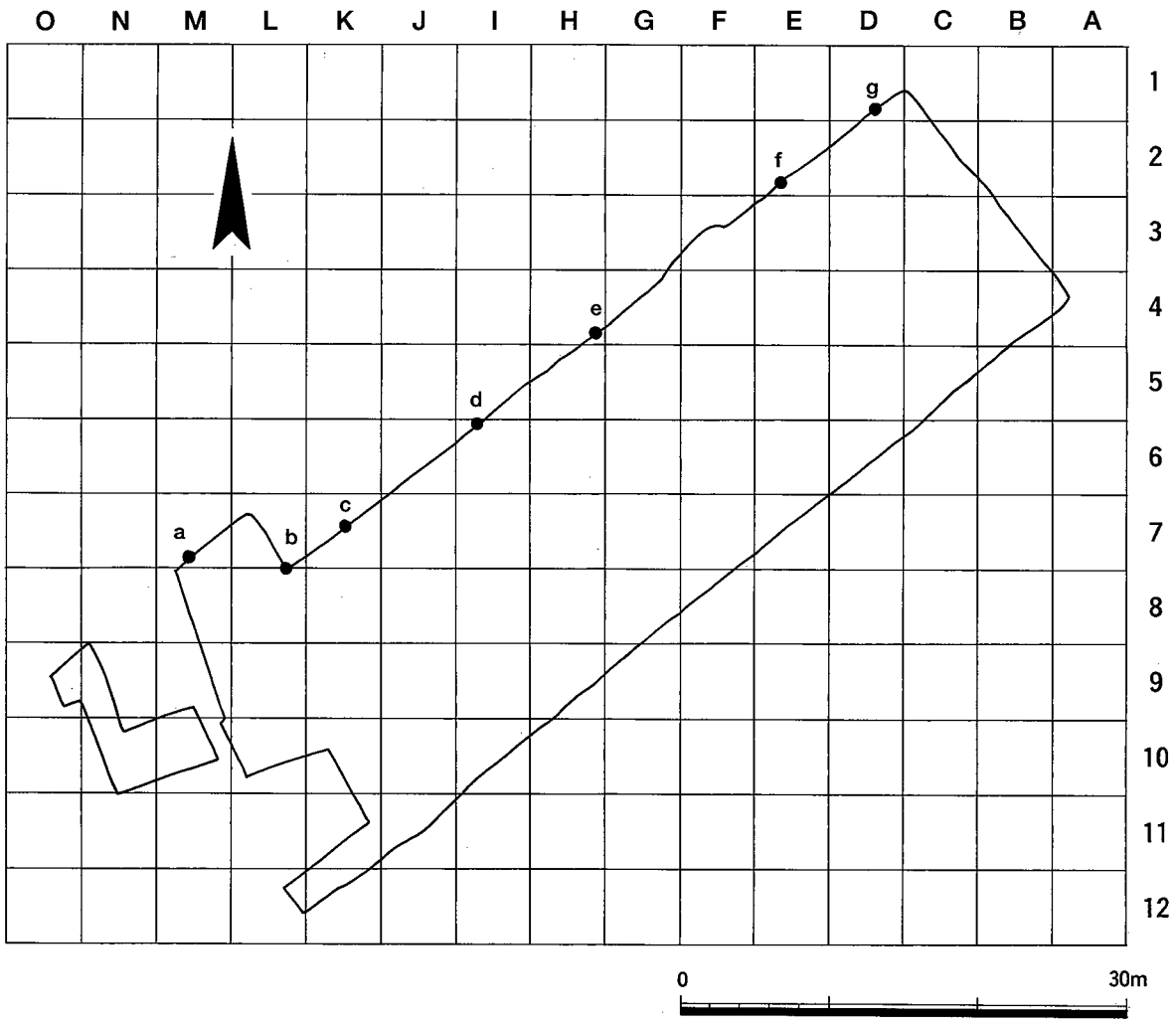


図４　地区割図

2．基本層序（図５）

本調査区の地層堆積状況は、上層より第１層盛土、第２層耕作土、第３層黄褐色砂質土（2.5Y5/3)、第４層黄褐色粘質土（2.5Y5/3)、灰黄褐色土（10YR5/2）でその下は黄褐色粘土（10YR5/6）の地山である。第３層～第５層は遺物包含層である。

第１層盛土はグラウンドのためのもので（層厚0.25～0.3m)、調査区のほとんどがグラウンド部分で、現地表面は平坦である。

第２層耕作土（層厚0.1～0.2m）は、小学校建設、運動場造成時に削り取られてない部分がある。

第３層（層厚0.15～0.3m）は中世～近世の遺物包含層で瓦器椀、土師器、近世陶磁器が出土しており、地層堆積状況から農地層と考えられる。

第４層（層厚0.1～0.15m）は中世の遺物包含層で瓦器、土師器、瓦質土器、陶器などが出土しており、地層堆積状況から農地層と考えられる。

第５層（層厚0.1～0.15m）は中世の遺物包含層である。地層が削り取られている可能性があり、調査区の一部で見られない部分もある。古墳時代の須恵器も出土しているが、瓦器、土師器、瓦質土器、土師質土器、陶器が出土している。

地山面は標高24.65～24.15mで緩やかに東北方向に傾斜しており、調査区西側の地山面と東側では 0.5mの差がある。

3．検出遺構

地山上面にてこれまでに発見した古墳の周溝および新たに古墳の周溝を発見した。また、中世の溝、柱穴、土坑、鋤溝等を多数検出した。以下、主な遺構について概要を示す。

１号墳（SD－5303）（図９、図版６）

本遺構は、Ｊ－11、Ｋ－11区にて検出した古墳周溝である。昭和56年度、昭和60年度調査で発見した円墳の周溝の一部であり、今回の調査での検出幅2.5m、検出長1.5m、深さ0.5mである。溝断面は緩やかなＵ字形で、埋土は３層に分けられ、３層から須恵器坏蓋（ツマミ付）が出土した。古墳の墳丘および主体部は削り取られて残っておらず主体部の構造も全くわからない状況である。古墳の時期については、周溝内出土の遺物から推測している。これまでの調査では「周溝最底部よりほぼ全域にわたり土器が多量に出土しており、人為的に細かく破壊して投棄したかのような出土状況」と報告されているが、今回の調査では検出長が短く、出土遺物も少ないため同様の状況は確認できなかった。遺物の時期は、５世紀後半代の須恵器が出土していたが、今回の調査でも同時期と考えられる土器が出土している。

周溝の北半分が明らかとなり、周溝幅２～３m、深さ約0.4～0.5mで、周溝も含めた古墳の直径は17～18mであることがわかった。

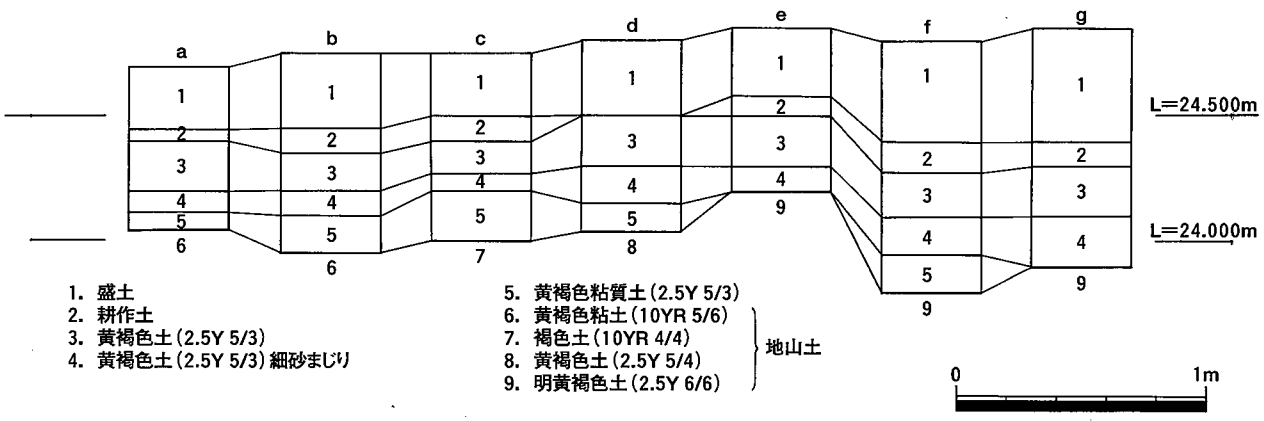


図５　柱状土層図

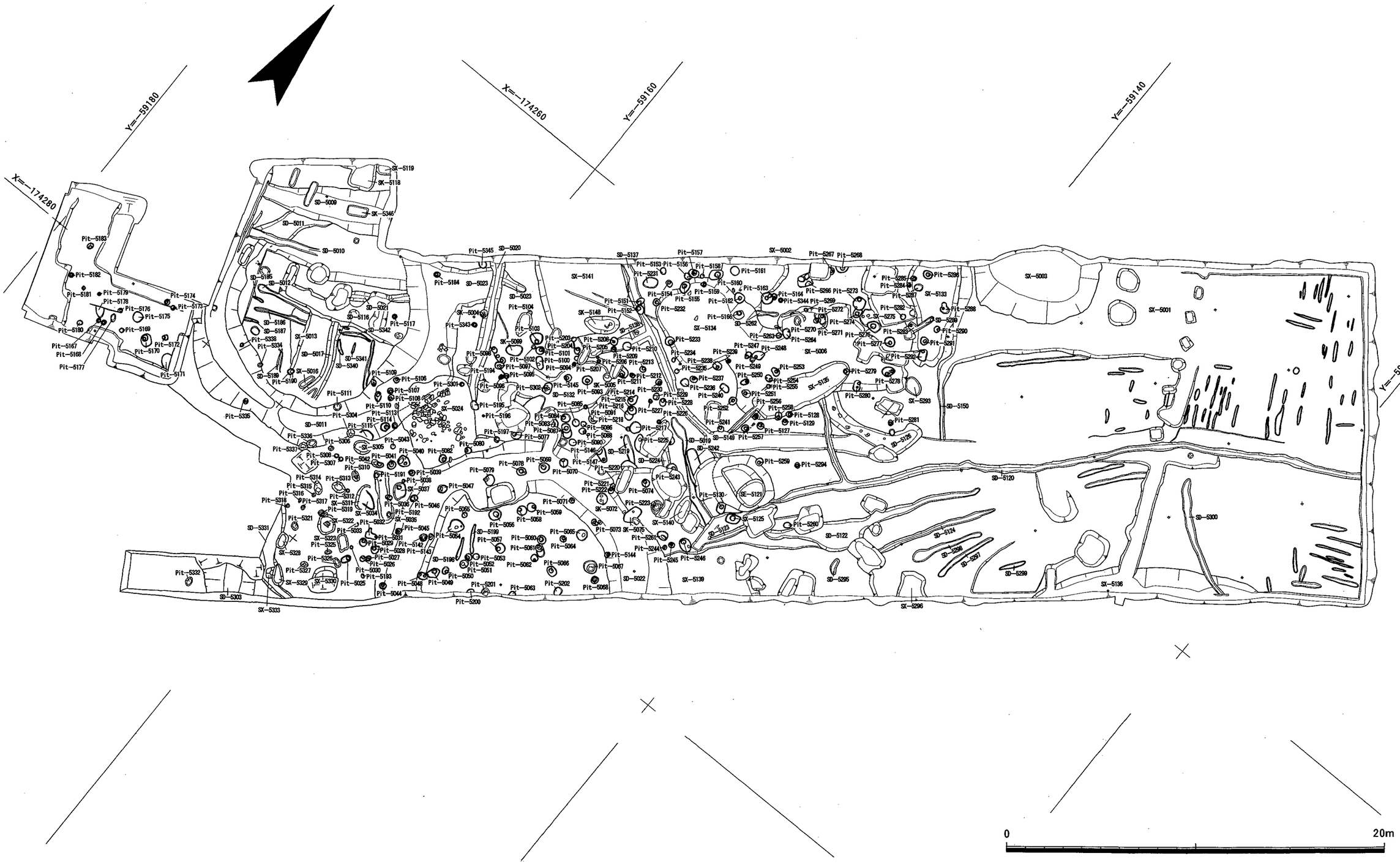
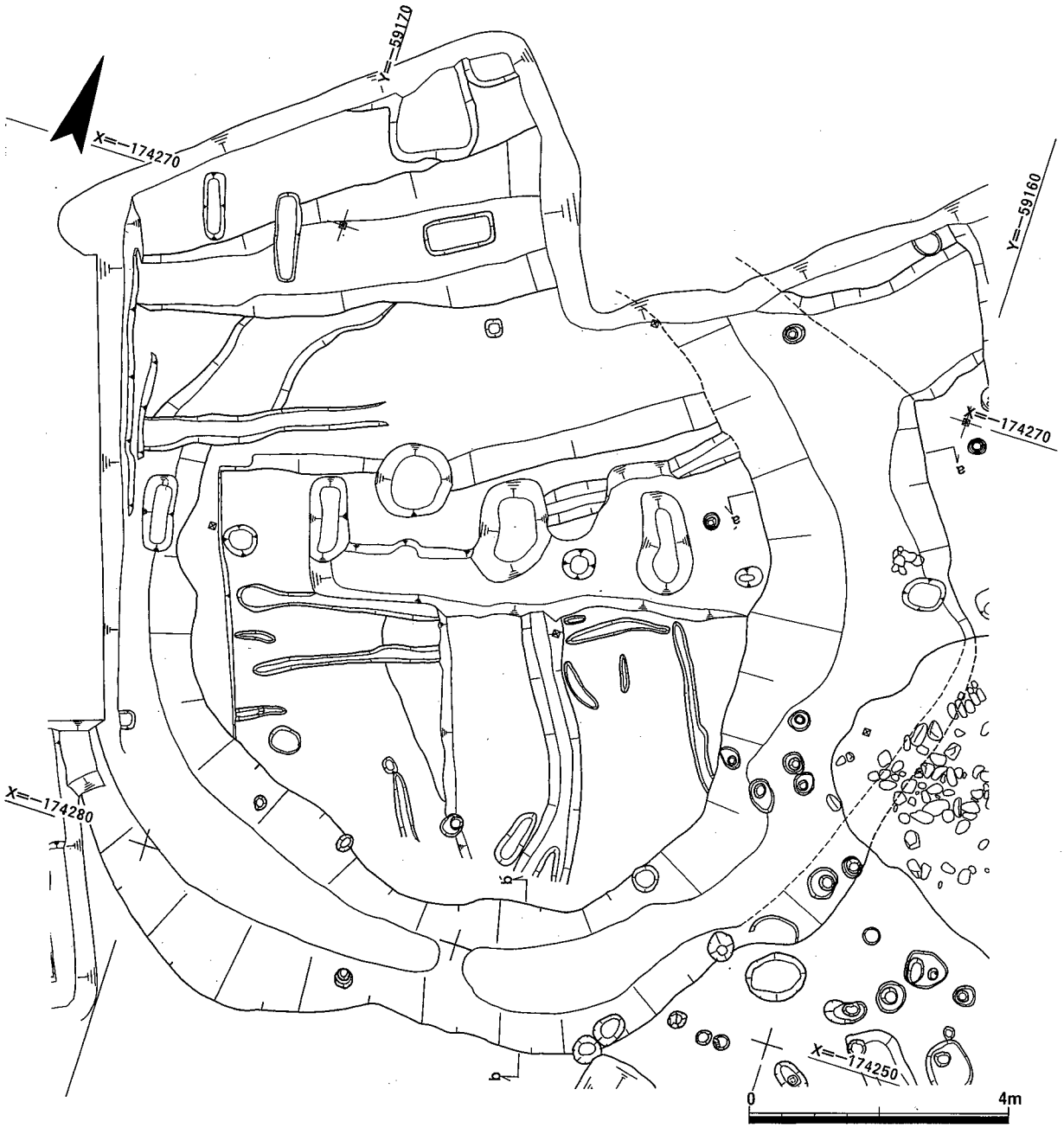
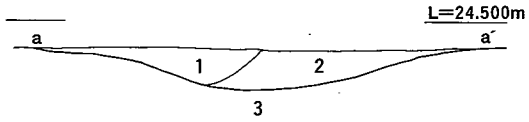
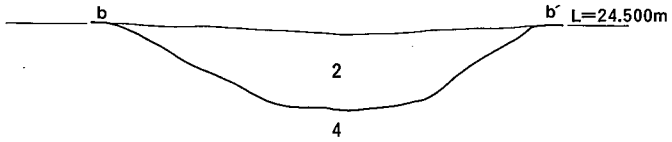


図6 遺構配置図





1. 灰黄色粘土(2.5Y 6/2)
2. 灰黄褐色粘土(10YR 5/2)
3. にぶい黄色礫、粗砂混じり土(2.5Y 6/3)　地山土
4. 黄褐色粘土(10YR 5/6)　地山土



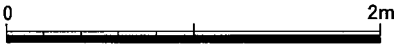
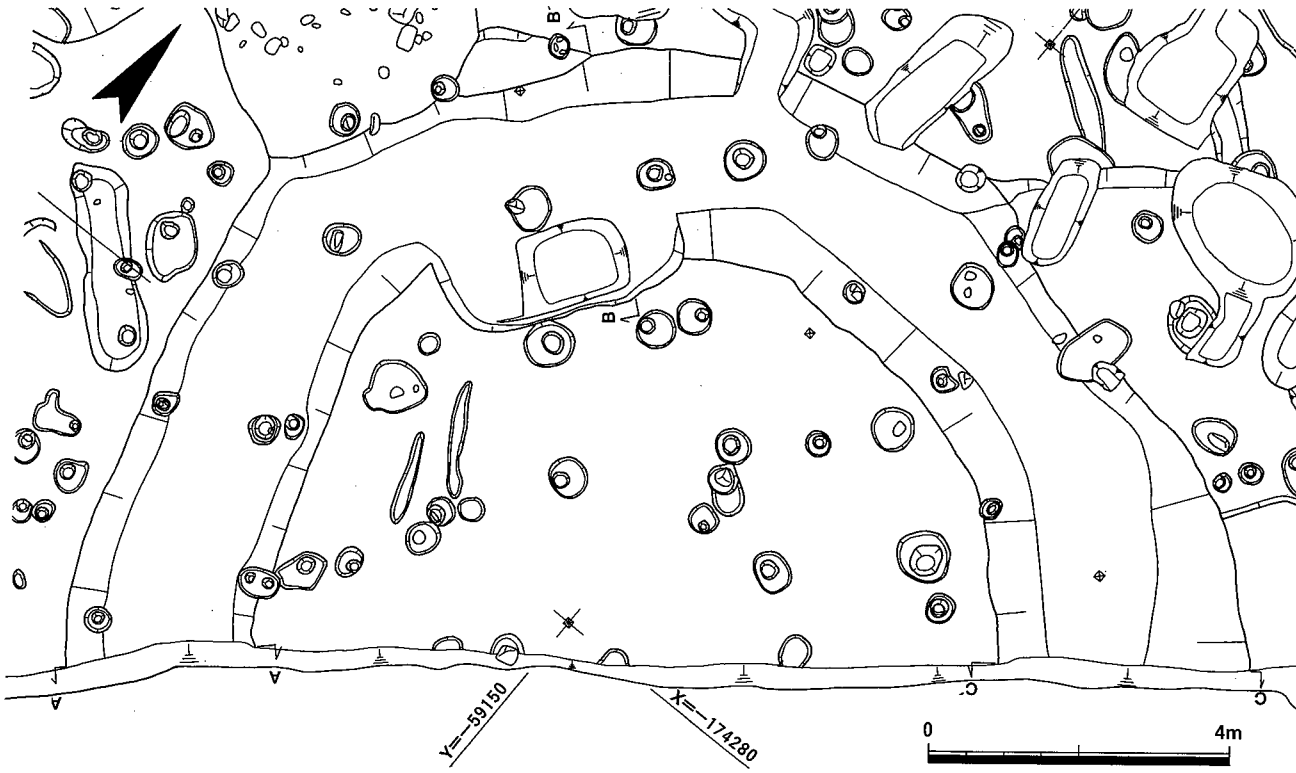


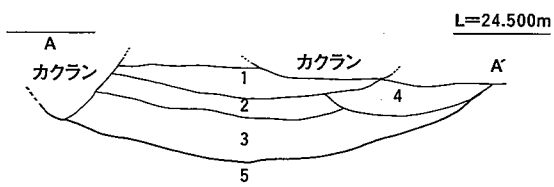
図7　2号墳（SD−5011）平・断面図

2号墳（SD−5011）（図7、図版5、7）

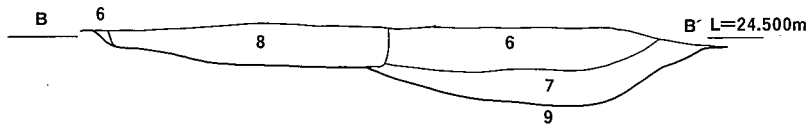
本遺構は、J−8、J−9、K−7〜K−10、L−7〜L−10、M−8〜M−10区にて検出した古墳周溝である。

昭和60年度調査で発見した古墳の周溝でこれまでは西側の端の一部が検出されていただけで古墳の形や時期についてもほとんどわからなかったが、今回の調査で円墳の周溝であることが確定し、一部調査できない部分があったものの円墳の7割以上を検出することができた。

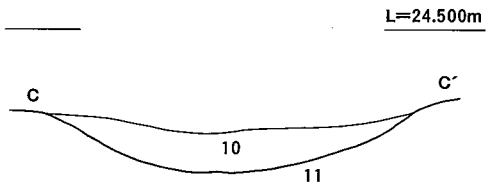




1. にぶい黄色細砂混じり土（2.5Y 6/3）
2. 黄褐色細砂混じり土（2.5Y 5/4）
3. 黄灰色粘土（2.5Y 4/1）
4. にぶい黄色土（2.5Y 6/4）
5. にぶい黄色土（2.5Y 6/3）　地山土



6. 黄褐色細砂混じり土（2.5Y 5/4）
7. 黄灰色粘土（2.5Y 4/1）
8. 撹乱
9. 暗灰黄色礫混じり土（2.5Y 5/2）　地山土



10. 暗褐色粘土（10YR 3/3）
11. 黄褐色粘土（2.5Y 5/6）　地山土

0　2m

図8　5号墳（SD−5022）平・断面図

今回の調査で検出した周溝の幅1.2～3.6m、深さ0.2～0.4mである。溝断面は緩やかなU字形で、埋土は1層から2層に分けられ、溝底部分から須恵器器台、坏蓋、坏身が出土した。遺物の時期は5世紀後半と考えられるが、1号墳の出土遺物と比較すると時期差が見られるようである。

古墳の墳丘および主体部は削り取られて残っておらず主体部の構造もわからない状況である。

5号墳（SD—5022）（図8、図版7、8）

本遺構は、H－8、H－9、I－8～I－10、J－8～J－10区にて検出した古墳周溝である。今回の調査で発見した円墳で調査区外に広がるが、古墳のほぼ半分を検出することができたため、周溝も含めた古墳の直径は15.7m、周溝幅2.4～3.4m、深さ0.2～0.5mである。溝断面は緩やかなU字形で、埋土は1層から4層に分けられ、溝底部分から須恵器坏蓋、坏身、無蓋高坏、有蓋高坏、壺が出土した。遺物の時期は5世紀後半と考えられるが、他の古墳の出土遺物と比較すると時期差が見られるようである。

古墳の墳丘および主体部は削り取られて残っておらず主体部の構造もわからない状況である。

6号墳（SX—5136）（図10、図版9）

本遺構は、B－5、C－5、C－6、D－5、D－6区にて検出した古墳周溝である。調査区外に広がるため全体の規模、形状は推測の域をでないが、埋土の状況や遺構の形状から判断して円墳の周溝と考えられる。検出幅1.4m、検出長11.9m、埋土は灰黄褐色土で深さ0.26mである。遺物は出土していない。

SD—5126（図10、図版10）

本遺構は、F－5、F－6、G－6区にて検出した溝である。東西方向で北側に孤を描くような形をしており、検出長5.26m、幅0.64m、深さ0.27mである。埋土は、灰黄褐色土で遺物は須恵器坏蓋、坏身でほぼ完形の状態で出土しており、5世紀後半の時期のものである。出土遺物の時期から判断すると古墳の周溝の可能性も考えられる。しかし、2号墳、5号墳に近く位置関係から推定する古墳の間隔が狭すぎるのではないか、同様の条件で削平、破壊を受けたとして、これほど残存状況にちがいがでるのか等、疑問点があり本溝を古墳の周溝とするにはさらに検討する必要がある。

SD—5132（図9、図版11）

本遺構は、I－7、I－8区にて検出した溝である。東西方向で北側に曲がっており、検出長7.1m、幅2.3m、深さ0.28mである。埋土は灰黄褐色土で、遺物は須恵器坏蓋、坏身、高坏が出土しており5世紀後半の遺物が出土している。SD－5126と同様に2号墳、5号墳に近接する位置関係にあり、周辺の遺構に大きく破壊されている状況もあるため、本溝が古墳の周溝であるか判断するにはさらに検討する必要がある。

SD—5009（図9、図版12）

本遺構はL－7、L－8、M－7、M－8区にて検出した溝である。昭和60年度の調査で検出した溝SD－85301の続きである。流れの方向は西から東方向で検出長6.26m、幅2.28m、深さ0.07～0.44mである。埋土は3層に分けられ、上層より灰黄色粘土（2.5Y6／2）、暗灰黄色粘土（2.5Y5／2）、黄灰色粘土（2.5Y5／1）でその下は黄褐色粘土（10YR5／6）の地山である。地層堆積状況等から判断して本溝は耕作に伴う溝あるいは集落に関わる区画溝の可能性がある。遺物は、瓦器、土師器、須恵器、瓦、土師質土器が出土しており、おおむね14世紀後半の時期のものである。

SD—5017（図9、図版12）

本遺構はK－8、K－9、L－8、L－9区にて検出した溝である。検出長4.14m、幅0.62m、深さ0.09～0.14mである。埋土は2層に分けられ、上層より灰黄色細砂混じり土（2.5Y6／2）、にぶい黄色細砂混じり土（2.5Y6／3）

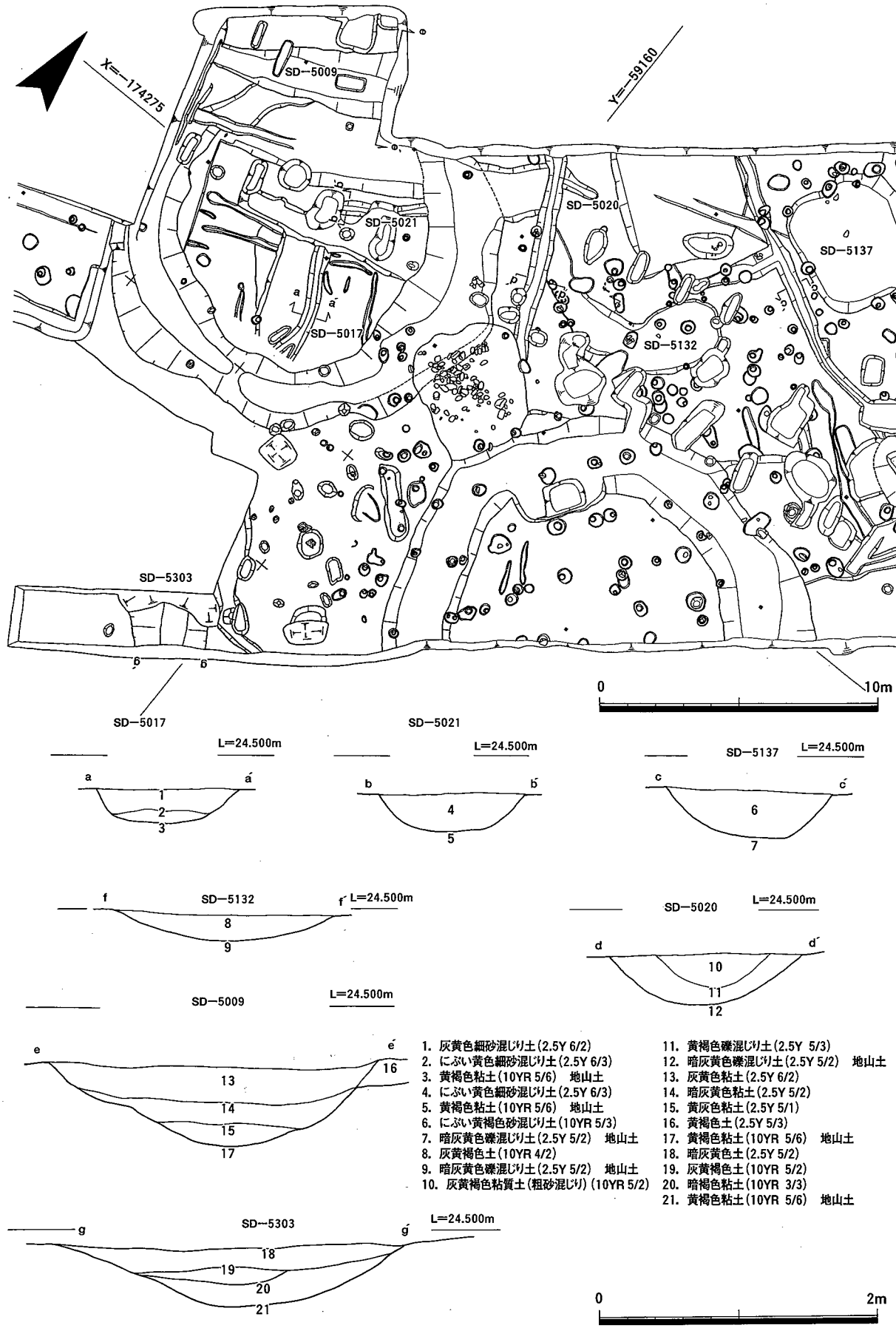


図9 SD−5009、SD−5017、SD−5021、SD−5132、SD−5137、SD−5303(1号墳) 平・断面図

でその下は黄褐色粘土（10YR5／6）の地山である。埋土の状況から判断してSD－5021は方向が違うが同一の溝と考えられる。水の流れは南北方向でほぼ90度に曲折することから区画溝の可能性がある。遺物は瓦器、土師質土器、須恵器などの14世紀後半のものが出土した。

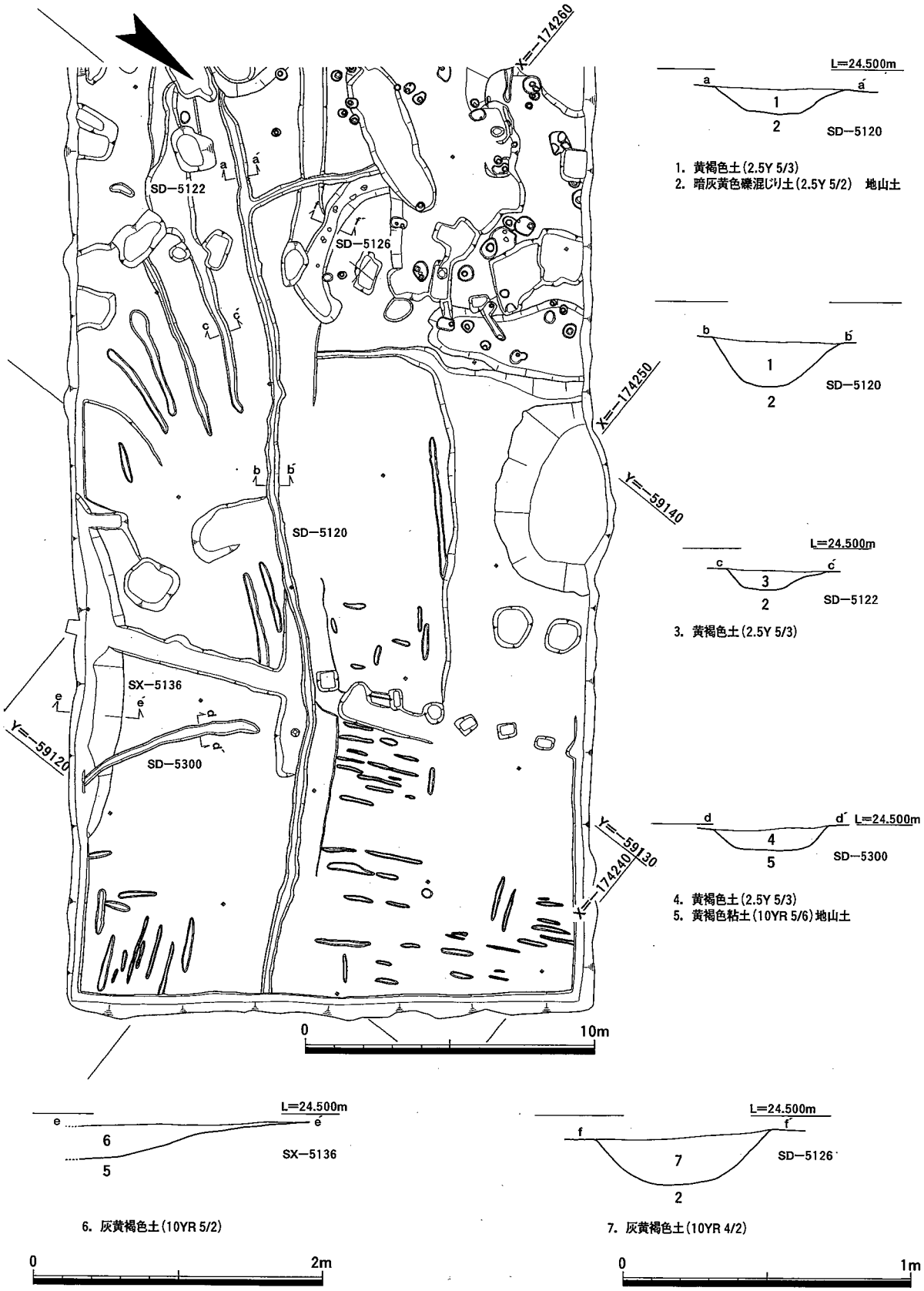


図10　SD－5120、SD－5122、SD－5126(6号墳)、SX－5136、SD－5300平・断面図

SD－5020（図９、図版13）

本遺構はJ－７、J－８、K－７区にて検出した溝である。検出長7.4m、幅0.76m、深さ0.15m～0.26mである。埋土は２層に分けられ上層より灰黄褐色粘質土（10YR5／2）、黄褐色礫混じり土（2.5Y5／3）でその下は暗灰黄色礫混じり土（2.5Y5／2）の地山である。遺物は出土していないが、本溝が埋没後に柱穴等の遺構に掘削されており、12世紀あるいは13世紀代の遺構の可能性がある。

SD－5021（図９）

本遺構はK－８、L－８区にて検出した溝である。検出長3.1m、幅0.55m、深さ0.07～0.16mである。埋土はにぶい黄色細砂混じり土（2.5Y6／3）でその下は黄褐色粘土（10YR5／6）の地山である。先に説明したとおりSD－5017と同一の溝の可能性がある。遺物は、瓦器、土師器、瓦が出土しており、14世紀後半の時期が与えられる。

SD－5137（図９、図版13）

本遺構はI－６、I－７、J－６、H－７区にて検出した溝である。検出長10m、幅0.65m、深さ0.17～0.29mである。溝断面は緩やかなU字状で埋土はにぶい黄褐色砂混じり土（10YR5／3）で地山は暗灰黄色礫混じり土（2.5Y5／2）である。溝の方向は北北西－南南東方向で溝の先には井戸（SE－5121）があり、南南西方向から溝がT字状に合流する。

遺物は、瓦器、土師器、瓦が出土しており、出土遺物から14世紀後半と考えられる。溝検出状況や形状から判断して集落を区画する溝あるいは生活排水のための溝と考えられる。

SD－5120（図10、図版14）

本遺構はF－５、F－６区にて検出した溝である。検出長31m、幅0.5m、深さ0.08～0.15mである。溝の方向は南西－北東方向で北西方向から溝がT字状に合流する。溝断面は緩やかなU字状で埋土は黄褐色土（2.5Y5／3）で地山は暗灰黄色礫混じり土（2.5Y5／2）である。遺物は瓦器、土師器、須恵器、瓦が出土しており、出土遺物から14世紀後半と考えられる。検出状況や形状から耕作に伴う溝と考えられる。

SD－5122（図10）

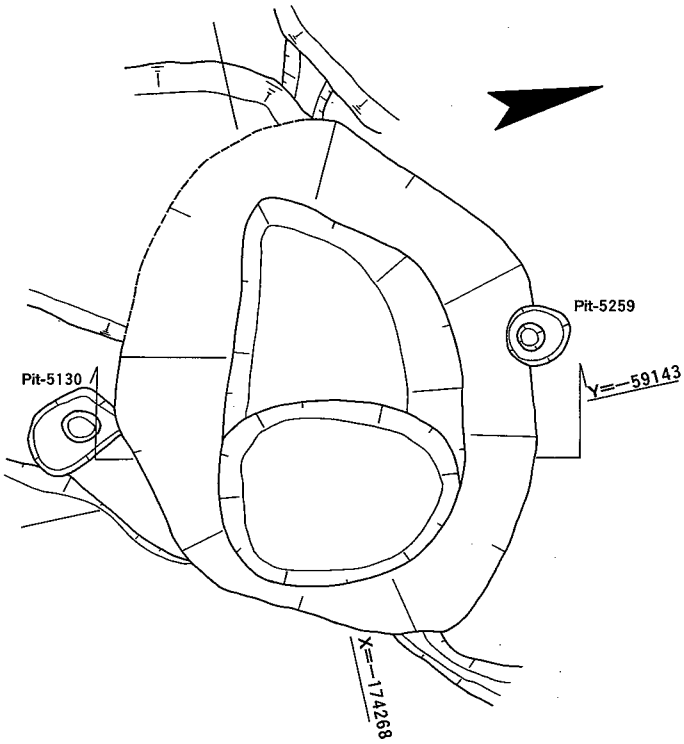
本遺構はE－６、E－７、F－６、F－７、G－７、G－８区にて検出した溝である。検出長11.54m、幅0.3～1.60m、深さ0.04m～0.13mである。溝の方向は南西－北東方向でSD－5120とほぼ平行である。遺物は瓦器、土師器、須恵器、瓦で出土遺物から14世紀後半の溝と考えられる。検出状況や形状から判断して耕作に伴う溝と考えられる。

SD－5300（図10、図版14）

本遺構はC－４、C－５、D－４区にて検出した溝である。検出長6.22m、幅0.49m、深さ0.07mである。南南東－北北東方向で埋土は黄褐色土（2.5Y5／3）で溝断面は緩やかなU字状である。検出状況や形状から判断して耕作に伴う溝と考えられる。遺物は出土していない

SE－5121（図11、図版15）

本遺構はG－７区にて検出した井戸である。素掘りで長軸3.25m、短軸2.75mの楕円状で、深さ3.4mである。埋土は４層にわけられる。上層よりにぶい黄褐色粘質土（10YR4／3）、浅黄褐色粘土（2.5Y7／4）、黄灰色砂～粘土（2.5Y5／1）、黄灰色砂～粘土（2.5Y5／1）葉枝を多く含む層である。埋土の状況から井戸として使用されなくなってから自然に埋没がすすみ、その後一度に埋め戻しがされたと考えられる。遺物は、瓦器、土師器、東播系須恵器こね鉢が出土しており、出土遺物から判断して13世紀前半と考えられる。本井戸で近接して検出した柱穴（Pit－5130、Pit－5259）は上部構造の柱を建てた柱穴である可能性がある。また、周辺で検出した溝には本井戸と同時期の遺構が存在する可能性があるが、後世の開発による削平や撹乱等によりわからない状況である。



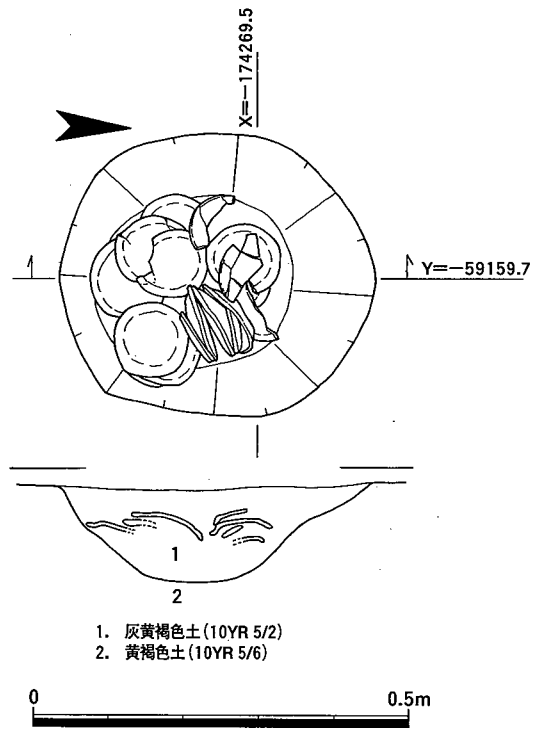


図12　SK−5004平・断面図

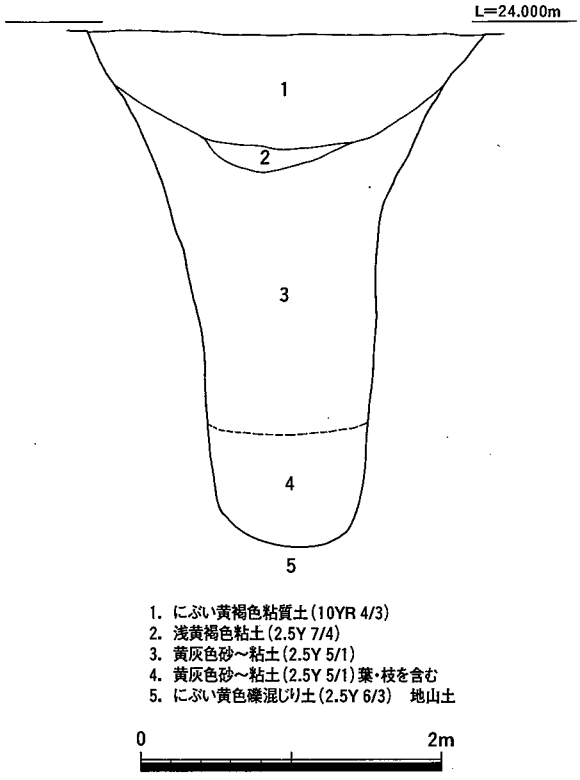


図11　SE−5121平・断面図

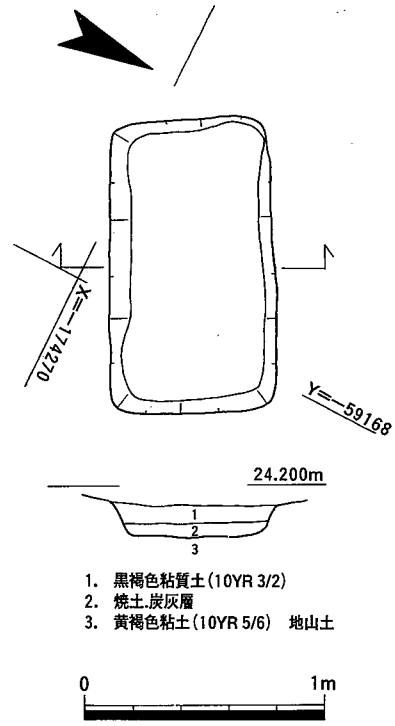


図13　SK−5346平・断面図

SK－5004（図12、図版16）

本遺構はH－５、H－６区にて検出した土坑である。直径0.4mの円形で深さ0.12mである。埋土は灰黄褐色土（10YR5／2）で土師器小皿が20枚以上重なった状態で出土しており、地鎮遺構と考えられる。

SK－5346（図13、図版16）

本遺構はL－７区にて検出した土坑である。SD－5009により上層が削り取られており、長さ1.22m、幅0.69m、深さ0.13mである。埋土は２層にわけられ上層より黒褐色粘質土（10YR3／2）、焼土、炭灰層で土坑壁部分は熱をうけて赤く焼けている。遺物は出土しておらず時期はわからないが、埋土の状況等から火葬墓の可能性がある。

SX－5003（図10）

本遺構はF－３、F－４、G－３、G－４区で検出した井戸である。調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、検出直径6.7m、検出長3.8m、深さ約２mである。素掘りの井戸で、井戸の規模や形状、埋土の状況から判断して、耕作に伴う井戸と考えられる。遺物は瓦器、土師器、須恵器、瓦等が出土しており、出土遺物から判断して中世と考えられる。

柱穴群（図版17）

調査区中央部から南西部分にかけて、柱穴を多数検出している。検出した柱穴の中には束石と考えられる石が入るもの、柱穴の埋土から瓦器椀、土師皿、瓦等の遺物が出土したものもある。遺構が密集しており、建物の復元は難しく今後さらに詳細に検討する必要がある。

４．出土遺物

古墳時代の遺物

SD－5011（図14、15、図版18、19）

２、３、５、６は坏蓋である。２は復元口径12.6cmである。３は口径12.8cm、器高3.9cmである。５は口径13.5cm、器高4.2cmである。６は口径13.8cm、器高4.2cmである。４、７、24は坏身である。４は口径11.0cm、器高4.3cmである。７は復元口径12.0cmである。24は口径10.8cm、器高4.6cmである。

８は無蓋高坏である。口径17.0cmの口縁部の破片である。18、19は壺である。18は復元口径22.5cm、19は復元口径25.8cmである。

１は器台である。口径29.0cm、器高29.5cmである。数点の破片を除いて復元が可能である。脚台部の透かしは３段あり上段２段は長方形、下１段は三角形である。器台は従前の調査で１号墳から復元可能な１点が出土しただけであったが、今回の調査では別個体と考えられる小さな破片が数点出土している。小片で復元できなかったが１号墳以外からも出土することがわかった。

SD－5022（図15、図版18、19）

９、16は高坏である。９は口径19.2cmで脚部透かしは４方向である。16は有蓋で口径10.4cm、脚部透かしは３方向である。

21、22は坏蓋である。21は復元口径12.6cmである。22は口径12.4cm、器高4.5cmである。25、26は壺である。25は復元口径26.0cmである。26広口壺で復元口径38.8cmである。

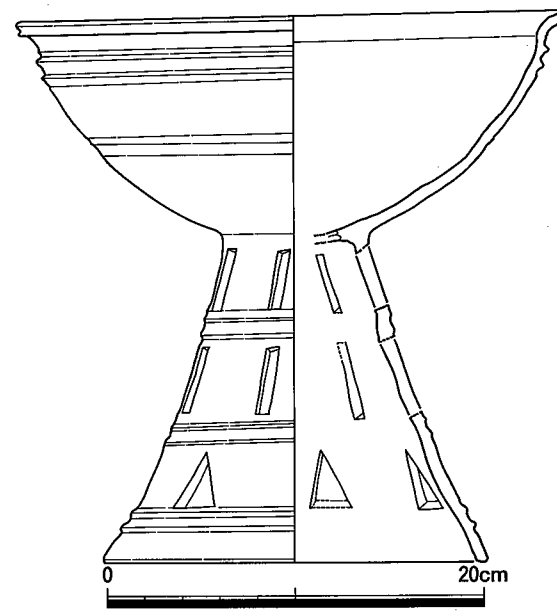


図14　２号墳（SD－5011）出土須恵器

SD－5126(図15、図版20)

10、14は、坏蓋である。10は口径11.8cm、器高4.0cmである。14は口径12.0cm、器高4.3cmである。11、12、15は、坏身である。11は口径9.6cm、器高4.9cmである。12は口径10.6cm、器高5.5cmである。15は口径10.4cm、器高5.5cmである。10と11、14と15は大きさ、形状から坏蓋と坏身のセットと考えられる。

SD－5132(図15、図版20)

13は復元口径13.4cmの坏蓋である。20は復元口径9.7cmの坏身である。17は口径18.9cmの高坏である。脚部が欠失しているが坏底部の痕跡から透かしは４方向であることがわかる。

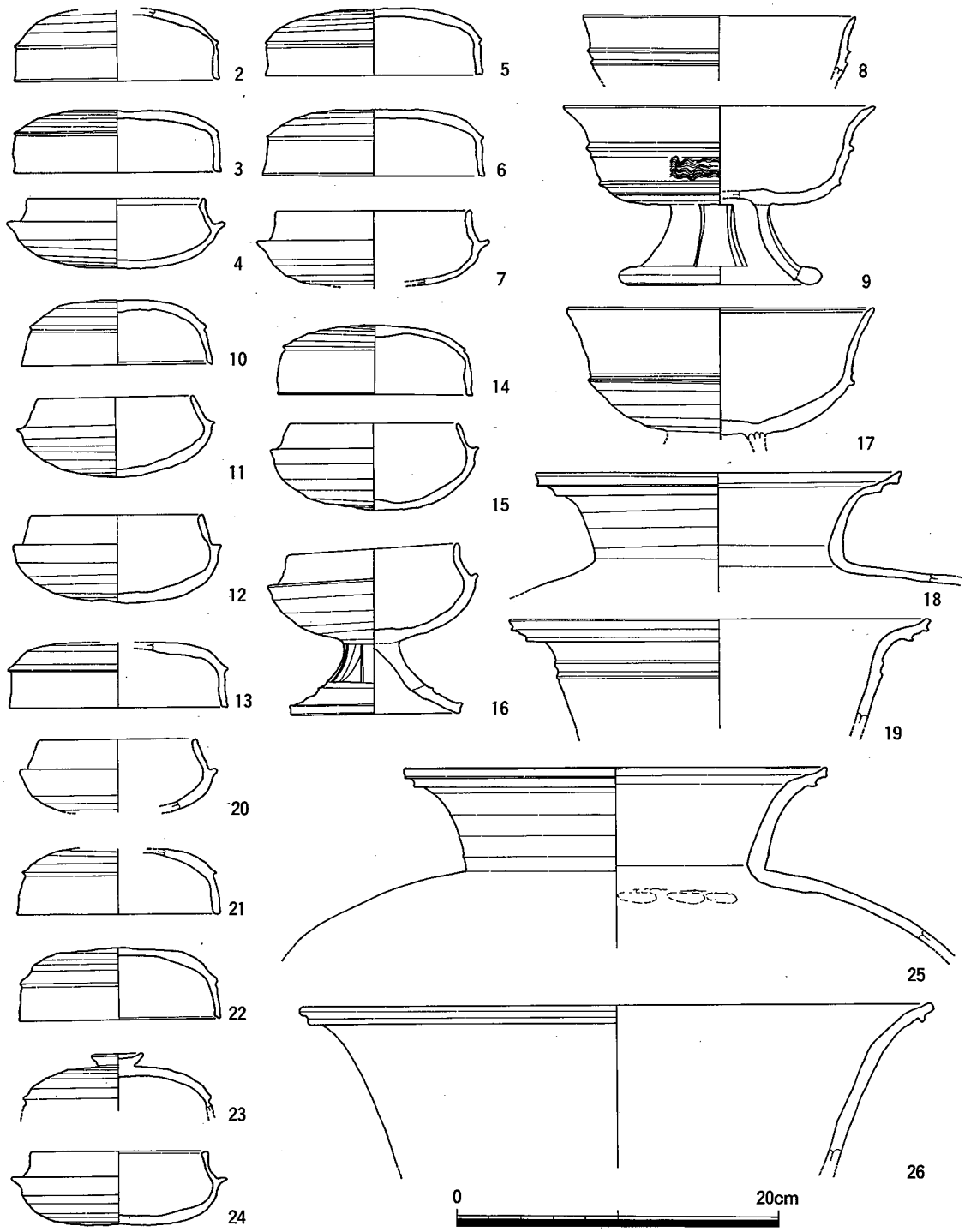


図15　SD－5011（２～８、18、19、24）、SD－5022（９、16、21、22、25、26）、SD－5126（10～12、14、15）、SD－5132（13、17、20）、SD－5303（23）出土須恵器

SD－5303

24はツマミ付坏蓋である。口縁部が欠失しており口径不明である。ツマミ付の坏蓋は1号墳から出土しているのみである。

平安時代以降の遺物

緑釉陶器（図16、図版26）

27、28は緑釉陶器壺底部である。

27はSX－5002から出土した。復元高台径16.3cmである。28は遺物包含層第4層から出土した。復元高台径17.2cmである。同一個体の可能性もあるが、高台径が違うこと、出土地点が離れていること、摩滅の状況が違うことなどから別個体として扱った。

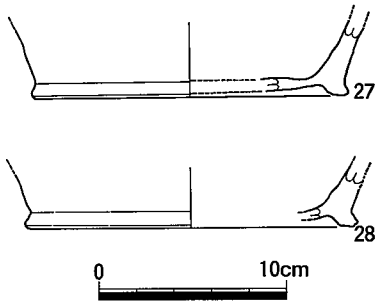


図16　緑釉陶器

SK－5004（図17、図版21）

29～49は土師器小皿である。本遺構出土で復元あるいは実測可能なものは20点である。実測できない破片が数点残っており出土点数は20点を越えると考えられる。以下、法量を示す。

29は口径7.4cm、器高1.1cmである。30は口径9.2cm、器高1.4cmである。31は口径9.3cm、器高1.7cmである。32は口径9.4cm、器高1.4cmである。33は口径9.4cm、器高1.5cmである。34は口径9.0cm、器高1.6cmである。35は口径9.3cm、器高1.5cmである。36は口径9.3cm、2.1cmである。37は復元口径9.5cm、器高は1.5cmである。38は口径9.6cm、器高1.7cmである。39は口径9.2cm、器高1.7cmである。40は口径9.3cm、器高1.5cmである。41は口径9.4cm、器高1.6cmである。42は口径9.5cm、器高1.5cmである。43は口径9.6cm、器高は1.6cmである。44は口径9.2cm、器高1.6cm、45は口径9.3cm、器高1.5cmである。46は口径9.4cm、器高1.7cmである。47は口径9.5cm、器高1.9cmである。48は口径15.1cmで器高1.0cmである。49は口径9.2cm、器高1.7cmである。

口径は29が7.4cmと小さく、48が15.1cmと大きいが他は口径9.2～9.6cmでほぼ均一である。器高は焼き歪みにより1.0～2.1cmと幅はあるものの1.5cm前後のものが多い。口縁部はいわゆる「ての字状口縁」のようであるが比較

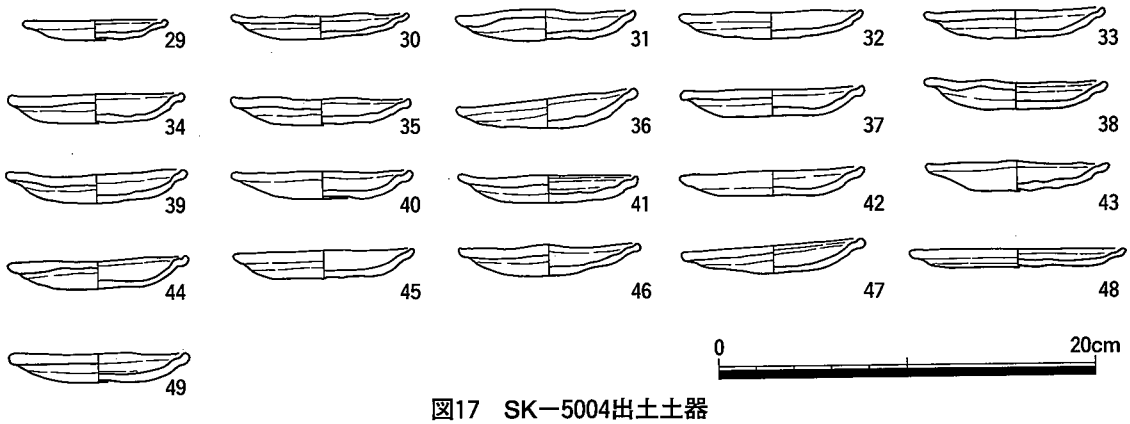


図17　SK－5004出土土器

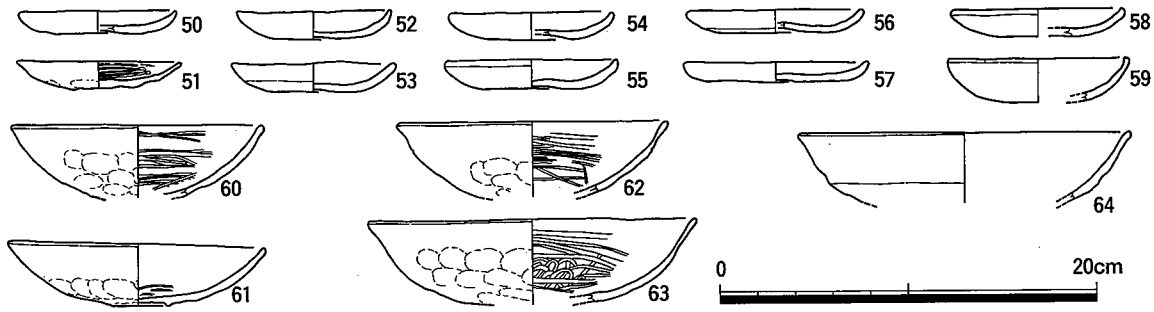


図18 SK－5072（50、51、59）、SK－5075（52～58、60、62～64）、SK－5148（61）出土土器

的扁平である。また、口縁端部付近は指ナデにより仕上げられている。

SK－5072(図18)

50、59は土師器小皿である。50は口径8.2cm、器高1.2cmである。59は復元口径9.0cmである。

51は口径8.5cm、器高1.6cmの瓦器小皿である。

SK－5075(図18、図版21)

52～58は土師器小皿である。52は口径8.1cm、器高1.5cmである。53は口径8.4cm、器高1.6cmである。54は復元口径8.5cm、器高1.4cmである。55は口径9.0cm、器高1.6cmである。56は復元口径9.1cm、器高1.7cm、57は口径9.5cm、器高1.1cmである。58は復元口径9.0cm、器高1.5cmである。

60、62～64は瓦器椀である。60は復元口径13.2cmで外面に指オサエ、内面にミガキを施す。62は復元口径14.2cmで外面に指オサエ、内面にミガキを施す。63は、復元口径17.3cmで外面に指オサエ、内面にミガキを施す。64は復元口径17.5cmである。内外面ともに摩滅が激しく調整は不明である。

SK－5148(図18)

61は口径13.5cm、器高3.5cmの瓦器椀である。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。高台は貼付けで断面逆三角形であるが退化傾向にあり、14世紀後半の時期のものと考えられる。

SE－5121(図19、図版22)

65～67は土師器小皿である。65は復元口径9.1cm、器高1.6cmである。66は口径8.7cm、器高1.4cmである。67は復元口径9.7cm、口径1.6cmである。

68、71は瓦器小皿である。68は口径10.0cm、器高2.4cmである。外面底部付近に指オサエ、内面にミガキを施す。71は復元口径12.1cm、器高2.4cmである。外面底部付近に指オサエ、内面にミガキを施す。

69、70、72～74は瓦器椀である。69は復元口径14.2cm、器高4.4cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。高台は貼付けで断面逆三角形である。70は口径15.5cm、器高4.4cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。高台は貼付けで断面逆台形である。72は口径15.4cm、器高5.2cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。高台は貼付けで断面逆台形である。73は復元口径15.4cm、器高5.4cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。高台は貼付けで断面逆三角形である。74は復元口径16.6cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。

75は復元口径24.0cmの瓦質こね鉢である。76は口径32.8cm、器高12.3cmの須恵質こね鉢である。片口部があり、

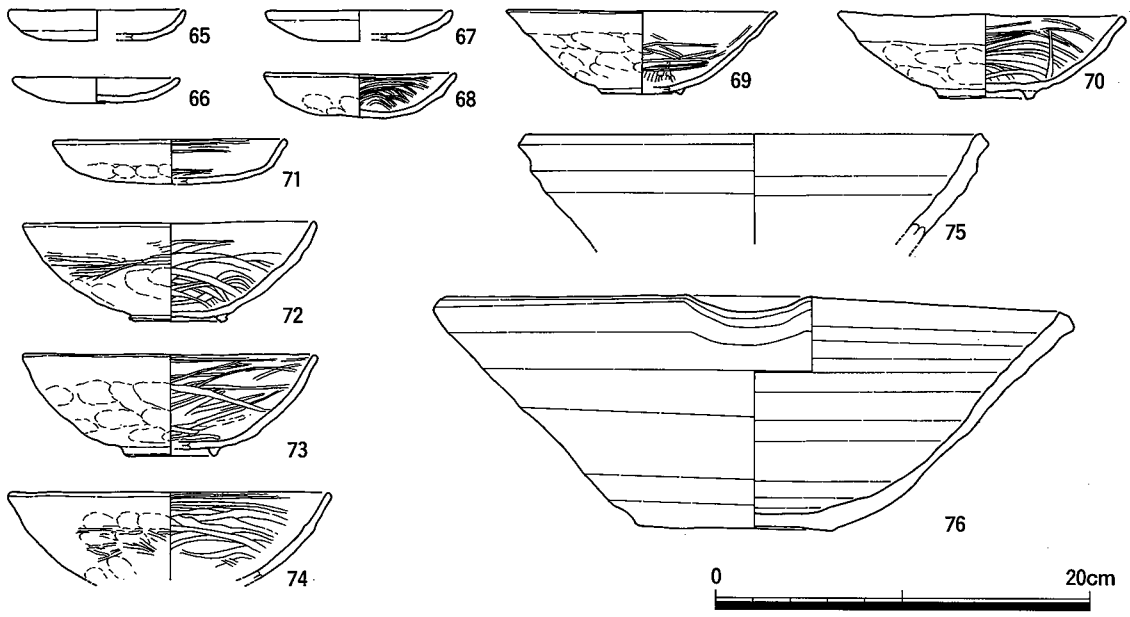


図19 SE－5121出土土器

東播系須恵器のこね鉢と考えられる。

SD－5011（図20、図版22）

77～87は土師器小皿である。77は復元口径7.7cm、器高1.2cmである。78は復元口径7.8cm、器高1.3cmである。79は復元口径9.4cm、器高1.4cmである。80は復元口径12.0cm、器高1.8cmである。外面底部付近に指オサエを施す。81は復元口径7.8cm、器高1.3cmである。82は復元口径8.2cm、器高1.4cmである。83は復元口径7.4cm、器高1.6cmである。84は復元口径9.2cm、器高1.7cmである。外面底部付近に指オサエを施す。85は口径8.8cm、器高1.3cmである。86は復元口径10.0cm、器高1.5cmである。外面底部付近に指オサエを施す。87は復元口径14.9cm、器高3.0cm

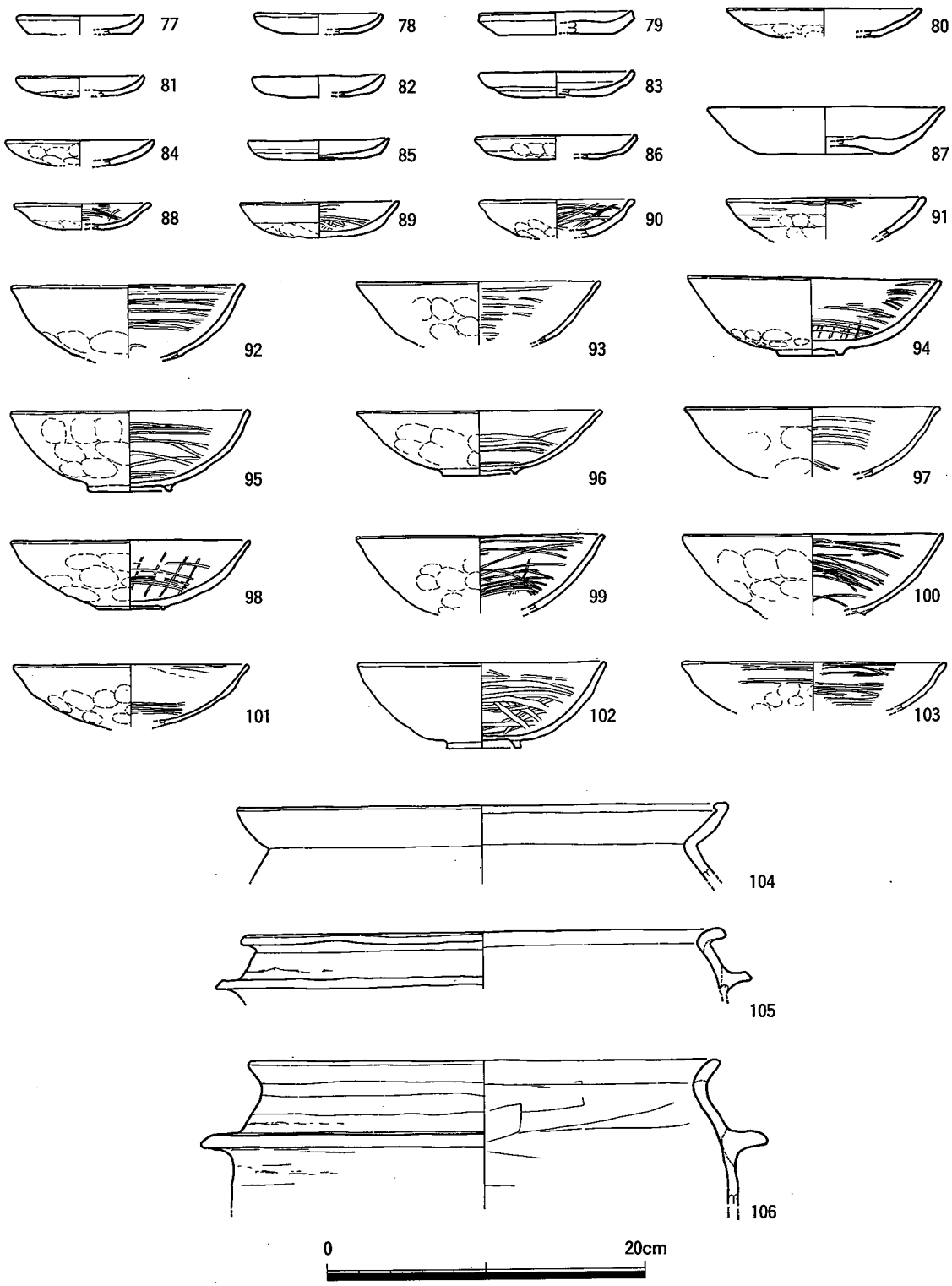


図20 SD－5011出土土器

である。内面中央部がヘソ皿状にふくらむ。

88～91は瓦器小皿である。88は復元口径8.4cm、器高2.2cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。89は口径9.8cm、器高2.2cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。90は復元口径9.6cm、器高2.4cmである。91は復元口径12.4cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。

92～103は瓦器椀である。92は復元口径14.4cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。93は復元口径15.2cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。94は復元口径15.7cm、器高5.1cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。高台は貼付けで断面逆台形である。95は口径14.7cm、器高5.1cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。高台は貼付けで断面逆台形である。96は15.2cm、器高4.2cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。高台は貼付けで断面逆台形である。97は復元口径15.8cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。98は口径14.8cm、器高4.3cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。高台は貼付けで断面逆三角形である。99は復元口径15.3cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。100は復元口径16.2cm、器高5.1cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。高台は貼付けで断面逆三角形である。101は復元口径14.6cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。102は口径15.5cm、器高5.4cmである。内面にミガキを施す。103は復元口径16.4cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。

104は復元口径30.6cmの土師質壺である。頸部でくの字状に曲折し口縁部は外方にのびる。

105、106は土師質羽釜である。105は復元口径29.6cmで口縁部から鍔部にかけての破片である。106は復元口径28.6cmである。外面では鍔部の貼付け痕がみられ、内面では工具痕がのこる。

SD－5021（図21）

109、110は土師器小皿である。109は口径8.0cm、器高1.3cmで、口縁部に横ナデを施す。110は口径8.8cm、器高1.6cmである。口縁部に横ナデを施す。

SD－5022（図21、図版23）

108、111～115は土師器小皿である。108は復元口径7.4cm、器高1.1cmである。111は復元口径8.2cm、器高1.2cmである。112は口径、8.8cm、器高1.5cmである。113は復元口径9.6cm、器高1.3cmである。114は復元口径10.8cm、器高1.1cmである。115は復元口径10.5cm、器高1.1cmである。

119は復元口径10.6cmの瓦器小皿である。外面底部付近に指オサエ、内面にミガキを施す。

120、121、124、125、127は瓦器椀である。120は口径13.6cm、器高4.8cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。高台は貼付けで断面逆三角形である。121は復元口径14.0cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。124は口径15.1cm、器高5.1cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。高台は貼付けであり、断面逆台形である。125は復元口径15.8cmである。外面に指オサエ、内面は摩滅により調整不明である。127は復元高台径6.2cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。高台は貼付けで断面逆台形である。

SD－5023（図21）

107は復元口径6.4cm、器高1.1cmの土師器小皿である。

SD－5122（図21）

116、117は瓦器小皿である。116は口径9.4cm、器高1.9cmである。外面底部付近に指オサエ、一部でミガキ、内面にミガキを施す。117は復元口径9.6cm、器高1.6cmである。内面にミガキを施す。

123は復元口径15.8cmの瓦器椀である。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。

SD－5137（図21）

122、126、128、129は瓦器椀である。122は復元口径14.6cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。126は復元口径14.8cmである。内面にミガキを施す。128は復元口径15.7cm、器高4.2cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。高台は貼付けで断面逆台形である。129は復元口径16.3cm、器高5.5cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。高台は貼付けで断面逆台形である。

Pit－5029（図22）

143は口径14.6cm、器高5.3cmの瓦器椀である。内面にミガキを施す。外面は摩滅が激しく調整は確認できなかっ

た。高台は貼付けで断面逆三角形である。

Pit−5040(図22)

138は復元口径14.6cmの瓦器椀である。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。

Pit−5067(図22)

130は復元口径8.4cm、器高1.5cmの土師器小皿である。

Pit−5068(図22)

133は復元口径14.4cm、器高3.6cmの瓦器椀である。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。高台は貼付けで断面逆三角形である。

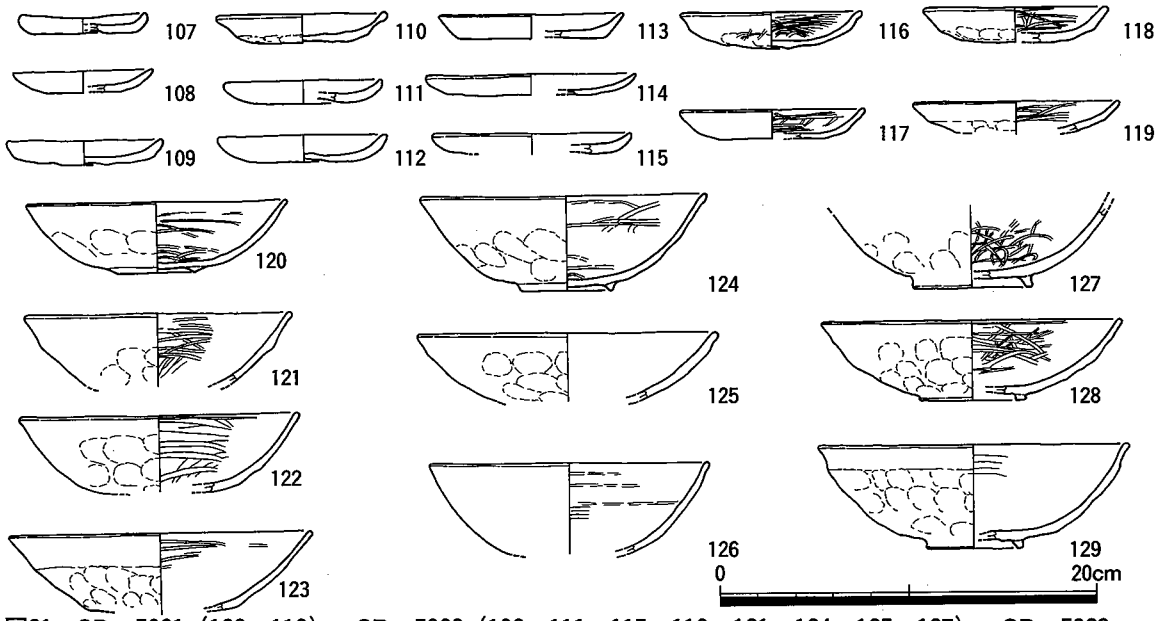


図21　SD−5021（109、110）、SD−5022（108、111〜115、118〜121、124、125、127）、SD−5023（107）、SD−5122（116、117、123）、SD−5137（122、126、128、129）出土土器

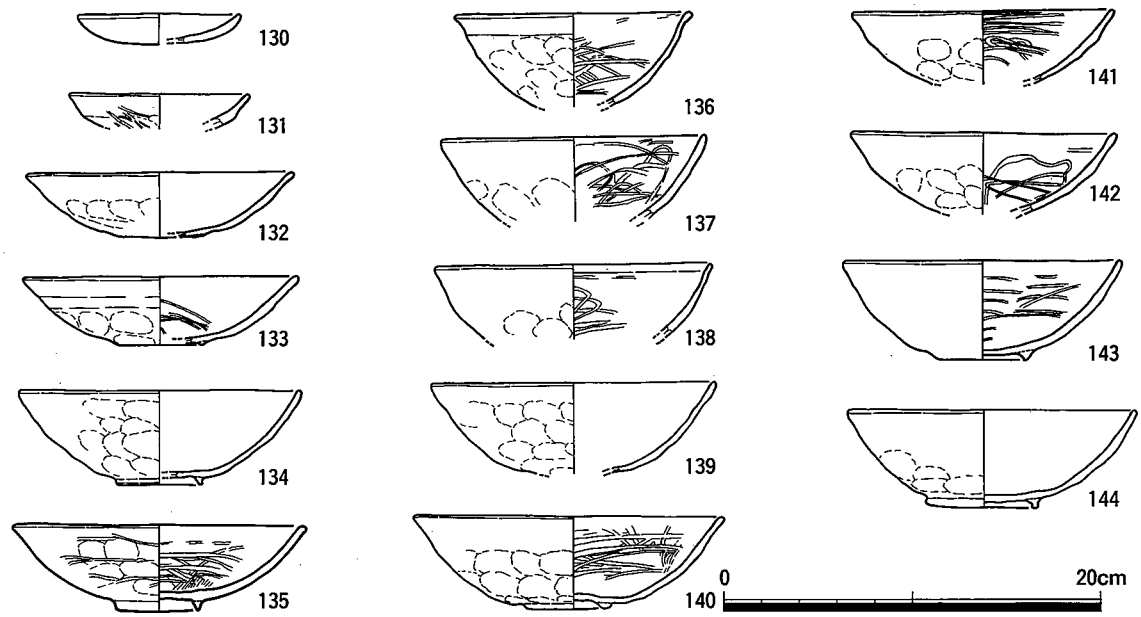


図22　Pit−5029(143)、Pit−5040(138)、Pit−5067(130)、Pit−5068(133)、Pit−5104（134、139)、Pit−5128（131、141)、Pit−5146（136)、Pit−5161（135)、Pit−5208（144)、Pit−5252（137、142)、Pit−5264（132)、Pit−5310（140）出土土器

Pit－5104（図22）

134、139は瓦器椀である。134は復元口径14.7cm、器高5.0cmである。外面に指オサエ、内面は摩滅により調整不明である。高台は貼付けで断面逆三角形である。139は復元口径15.0cmである。外面に指オサエ、内面は摩滅により調整不明である。

Pit－5128（図22）

131は復元口径9.4cmの瓦器小皿である。外面に指オサエ、ミガキ、内面は摩滅により調整不明である。

Pit－5146（図22）

136は復元口径12.3cmの瓦器椀である。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。

Pit－5161（図22）

135は口径15.2cm、器高4.6cmの瓦器椀である。外面に指オサエ、ミガキ、内面にミガキを施す。高台は貼付けで断面逆三角形である。

Pit－5208（図22、図版23）

144は口径15.2cm、器高5.2cmの瓦器椀である。外面に指オサエ、内面は摩滅により調整不明である。

Pit－5252（図22）

137、142は瓦器椀である。137は復元口径13.9cmで、外面に指オサエ、内面にミガキを施す。142は復元口径14.0cmで、外面に指オサエ、内面にミガキを施す。

Pit－5264（図22）

132は復元口径14.0cm、器高3.5cmの瓦器椀である。外面に指オサエ、内面は摩滅により調整不明である。

Pit－5310（図22、図版23）

140は口径17.4cm、器高5.0cmの瓦器椀である。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。

SX－5002（図23、図版23）

145～153は土師器小皿である。145は復元口径5.6cm、器高1.1cmである。146は口径7.8cm、器高1.2cmである。147は復元口径7.6cmである。148は復元口径8.2cm、器高1.5cmである。149は復元口径10.2cmである。150は復元口径8.2cm、器高1.2cmである。151は口径8.0cm、器高1.6cmである。152は復元口径8.6cm、器高1.2cmである。153は復元口径12.6cmである。

154～158は瓦器小皿である。154は復元口径8.7cm、器高1.6cmである。内外面は摩滅により調整不明である。155は口径8.5cm、器高1.6cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。156は口径9.0cm、器高2.0cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。157は口径9.2cm、器高1.9cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。158は復元口径9.6cm、器高2.7cmで、内面にミガキを施す。

159～171は瓦器椀である。159は復元口径13.2cmで外面に指オサエ、内面にミガキを施す。160は復元口径13.0cmで、外面に指オサエ、内面にミガキを施す。161は復元口径13.8cmで、外面に指オサエ、内面にミガキを施す。162は復元口径14.0cmで、外面に指オサエ、内面にミガキを施す。163は復元口径14.0cmで、外面に指オサエ、内面にミガキを施す。164は復元口径14.4cmで、外面に指オサエ、内面にミガキを施す。165は復元口径14.4cmで、外面に指オサエ、内面にミガキを施す。166は復元口径14.6cmで、外面に指オサエ、内面にミガキを施す。167は復元口径14.8cmで、外面に指オサエ、内面にミガキを施す。168は復元口径15.2cm、器高3.9cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。高台は貼付けで断面逆三角形である。169は復元口径15.6cmで、外面に指オサエ、内面にミガキを施す。170は復元口径16.2cmで、外面に指オサエ、内面は摩滅により調整不明である。171は復元口径16.6cmで、外面に指オサエ、内面にミガキを施す。

172は瓦質足鍋の脚部片である。173は復元口径26.6cmの須恵質こね鉢である。174は復元口径19.0cmの土師質羽釜である。鍔部は貼付けで、頸部はくの字状に曲折し口縁端部は丸く収まる。175は復元口径29.0cmの瓦質こね鉢である。口縁端部は断面逆三角形で、内面に工具痕が残る。

SX－5001（図24）

181は復元口径8.8cmの瓦器小皿である。196は復元口径16.8cmの瓦器椀で、外面に指オサエ、内面にミガキを

施す。

SX－5006（図24、図版24）

176、177、185は土師器小皿である。176は口径7.6cm、器高1.5cmである。177は口径7.8cm、器高1.7cmである。185は復元口径14.4cm、器高1.9cmである。179は復元口径6.8cmの瓦器小皿である。外面底部付近に指オサエを施す。186～189は瓦器椀である。186は復元口径11.4cmで、外面に指オサエ、内面にミガキを施す。187は復元口径12.6cmで、外面に指オサエ、内面にミガキを施す。188は復元口径13.2cmで、外面に指オサエ、内面にミガキを施す。189は復元口径14.0cmで、外面に指オサエ、内面にミガキを施す。199は陶器壺口縁部片である。小片のため口径不明、常滑あるいは瀬戸産と考えられる。201は復元口径27.8cmの須恵器こね鉢である。東播系のこね鉢と考えられる。203は復元口径28.2cmの土師質こね鉢である。

SX－5024（図24、図版24）

191、195、197は瓦器椀である。191は口径14.0cm、器高3.7cmである。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。高台は貼付けで簡略化されており、断面は逆台形である。200は瓦質足鍋の脚部片である。脚の直径は1.1cmである。

SX－5031（図24）

184は復元口径10.2cmの瓦器小皿である。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。

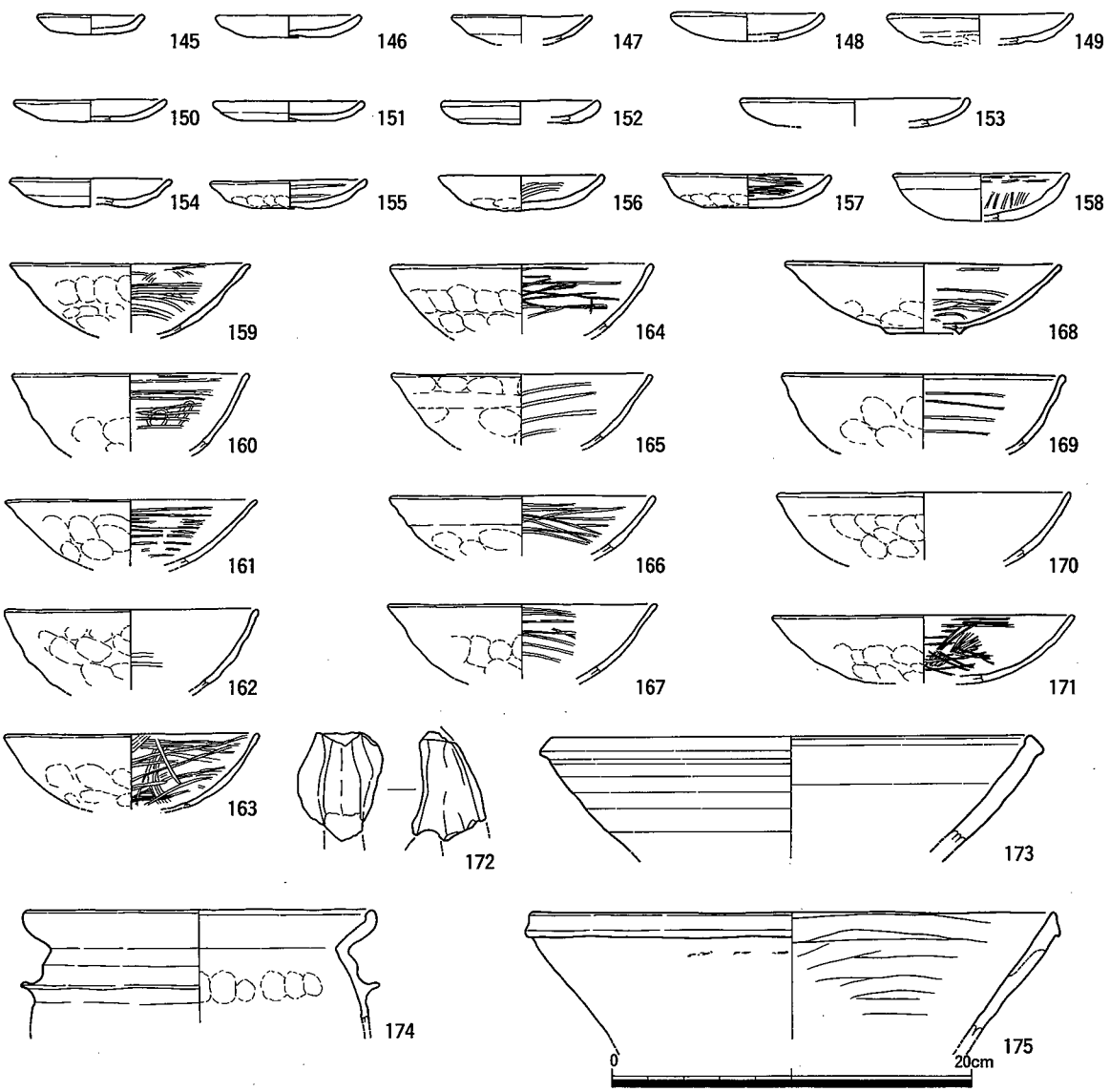


図23 SX－5002出土土器

SX－5076（図24）

178は復元口径7.8cm、器高1.3cmの土師器小皿である。192は復元口径14.4cm、器高4.4cmの瓦器椀である。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。

SX－5081（図24、図版24）

183は口径9.6cm、器高2.3cmの瓦器小皿である。外面に指オサエを施す。

SX－5119（図24、図版24）

198は陶器壺口縁部片である。小片のため口径不明、常滑あるいは瀬戸産と考えられる。

SX－5133（図24）

180は口径7.8cm、器高1.0cmの瓦器小皿である。190、194は瓦器椀である。190は復元口径13.8cm、194は復元口径15.8cm、器高4.1cmで、ともに外面に指オサエ、内面にミガキを施す。

SX－5134（図24、図版24）

182は復元口径9.0cmの瓦器小皿である。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。202は復元口径29.4cmの須恵器こね鉢である。東播系須恵器と考えられる。

SX－5333（図24、図版24）

193は口径15.0cm、器高5.6cmの瓦器椀である。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。

遺物包含層第５層（図24、図版24、図版24）

204、205は土師器小皿である。204は復元口径6.5cm、器高1.2cmである。205は復元口径7.2cm、器高0.9cmである。210は復元底部径7.9cmの陶器壺である。中世陶器と考えられるが産地は不明である。216は復元口径18.0cmの瓦質羽釜である。220は足鍋脚部片である。脚部の直径は2.2cmである。

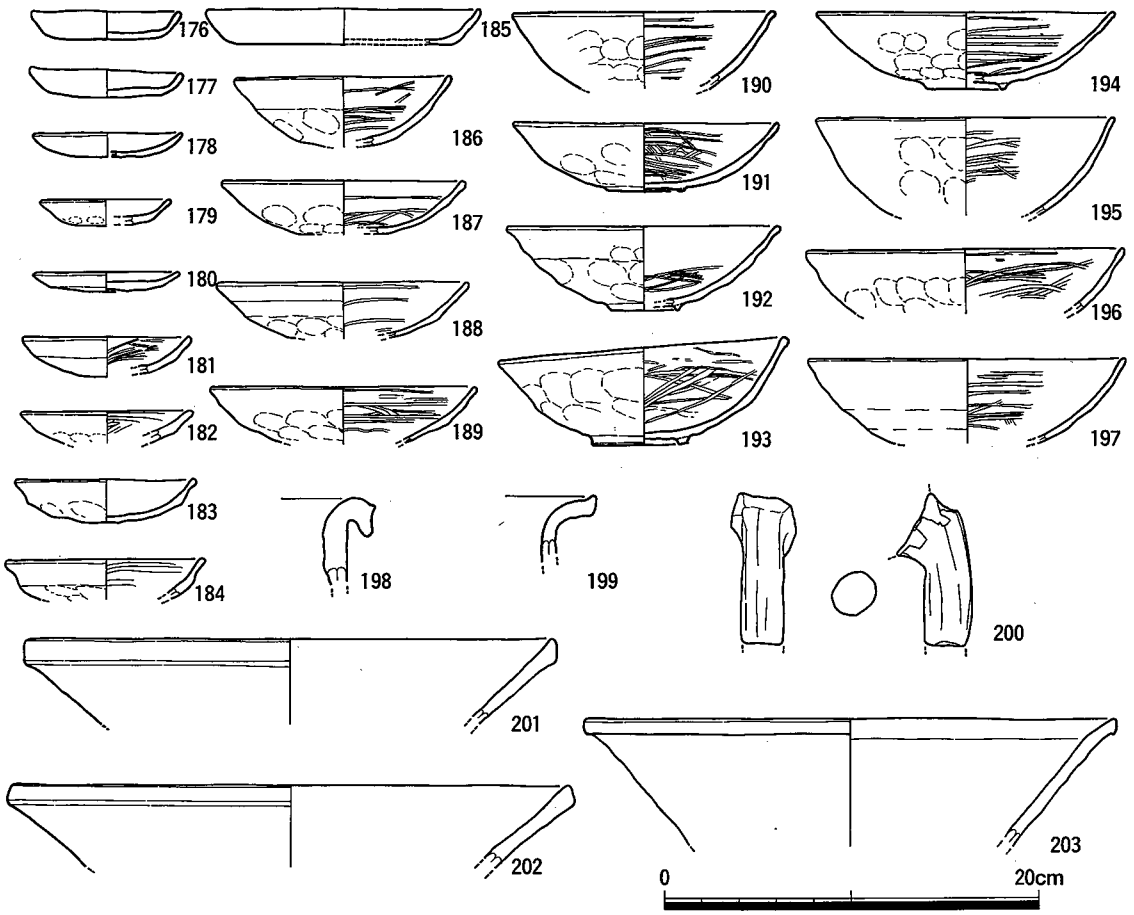


図24　SX－5001（181、196）、SX－5006（176、177、179、185～189、199、201、203）、SX－5024（191、195、197、200）、SX－5031（184）、SX－5076（178、192）、SX－5081（183）、SX－5119（198）、SX－5133（180、190、194）、SX－5134（182、202）、SX－5333（193）出土土器

遺物包含層第４層（図25、図版25）

206、207、212は土師器小皿である。206は復元口径7.6cm、器高1.2cmである。207は復元口径7.8cm、器高1.5cmである。212は復元口径12.8cm、器高2.1cmである。

209、211は瓦器小皿である。209は口径7.7cm、器高1.6cmで、外面に指オサエ、内面にミガキを施す。211は復元口径10.9cm、器高1.9cmである。

213は復元口径17.0cmの瓦器椀である。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。214は陶器壺である。小片のため口径不明、中世陶器と考えられるが産地不明である。217は復元口径20.4cmの土師質羽釜である。218は復元口径29.3cmの土師質こね鉢である。口縁端部は断面三角形である。221、222は足鍋脚部片である。222は脚部の直径2.5cmである。

遺物包含層第３層（図25）

208は復元口径6.5cm、器高1.3cmの瓦器小皿である。215は復元口径14.4cmの瓦器椀である。外面に指オサエ、内面にミガキを施す。219は復元口径30.7cmの須恵器壺である。古墳周溝等から出土した須恵器と同時期のものと考えられる。

白磁、青磁（図26、図版26）

223、231～233は白磁碗である。232はSD－5011出土で、復元口径17.9cmである。233は遺物包含層第５層出土の復元高台径7.0cmの底部片である。高台は削り出しで、露胎である。231は遺物包含層第４層出土の復元口径16.8cmである。口縁部は玉縁である。223は遺物包含層第３層出土で小片のため口径不明である。口縁部は玉縁状である。

224～230は、青磁碗である。228はSX－5006出土で復元口径14.6cmである。229はSD－5022出土で復元口径17.1cm、口縁部は端反りである。224は遺物包含層第５層出土で小片のため口径不明である。226、227、230は遺

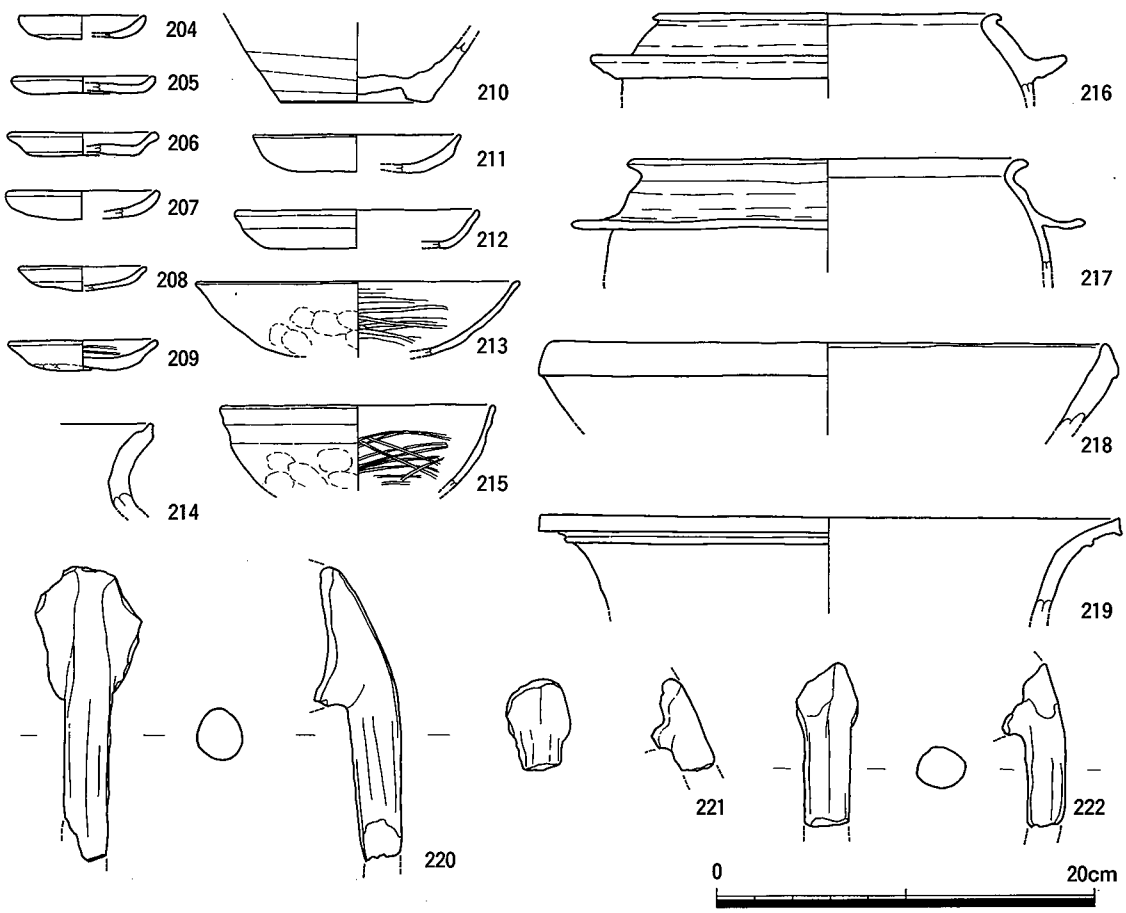


図25 遺物包含層第５層（204、205、210、216、220）、遺物包含層第4層（206、207、209、211～214、217、218、221、222）、遺物包含層第３層（208、215、219）出土土器

物包含層第４層出土である。226は小片のため口径不明である。内面に鎬蓮弁文を施す。227は復元口径6.0cmで外面に蓮弁文を描く龍泉窯系の製品である。230は復元口径17.0cmである。225は遺物包含層第３層出土で小片のため口径不明である。口縁端部は端反である。

金属製品、鉄滓、フイゴ羽口（図27、図版27）

234は遺物包含層第４層出土で、錆がかなりついているが断面を見ると何らかの製品の破片であることがわかる。235はSX－5001出土で、刃部が確認でき刀子と考えられる。236は遺物包含層第３層出土でその形状から鉄製の斧と考えられる。出土した金属製品は遺物包含層等から出土しており時期の特定がむずかしいが、墳丘および主体部まで破壊された古墳の副葬品の一部である可能性も考えられる。古墳関係の遺物は、周溝からのみであり副葬品については全くわからない状況であり金属製品だけでなく他の遺物についても検討が必要である。

237は鉄滓と考えられる。磁石には反応しない。表面にはフイゴの羽口が溶融し付着し、底の部分に炭の付着痕がある。鉄滓は他に図示できない破片が数点出土している。

238はフイゴの羽口である。復元直径は3.5cmである。フイゴの羽口は他に図示できない破片が数点出土しており鉄滓も出土していることから、中世期に集落あるいは地蔵堂廃寺に関係する鍛冶工房、一時的な作業場が存在した可能性がある。

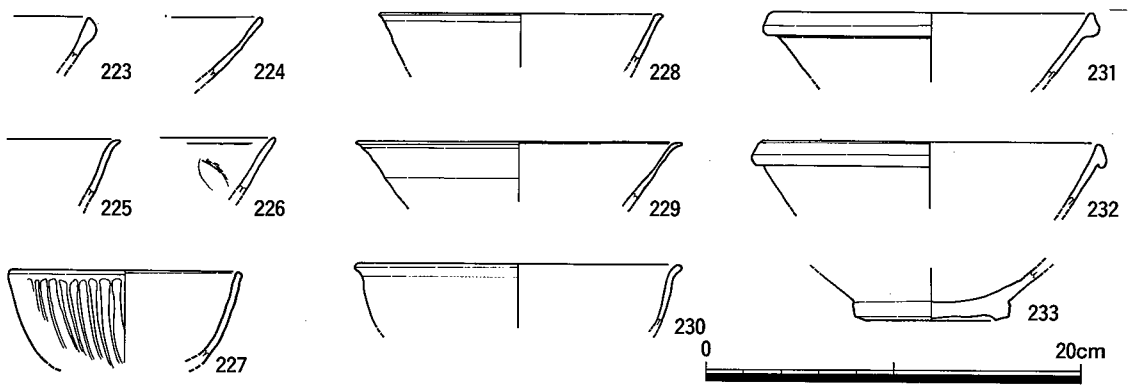


図26 青磁（224～230）、白磁（223、231～233）

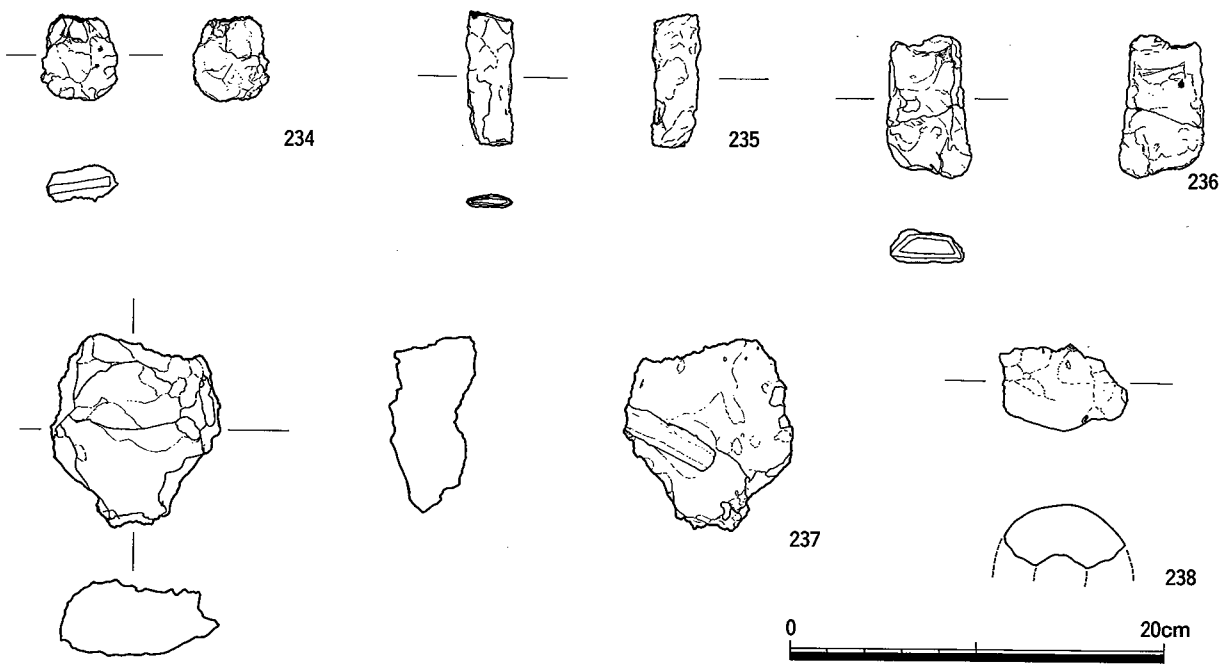


図27 金属製品（234～236）、金属滓（237）、フイゴ羽口（238）

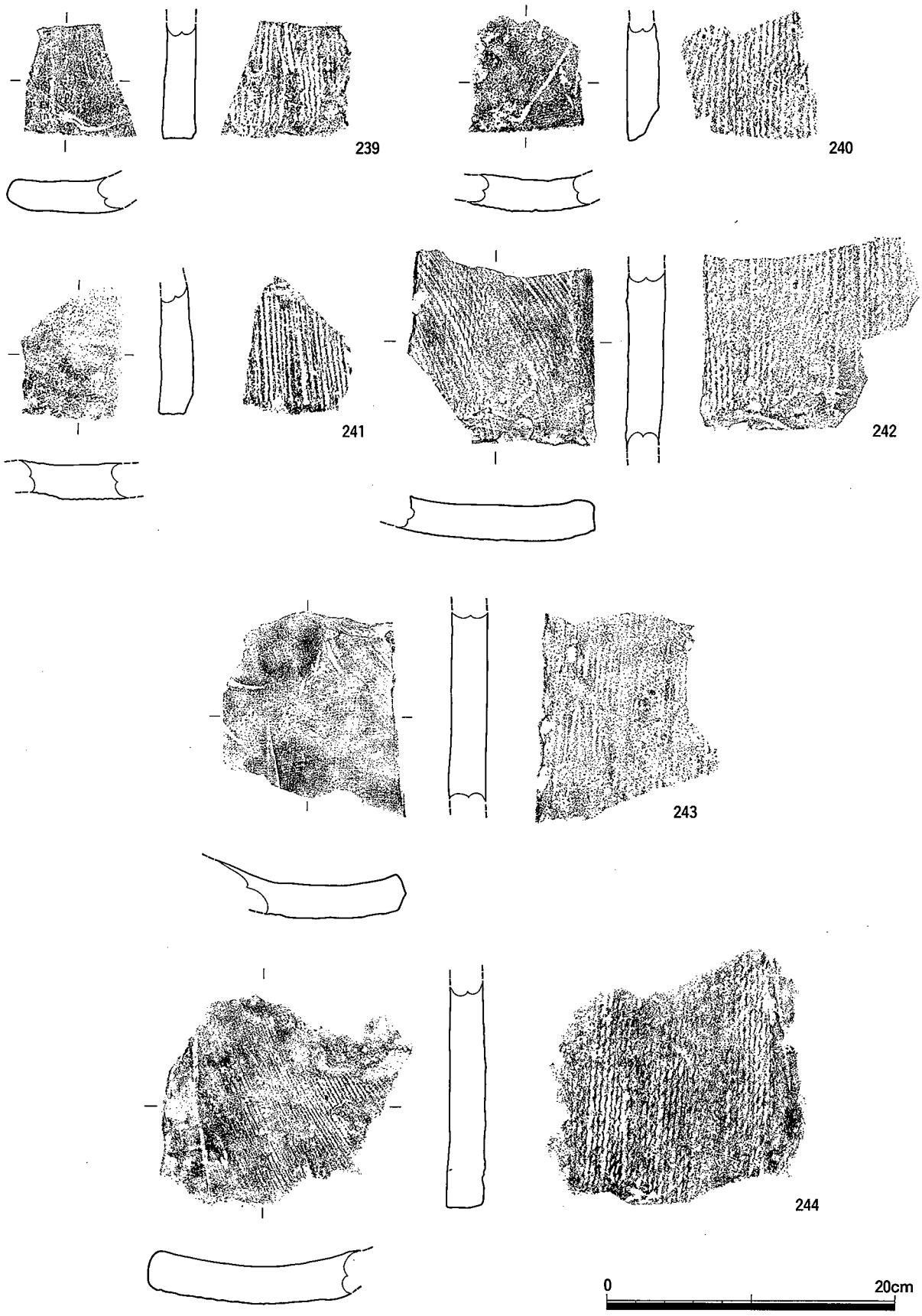


図28 出土平瓦

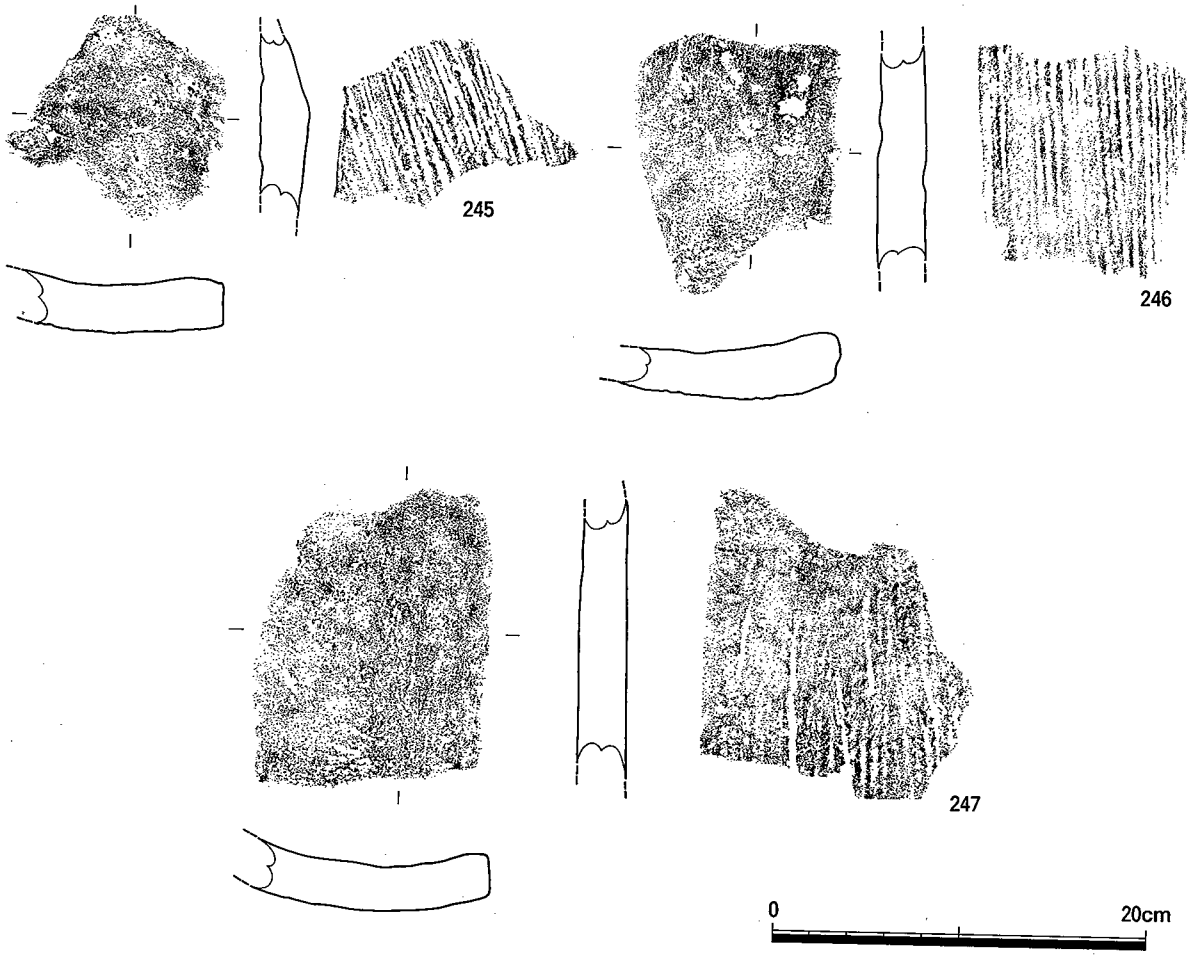


図29 出土平瓦

瓦（図28、29）

239はSD－5122出土で凸面に縄目タタキが認められ、凹面には布目痕が見られる。240はSD－5022出土で凸面に縄目タタキが認められる。241はSX－5001出土で凸面に縄目タタキが認められる。242はSD－5022出土で凸面に縄目タタキが認められ、凹面には斜め方向のコビキ痕、一部に縄目タタキが認められ、布目痕が見られる。243はSD－5122出土で、凸面に縄目タタキが認められ、凹面に布目痕が見られる。244はSX－5024出土で、凸面に縄目タタキが認められ、凹面に斜め方向のコビキ痕が見られる。245はPit－5049出土で、凸面に縄目タタキが認められる。246はPit－5068出土で凸面に縄目タタキが認められる。247はPit－5146出土で、凸面に縄目タタキが認められる。

まとめ

調査の結果、調査区全域で良好な状態で遺構を検出した。以下、時代順に本調査地についてまとめることにする。

古墳時代

これまでの調査で1号墳～4号墳を発見し、地蔵堂丸山古墳の南側に古墳群が存在することが判明した。今回の調査では1号墳の一部、2号墳の7割以上を調査することができた。また新たに5号墳、6号墳を確認した。古墳時代の遺物が出土しているの古墳の周溝と溝の遺構のみで遺物包含層から出土しているのは少ない。周溝以外で古墳時代の遺物が出土した溝2カ所（SD－5126、SD－5132）は古墳周溝の可能性があり、後世の開発により古墳が完全に破壊されていることも考えられるため、今回の調査成果で復元できる古墳群の様子よりさらに古墳と古墳が密集して群を構成している可能性もある。

飛鳥時代～奈良時代

遺物は全く出土していない状況である。遺構は、中世に大きく破壊され残っていない可能性もあるが遺構が存在したのであれば何らかの遺物が出土していると考えられるため、古墳群は破壊されていなかったと考えられる。

古墳の存在が認識されており、破壊されなかったのではないだろうか。古墳群内、周辺に飛鳥、奈良時代に焼土坑、火葬墓が造られた例は各地で報告されており、本調査において検出したSK－5346は焼土坑で火葬墓の可能性もあることから、古墳の存在が認識されていたからこそ葬送の場として本土坑が造営されたと考えられる。

平安時代

従前の調査で1号墳の古墳周溝埋土から黒色土器片が出土しており平安時代後期から古墳が破壊されたということである。今回の調査でも遺物包含層等から平安時代と考えられる土師器、緑釉陶器が出土しているが数量的にはかなり少なく、遺構も検出していない。中世にはさらに大きく農地の拡大等が行われたと考えられ、平安時代の遺構もその時に破壊されて残っていないのかもしれない。

周辺の平安時代の遺跡としては地蔵堂廃寺があげられ、寺院による開発が及んでいる可能性もあるが、遺物は小片の瓦が多く、軒瓦は出土していない状況であり、出土遺物の状況から判断すると寺域や集落域の周辺といった印象である。

鎌倉時代～室町時代

出土遺物、検出遺構は古墳時代の遺物、遺構を除いてほとんどこの時期と考えられる。古墳周溝の埋土の上層からは瓦器椀が多く出土しており、農地の拡大、集落域の拡大により大規模な造成が行われ、古墳群は削平されたと考えられる。

熊野詣に関わる記述で「吉祥園寺」や王子の記述が見られる。この時期には、本地域が交通の要衝としてまた宗教上の重要な拠点として機能していたと考えられる。

出土遺物は瓦器椀が中心で13世紀代前半から14世紀後半まで幅広い時期のものが出土している。青磁、白磁などの輸入磁器もほぼ同時期のものが出土している。

市内では荘園開発によって農地が拡大しており、本調査地も周辺地域と同様の状況であることが明らかとなった。

近世

近世の遺構は検出していない。遺物もほとんど出土していない状況である。近世は熊野街道にかわって紀州街道が幹線道として使用された。また、近世にはため池、用水路などの灌漑用水の確保が進んだと考えられ、根来

衆をはじめとする勢力から江戸時代に変わり、集落は安定し、集落周辺は耕作地へ変わっていったと考えられる。

近代

明治6(1873)年5月に南小学校の前進「泉州第五十五番小学校」が設立、翌年「近義南小学校」と改称された。

地蔵堂古墳群について

地蔵堂古墳群は6基の古墳（円墳4基、方墳2基）を発見している。4世紀末に造営された地蔵堂丸山古墳の南側に古墳群が造営されていることは、南小学校の発掘調査において明らかとなってきた。小学校より北側、地蔵堂丸山古墳との間の部分の調査も数ヵ所で行われているが遺物包含層がなく、遺構も検出していない状況を確認しており、広範囲に地面が削り取られている可能性がある。本調査地東側に位置する幼稚園の確認調査では、本調査区東部のような地盤が低く湧水が激しい状況で古墳は検出していない。小学校西側では現状地盤が低く正福寺方向に続く谷がある。南側は、1号墳、5号墳、6号墳が府道部分まで広がり、府道より南側は未調査部で状況が明らかになっていないが、熊野街道から北側（府道方向）に地盤は緩やかに傾斜しており府道付近に小さな谷があるように見受けられる。

地蔵堂丸山古墳、地蔵堂古墳群周辺の地字を見てみると「大塚」という字名がある。古墳のことを大塚と呼ぶ場合もあり、地字のある場所がすぐに古墳のある場所と思ってしまうが、地字は様々な経緯でつけられており、変更されたり移動したりすることがあるため、字名をすぐに信用することはできない。実際に大塚の地字のある場所で調査を行って何もないことを確認しているところもあるのであくまでも参考として見ることにするが、現在確認している古墳群の範囲がさらに広がる可能性があること、また、群が1つでなく支群が存在する可能性がある。

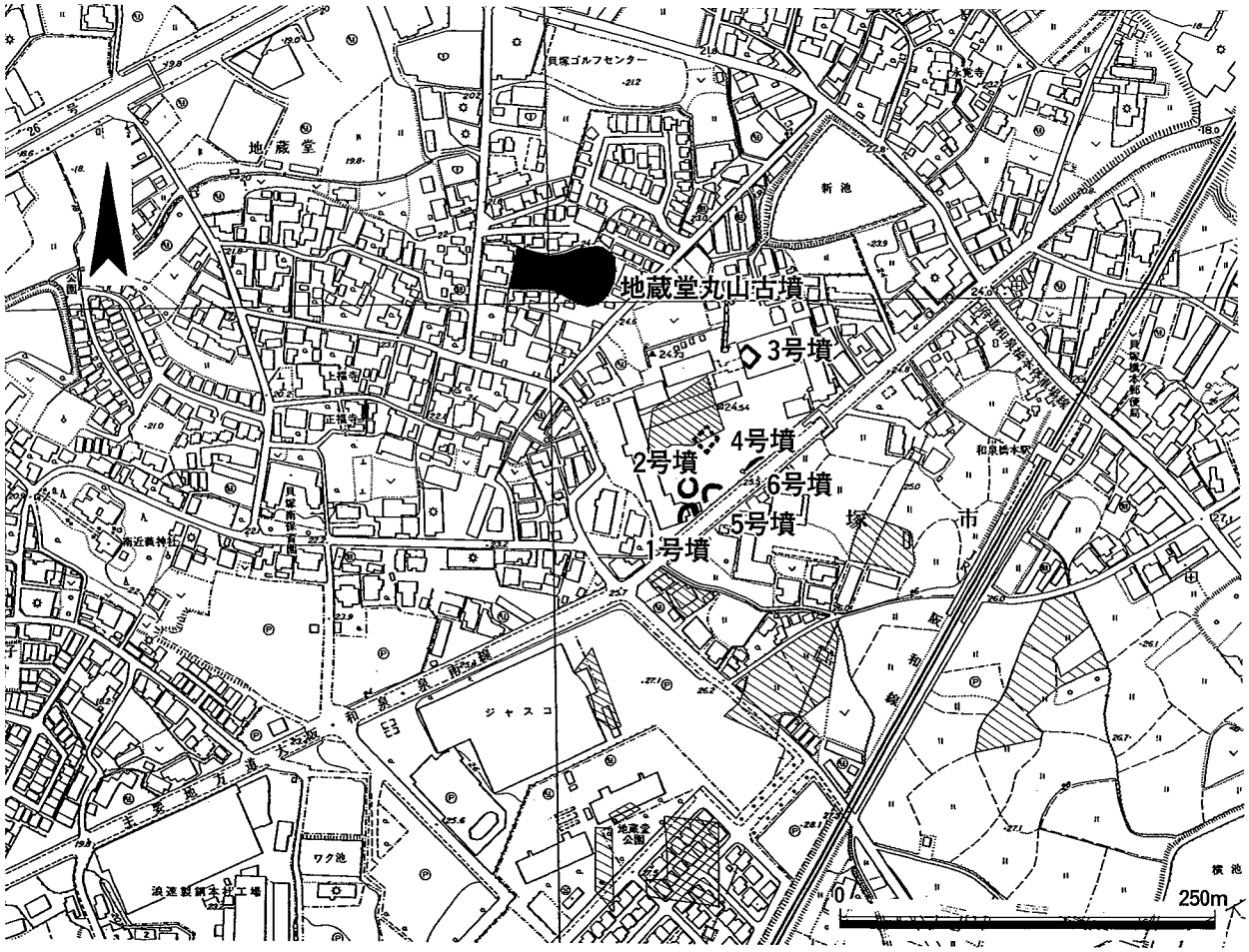


図30 「大塚」の地字のある場所（斜線部分）

報 告 書 抄 録

ふりがな	じぞうどういせきはっくつちょうさがいよう
書名	地蔵堂遺跡発掘調査概要
副書名	貝塚市立南小学校校舎増築に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第69集
編著者名	三浦　基
編集機関	貝塚市教育委員会
所在地	〒597-8585　大阪府貝塚市畠中1-17-1　℡　0724-23-2151
発行年月日	西暦2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
じぞうどういせき 地蔵堂遺跡	おおさかふかいづかしじぞうどう 大阪府貝塚市地蔵堂	27208	72	34度 25分	135度 20分	20031210 ～ 20040416	1,200	校舎増築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
地蔵堂遺跡	古墳、社寺跡、集落跡	古墳時代 平安時代 中　世	古墳 掘立柱建物 柱穴、溝、土坑	須恵器 瓦　器	

図　　版

図版1　検出遺構

調査地全景

図版2　検出遺構

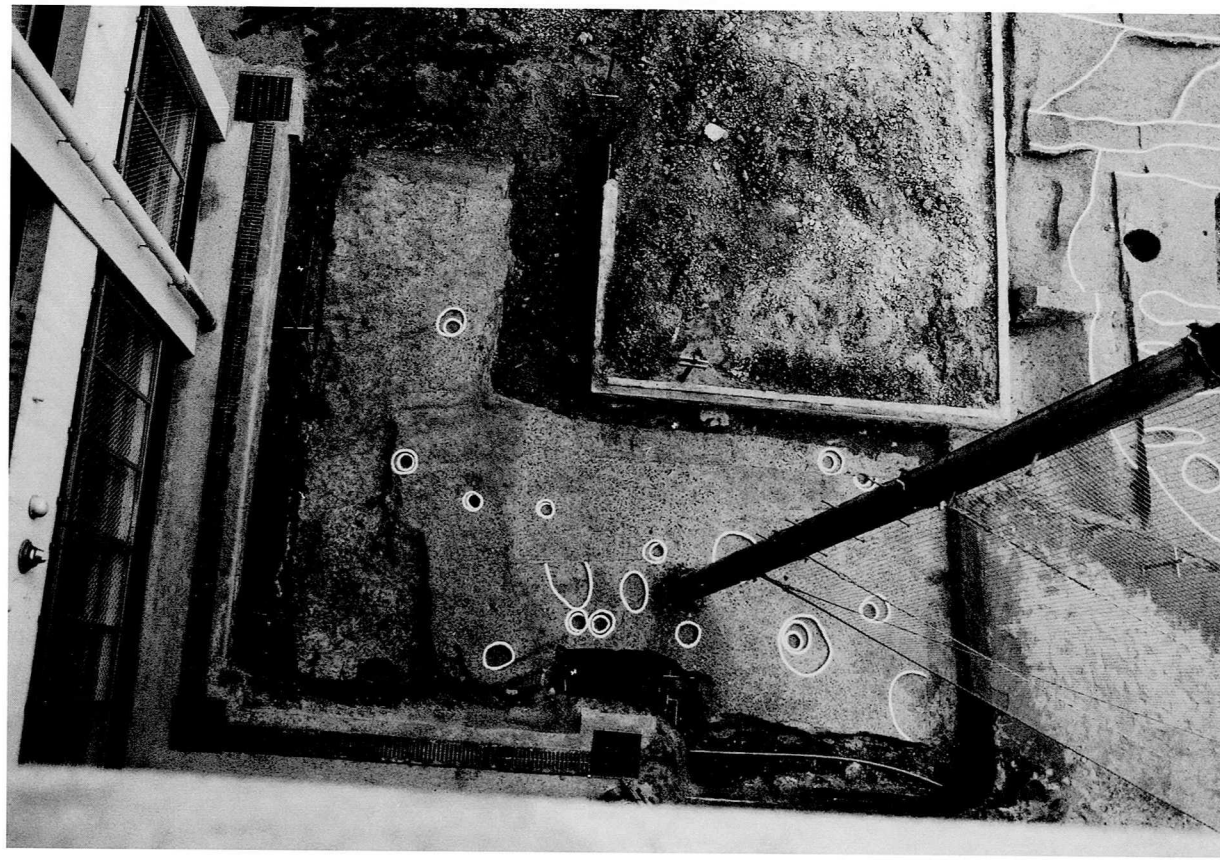
調査区南西部

図版3　検出遺構

1. 調査区全景　　北東より

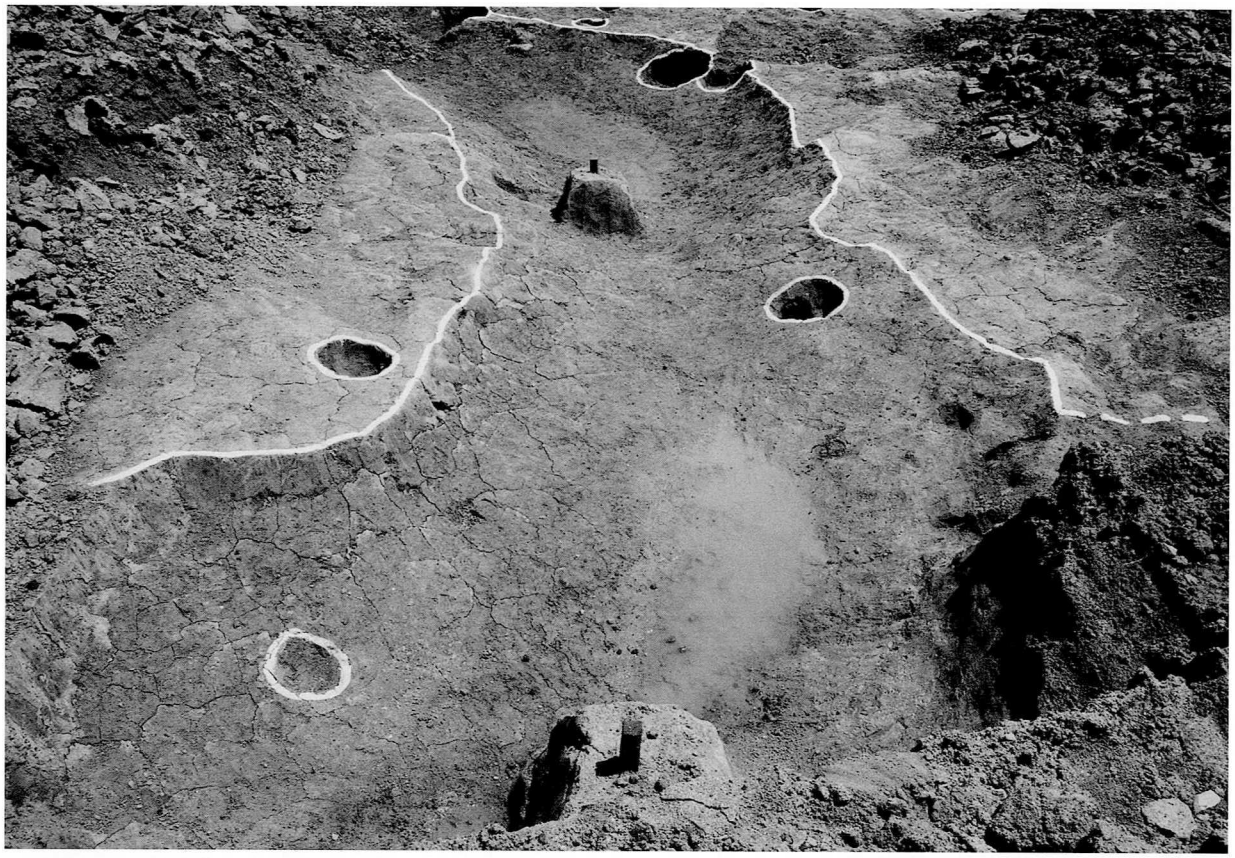
2. 調査区北東部　　南西より

1. 調査区南西部　　南西より



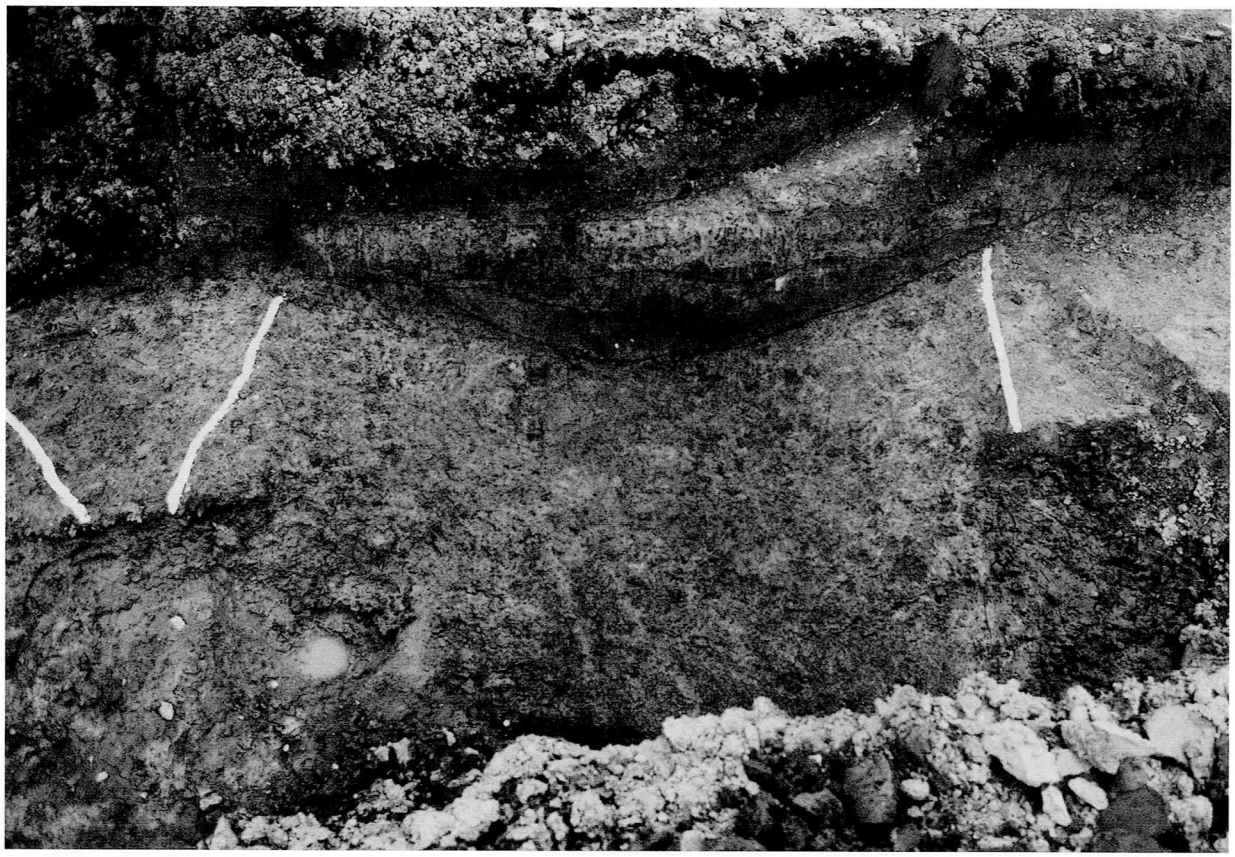
2. 同上　　南東より

図版5　検出遺構



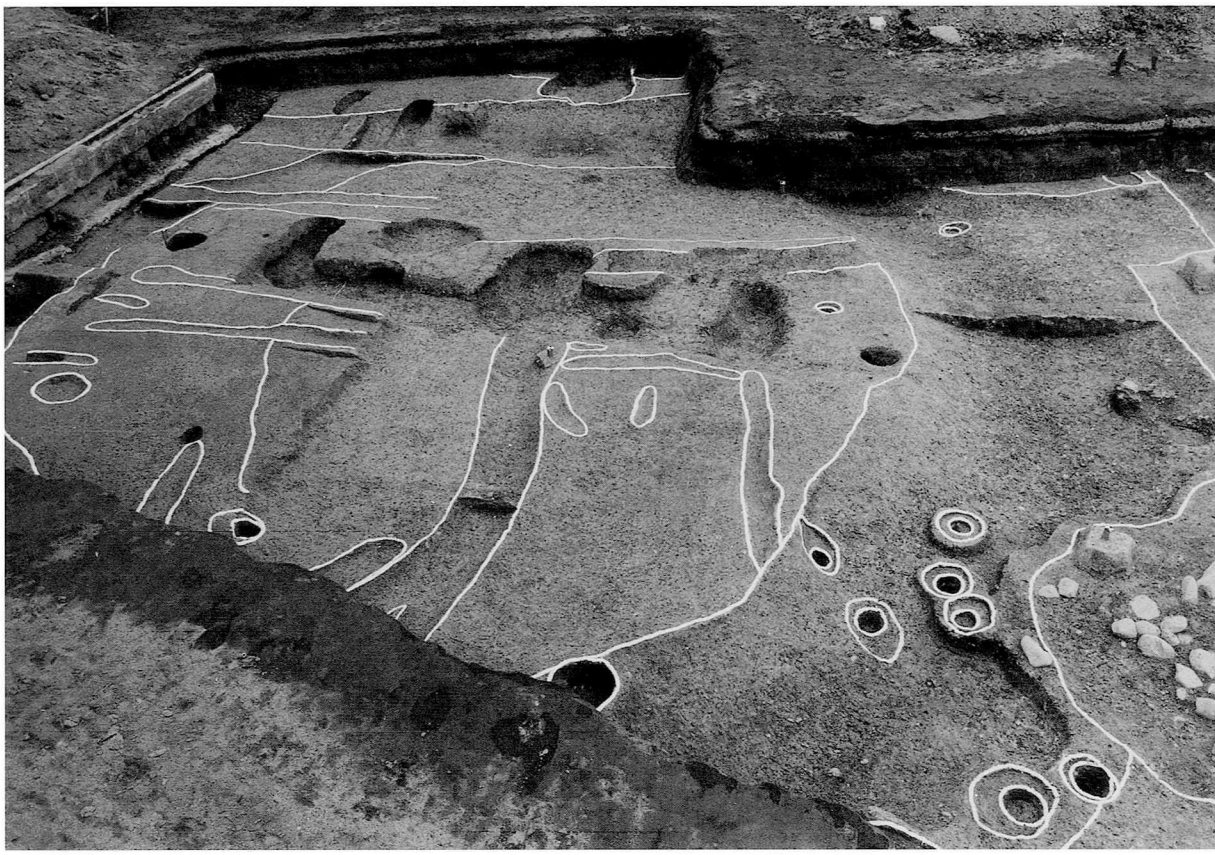
1. 調査区南部　2号墳（SD－5011）　南西より

2. 調査区南部　南西より



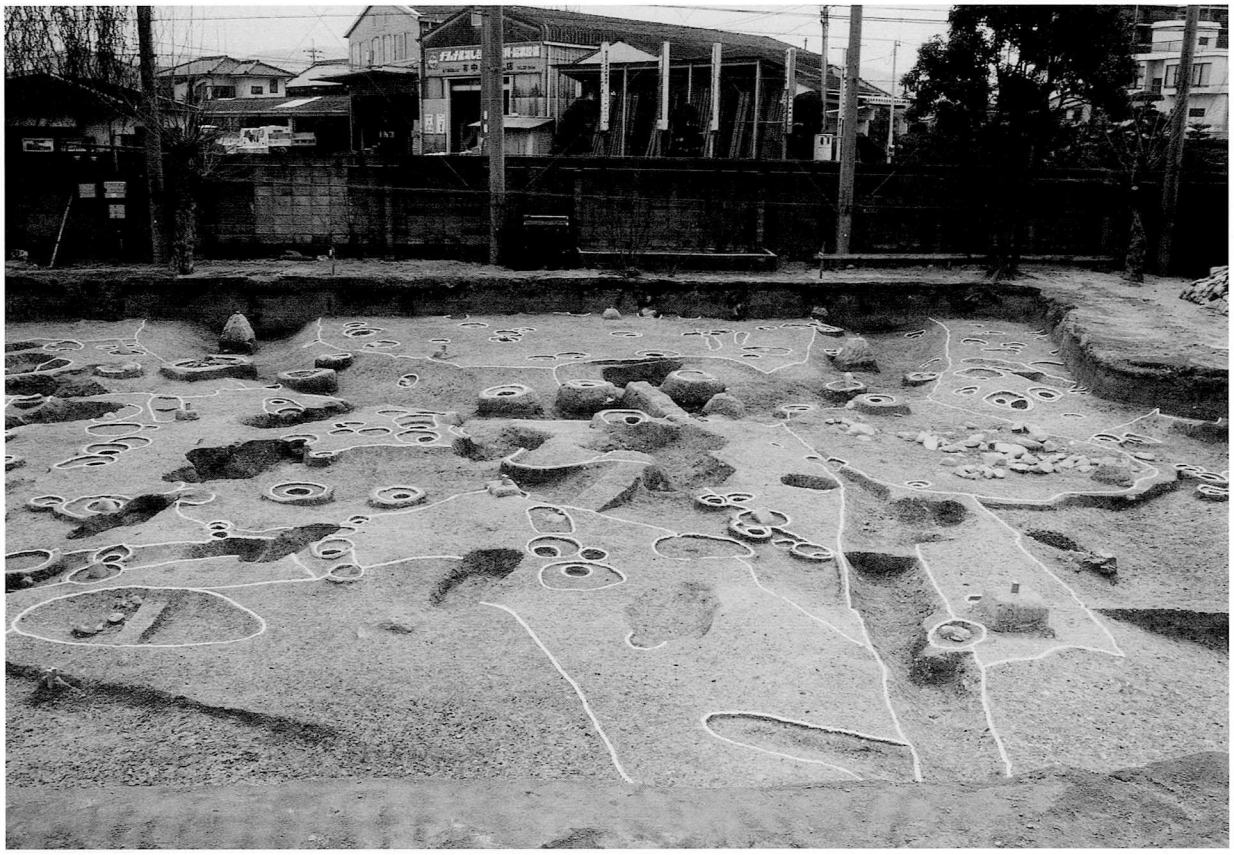
1. 1号墳（SD－5303）　　北西より

2. 同上　　北東より



1. 2号墳（SD－5011）　　南東より

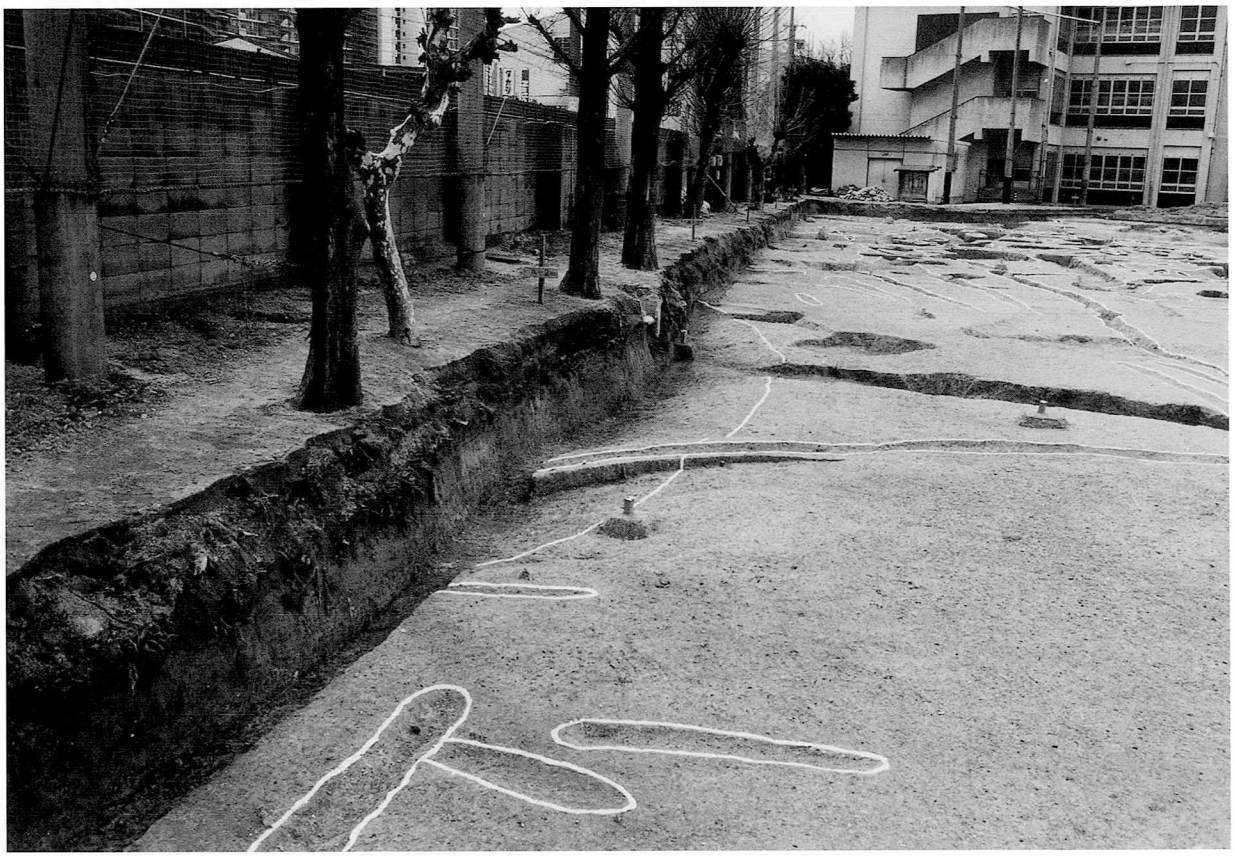
2. 2号墳、5号墳　　南西より



1. 5号墳（SD－5022）　　北西より

2. 同上　　西より

1. 6号墳（SX－5136）　北より



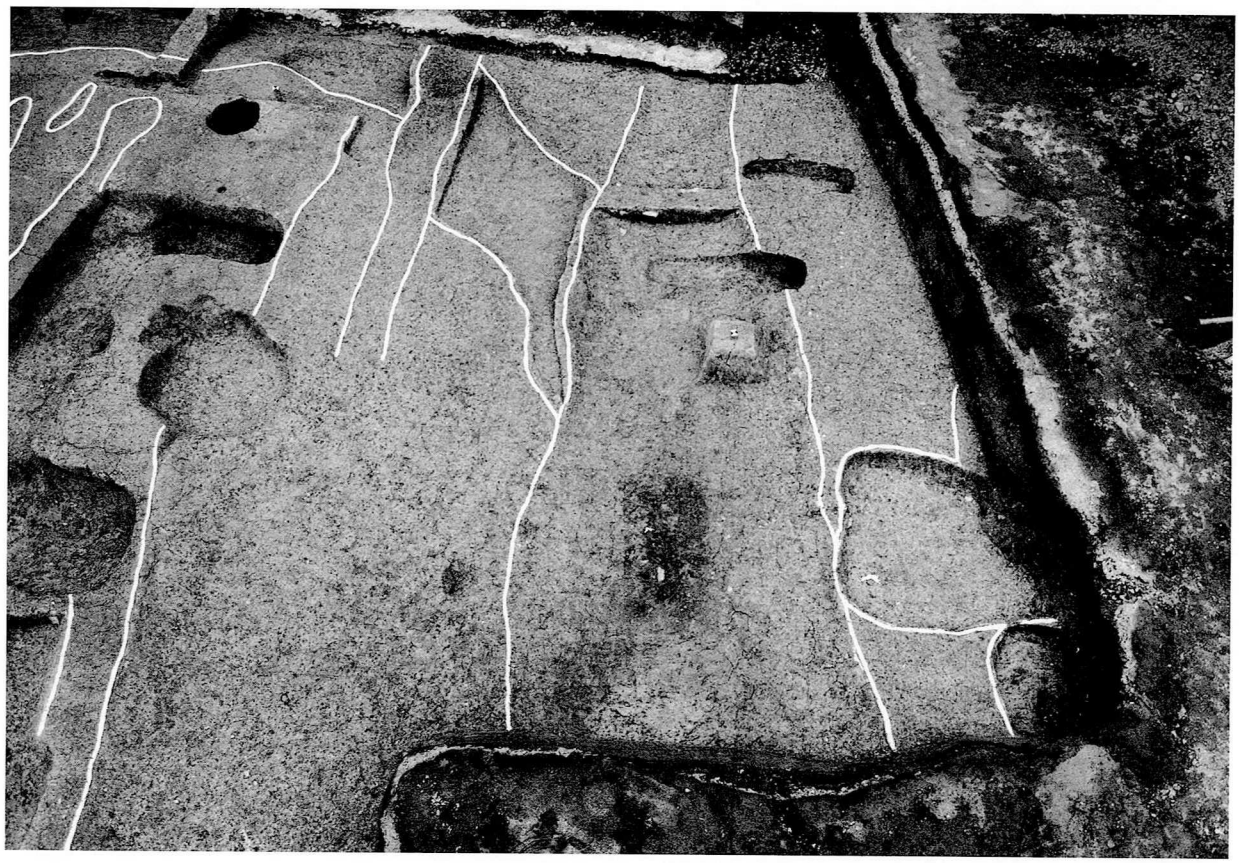
2. 同上　北東より

1. SD－5126　　西より

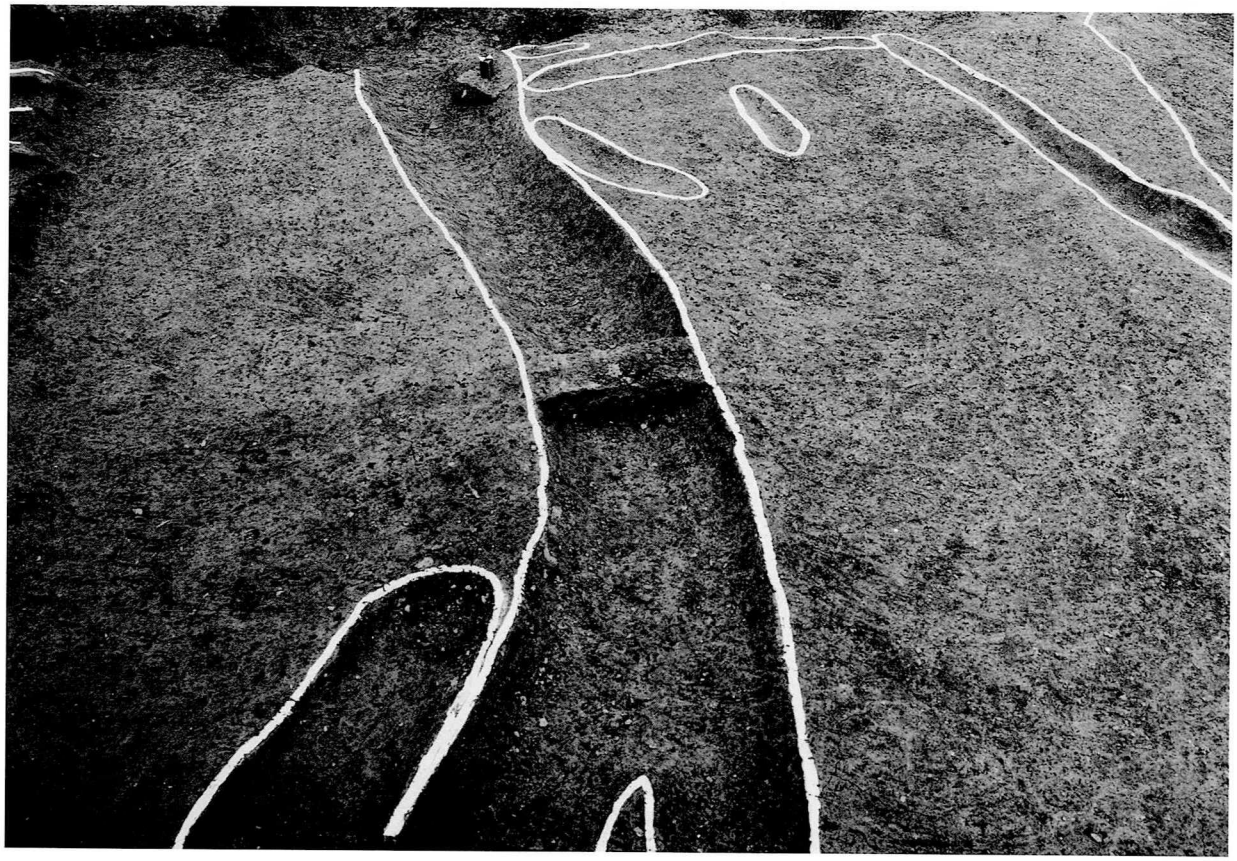
2. 同上　　東より

1. SD−5132　　西より

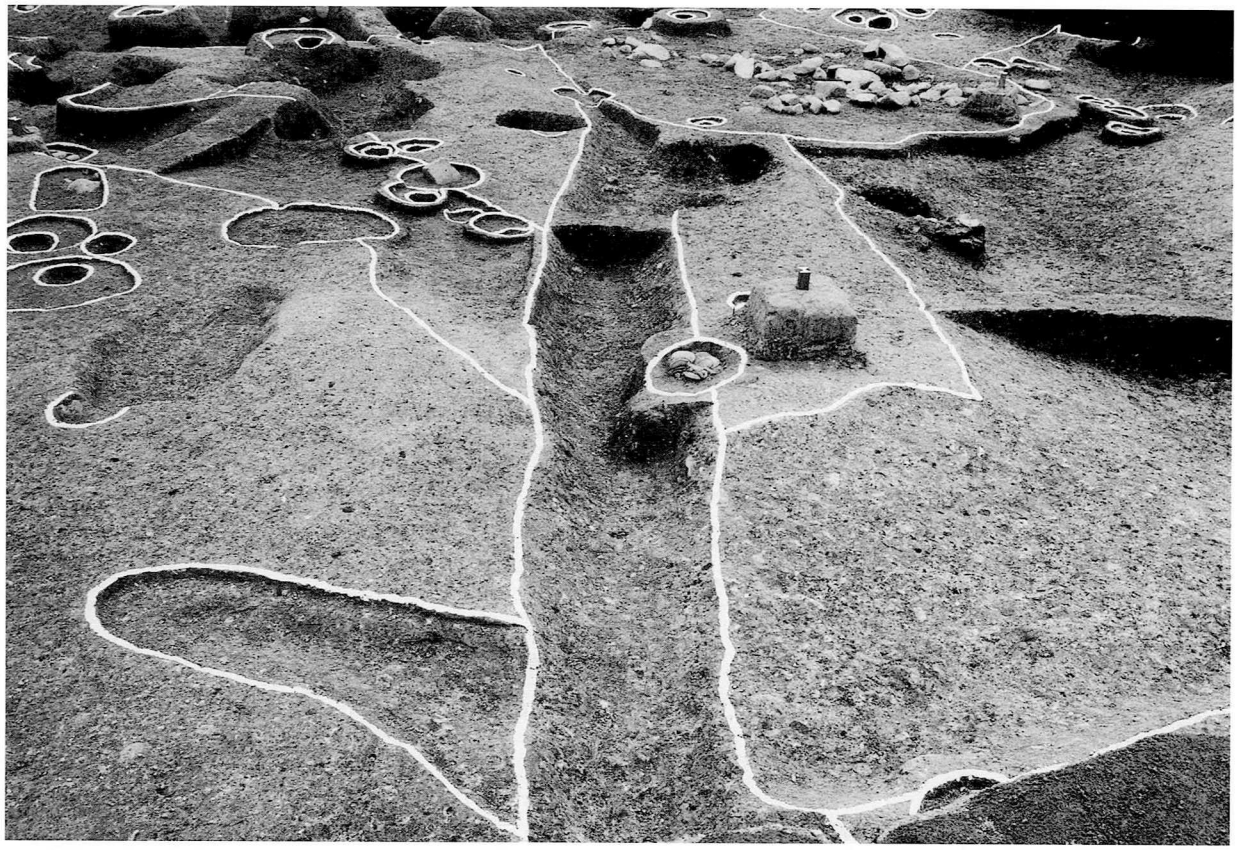
2. 同上　　南より



1. SD－5009　　東より



2. SD－5017　　南より

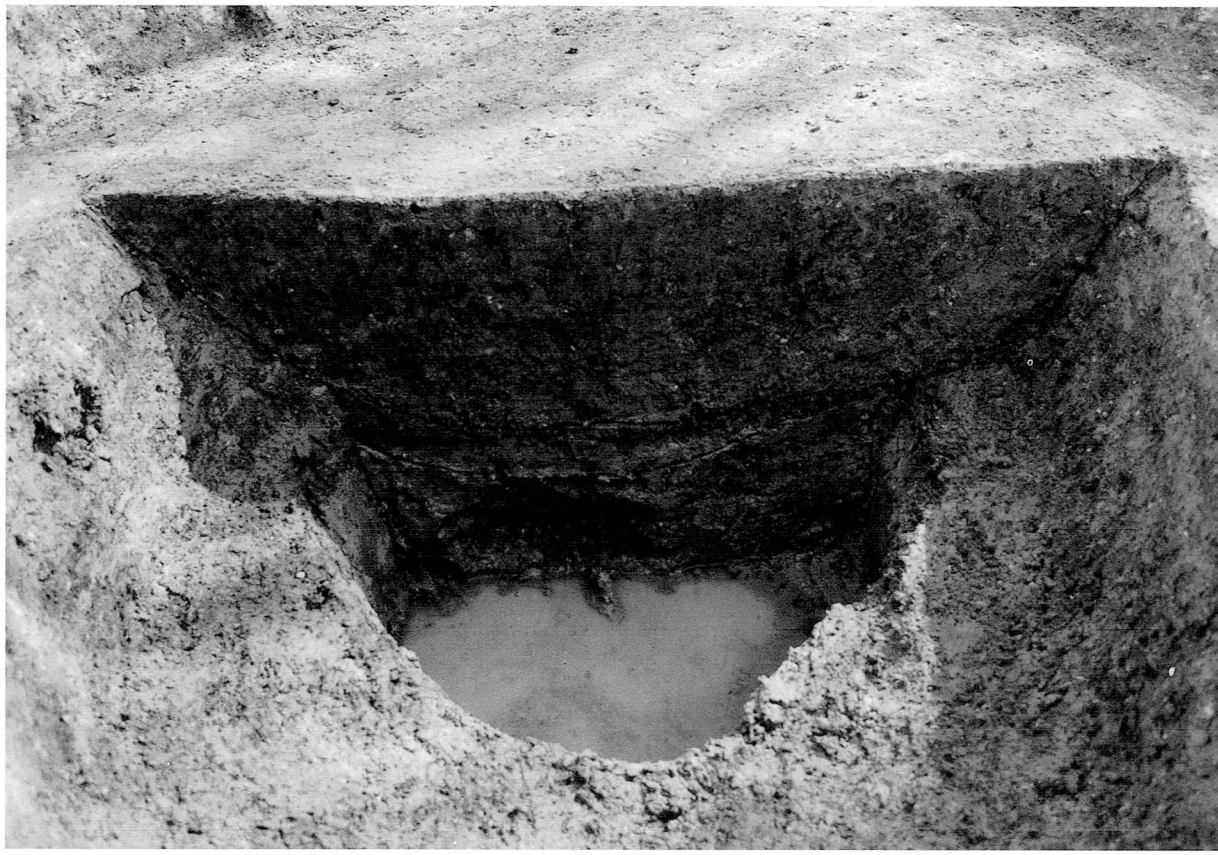


1. SD－5020　　北西より

2. SD－5137　　北西より

1. SD－5120、SD－5300、SX－5003　　北東より

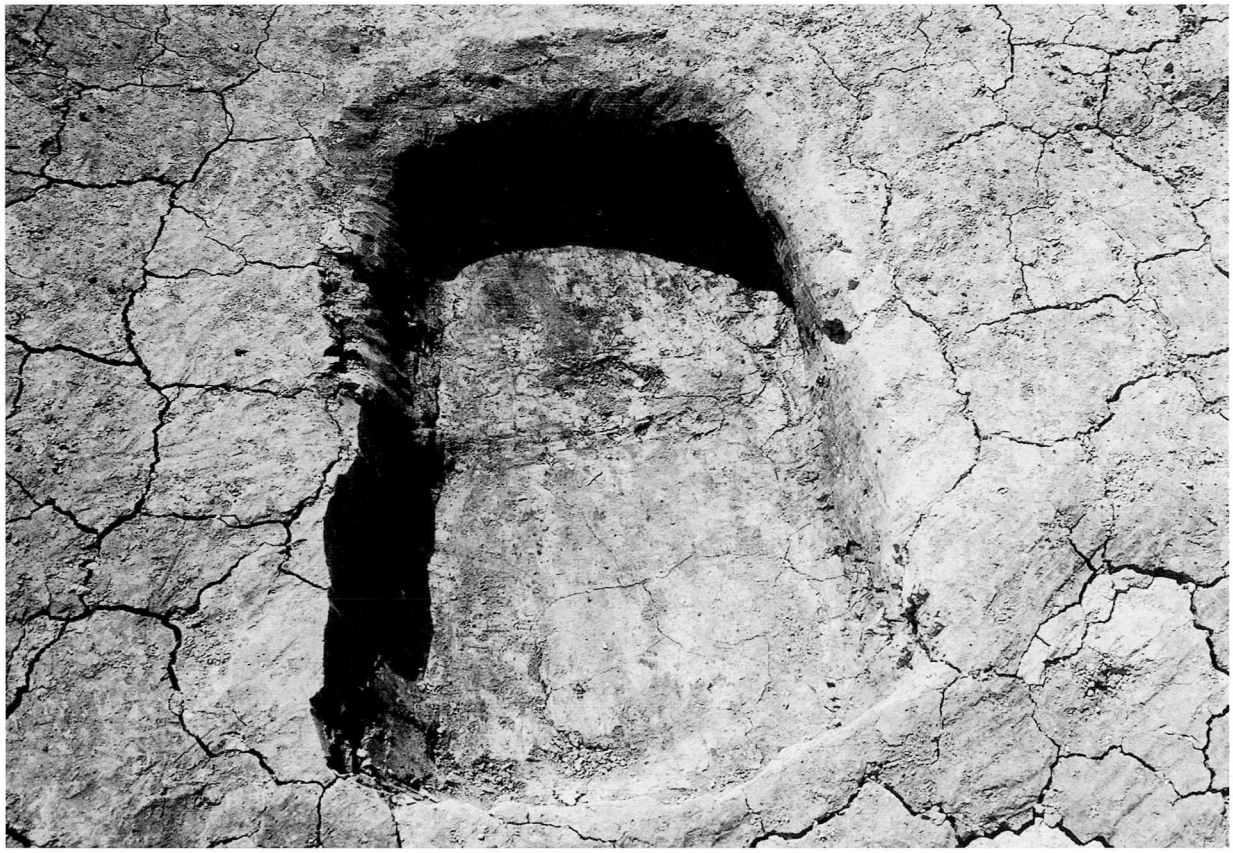
2. SD－5120、SD－5300　　北東より



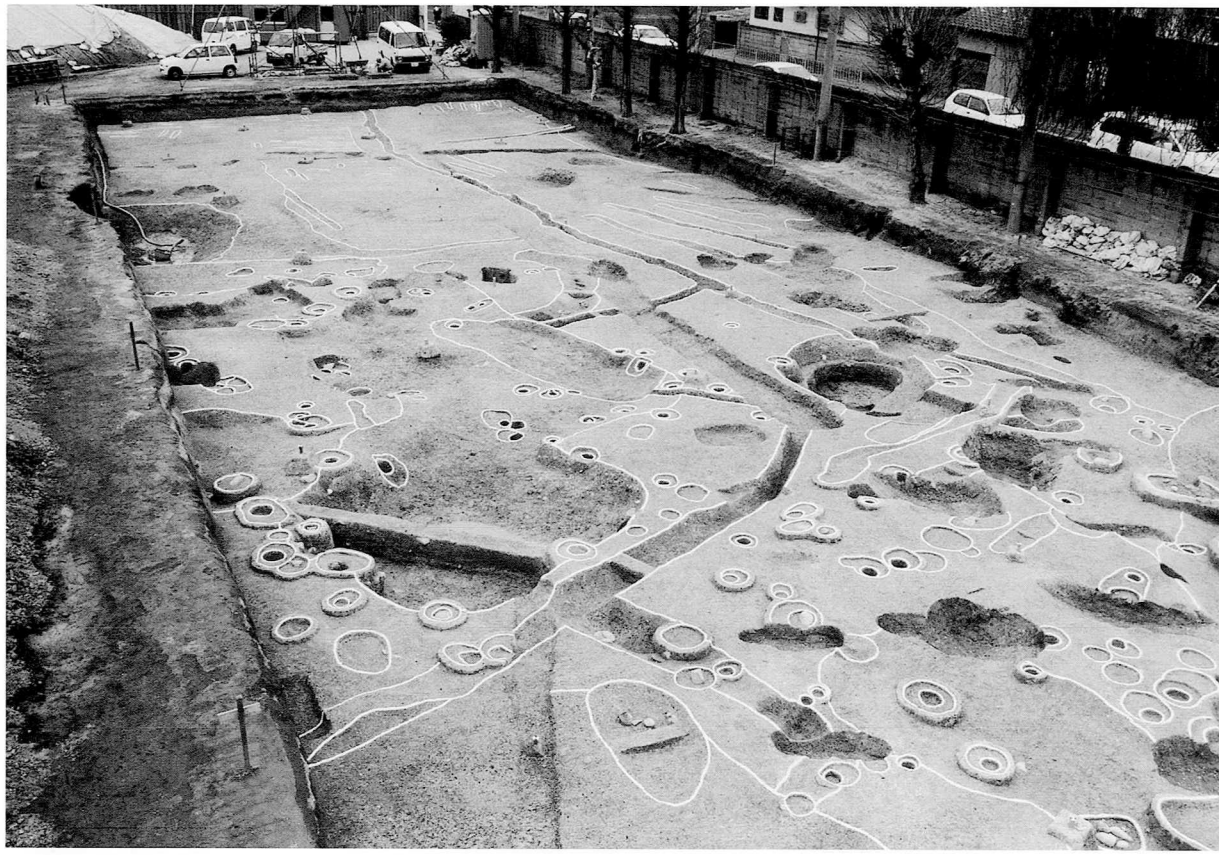
1. SE－5121　掘削状況　　西より

2. SF－5121　完掘状況　　西より

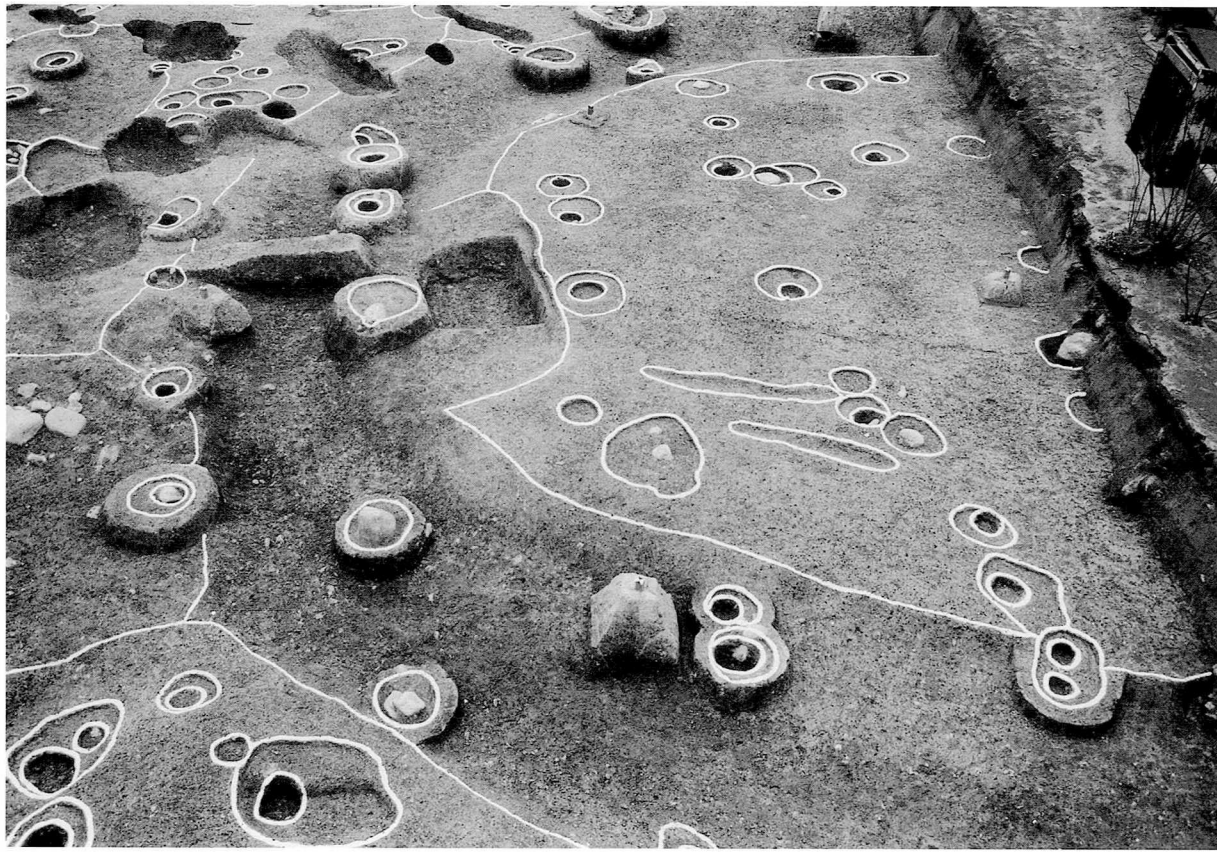
1. SK－5004　　北東より



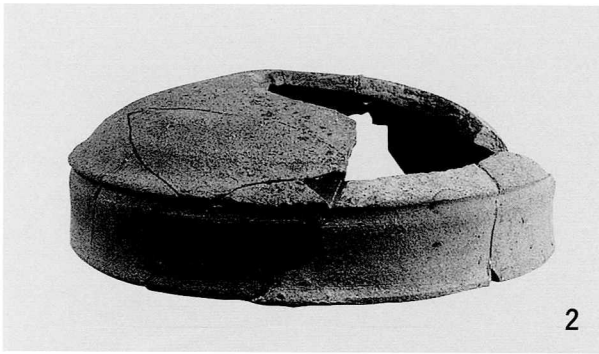
2. SK－5346　　北東より

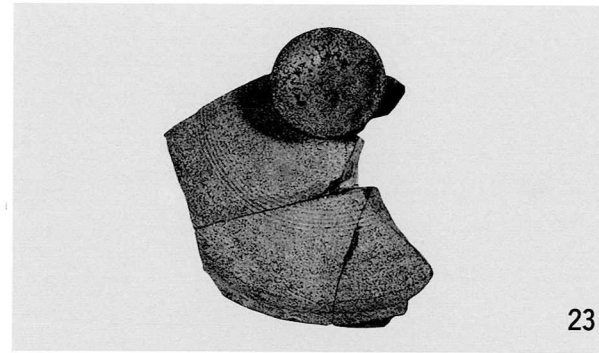


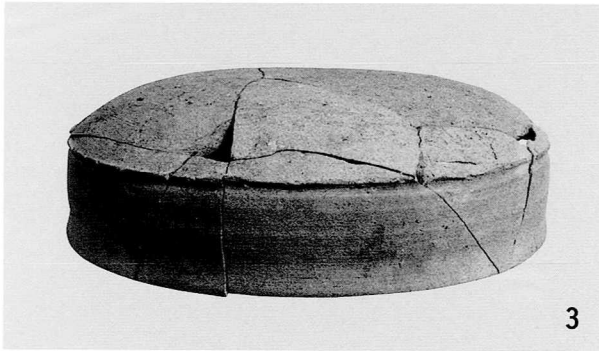
1. 柱穴群　　西より

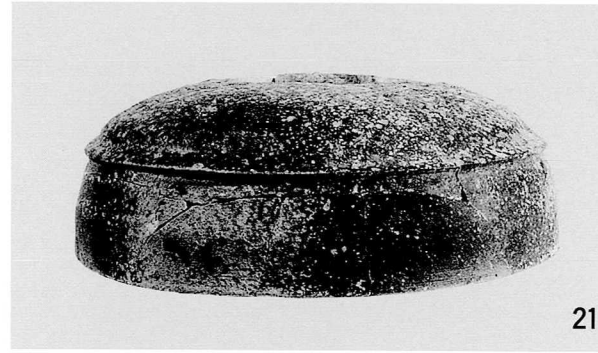


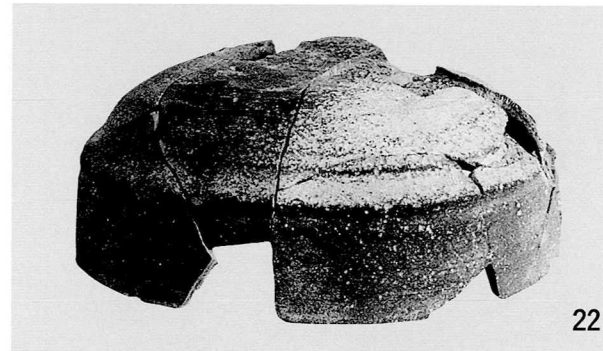
2. 柱穴群　　南西より

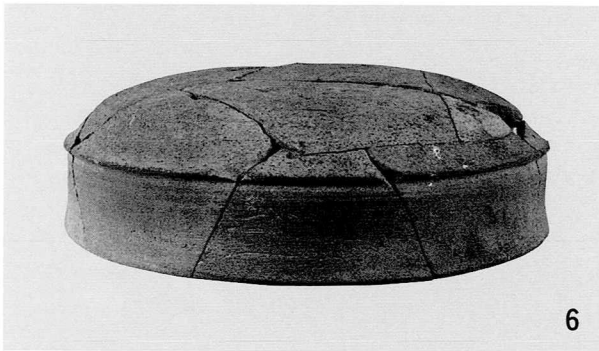


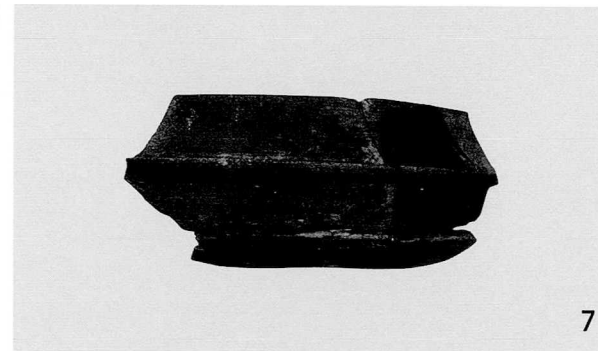


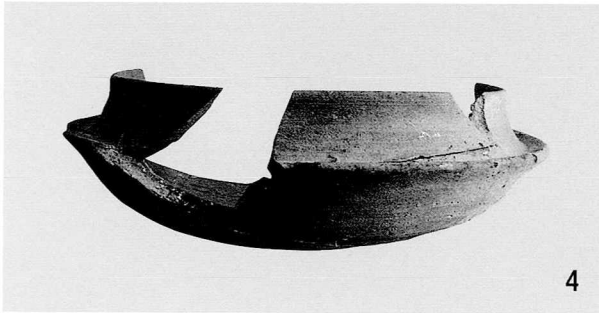


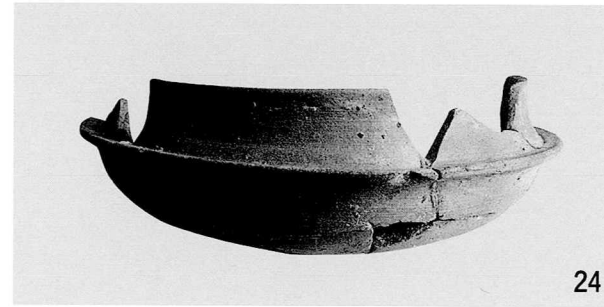




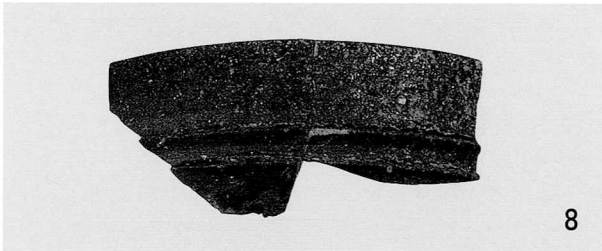


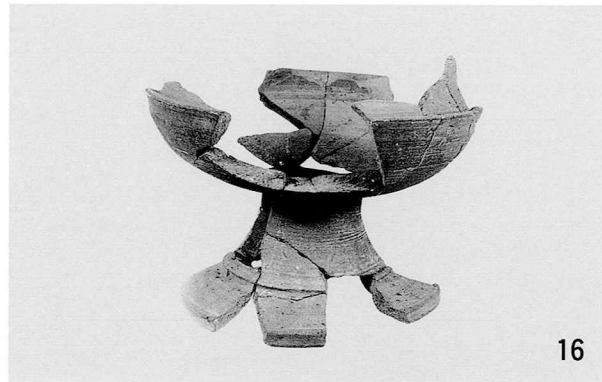


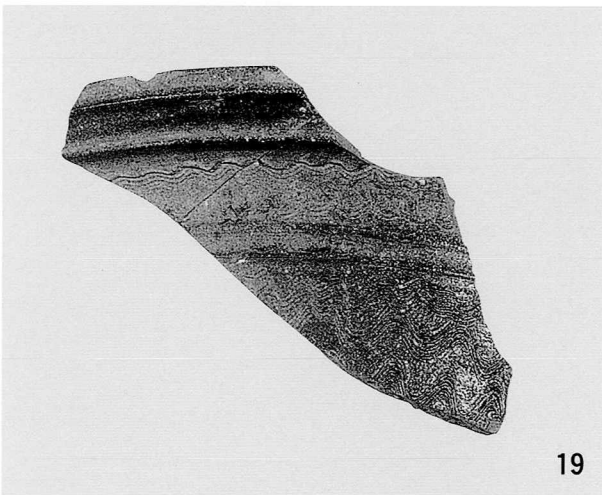


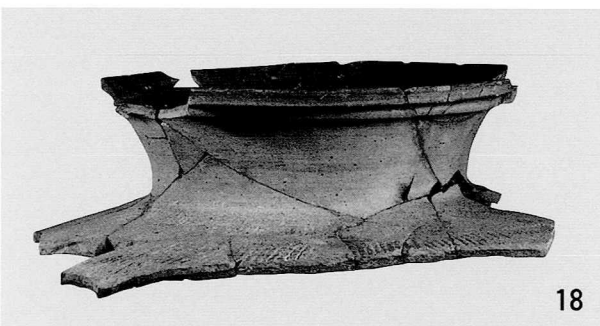


SD－5011（2～7、24）、SD－5022（21、22）、SD－5303（23）出土土器

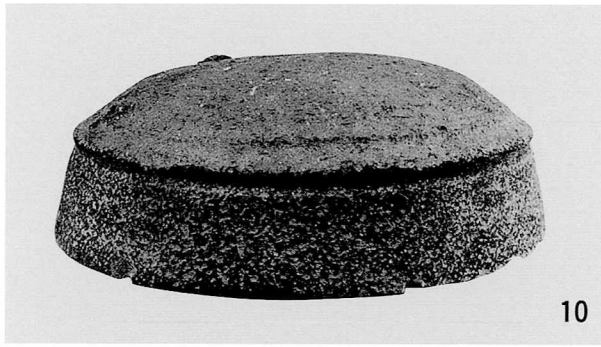


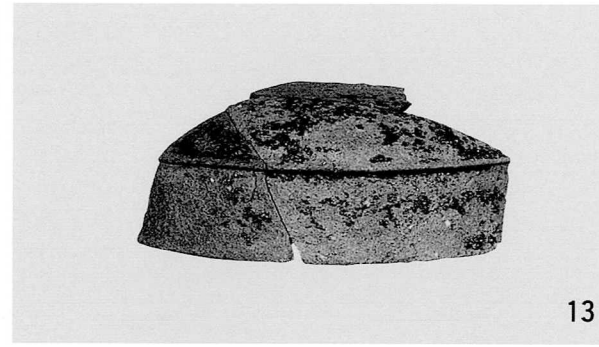


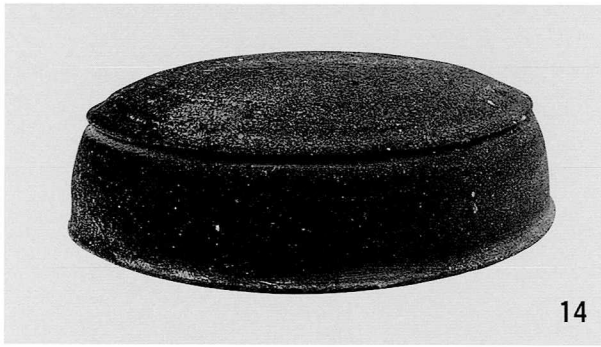


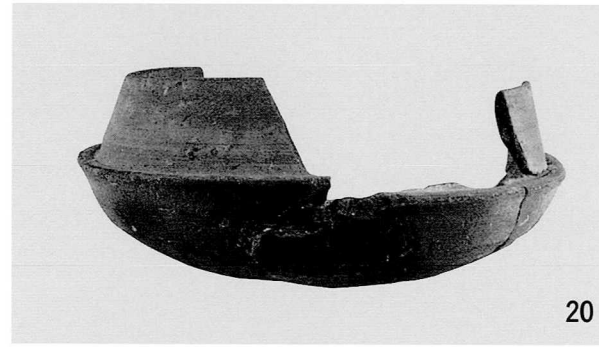


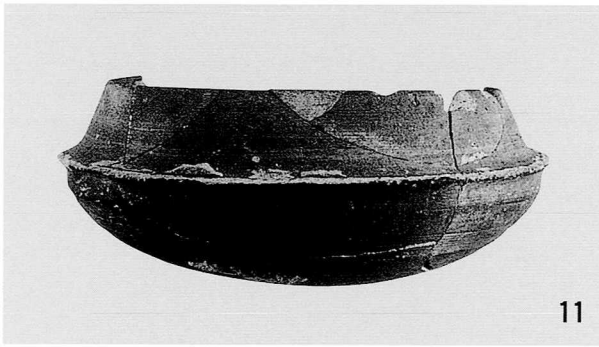
SD－5011（1、8、18、19）、SD－5022（9、16、25、26）出土土器

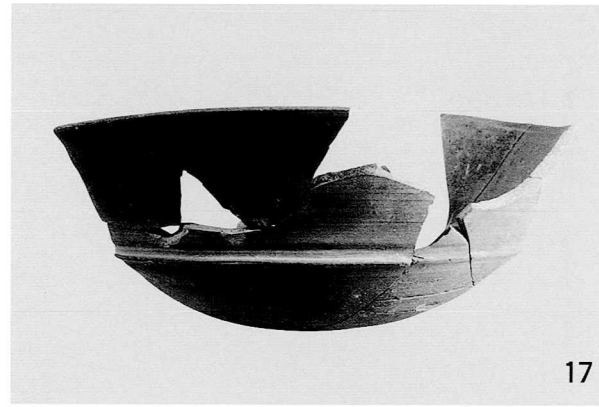


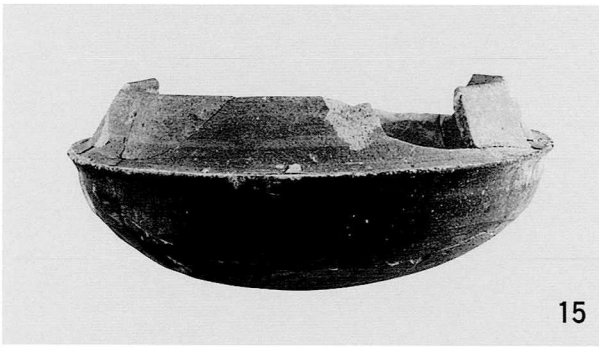




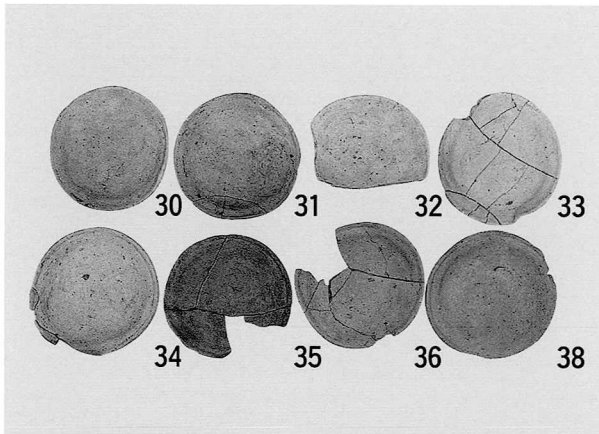


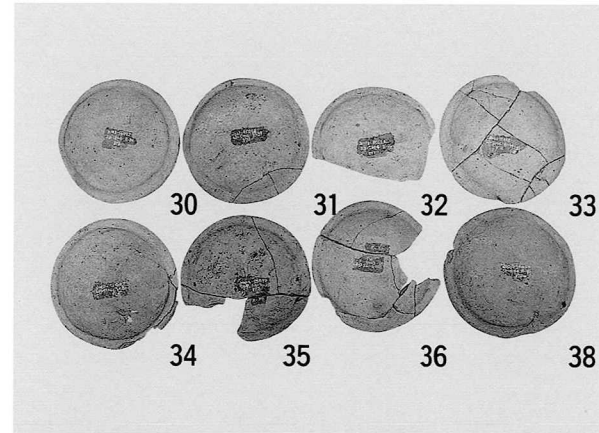


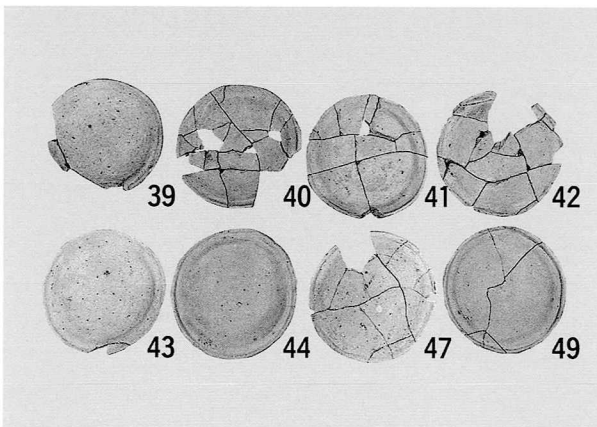


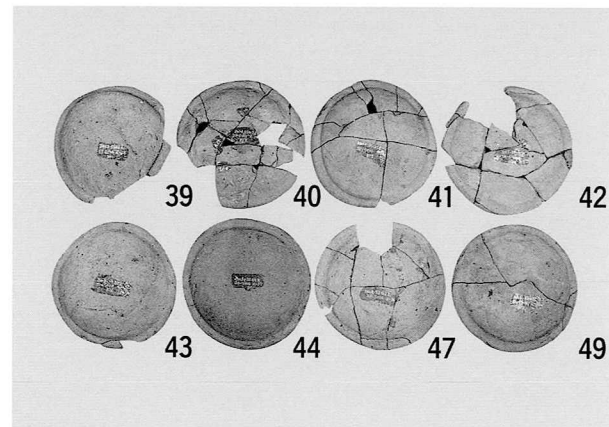


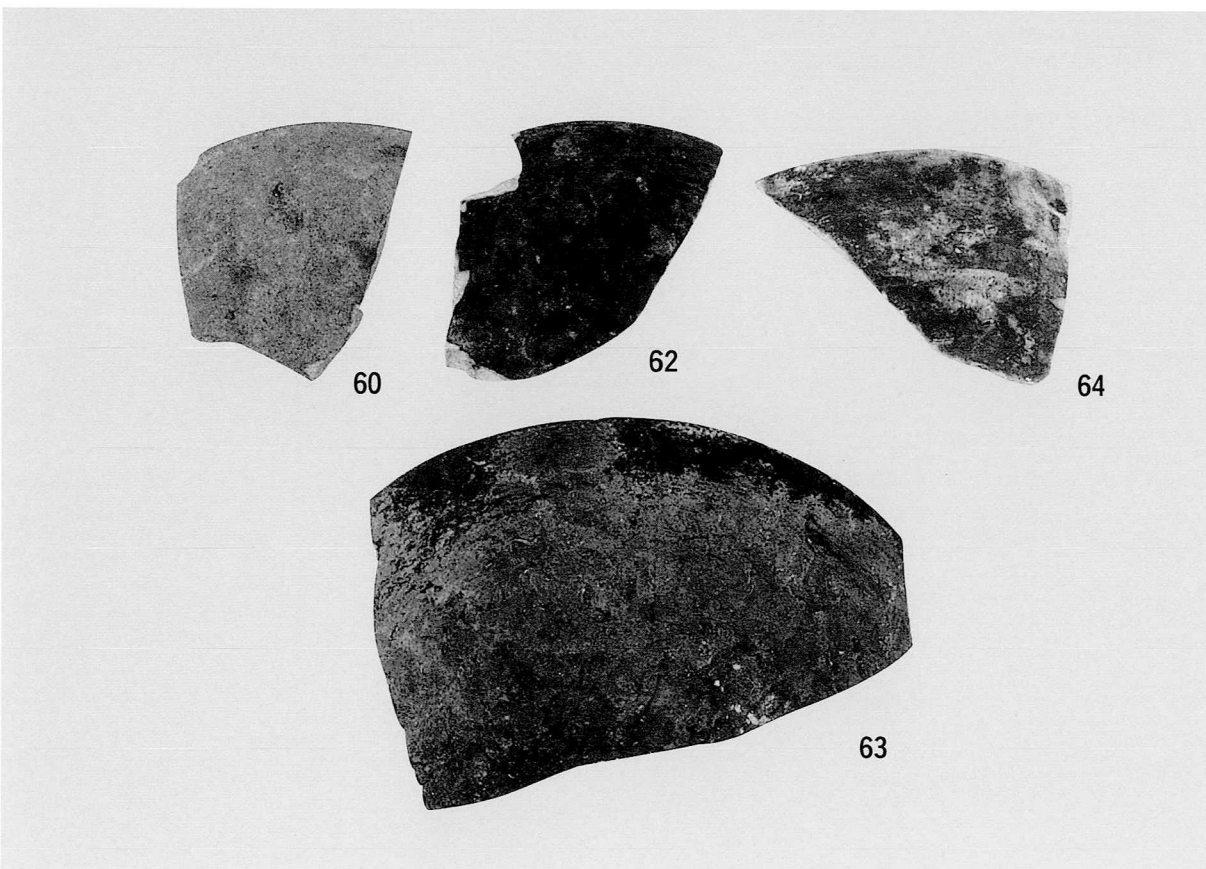
SD－5126（10～12、14、15）、SD－5132（13、17、20）、遺物包含層第３層（219）出土土器



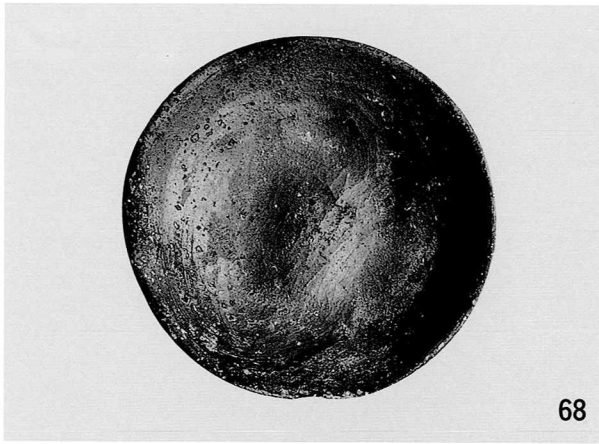


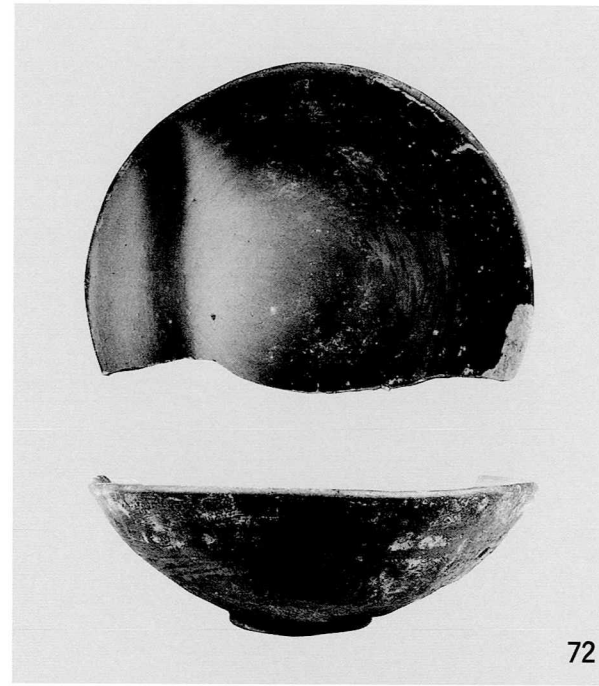


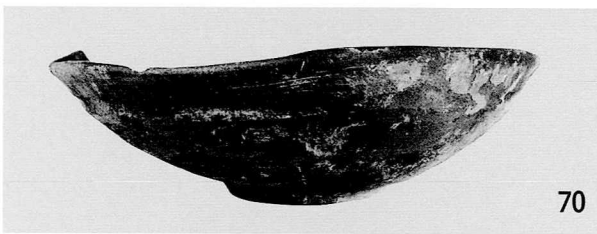


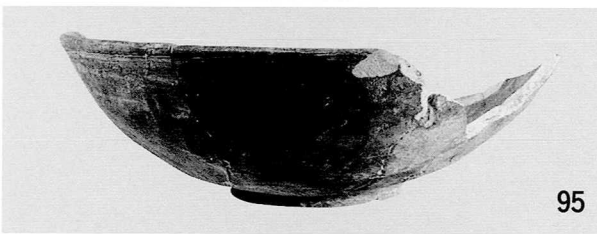


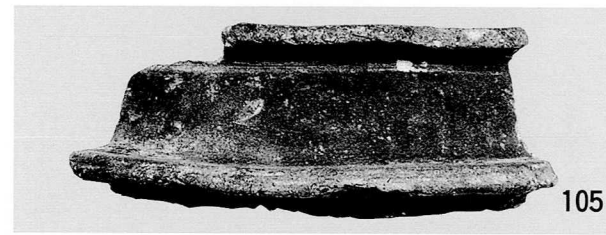
SK－5004（30～36、38～44、47、49）、SK－5075（60、62～64）出土土器

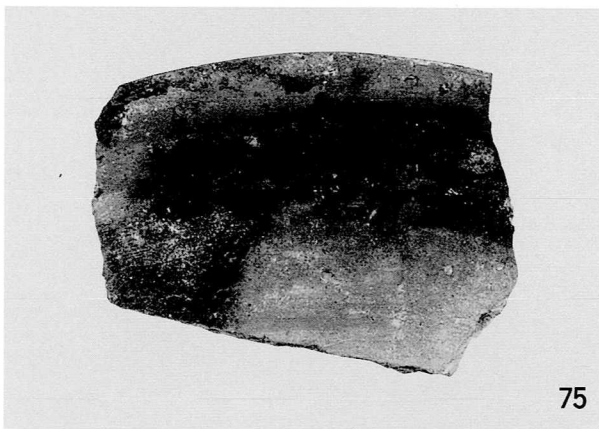


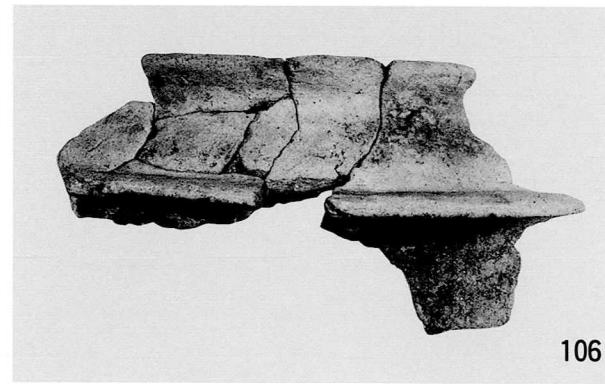




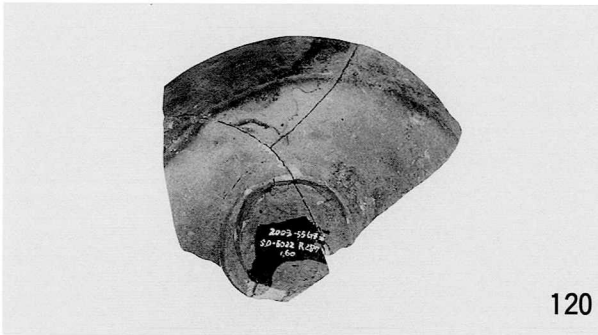


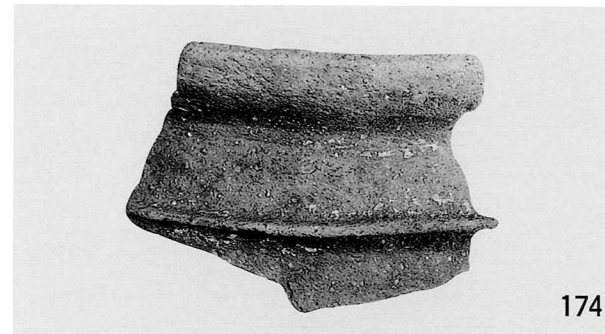


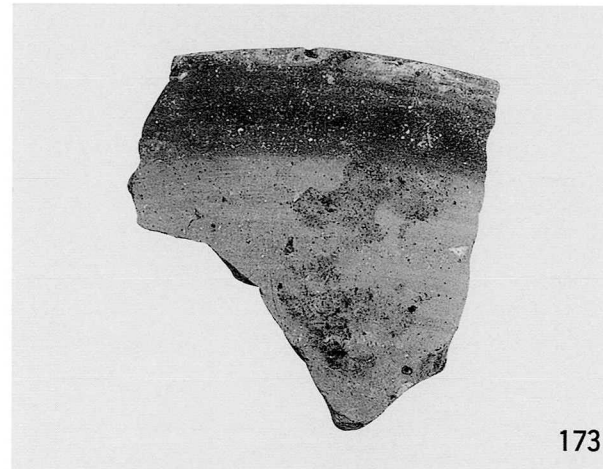


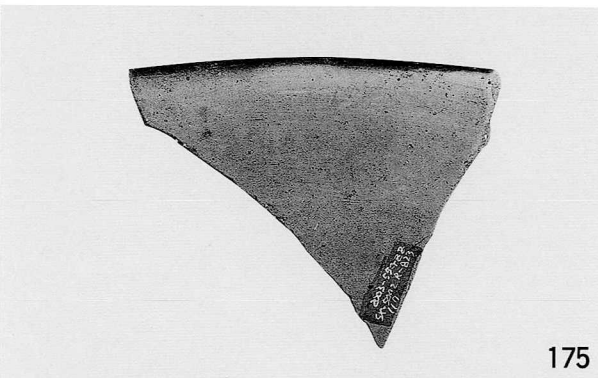


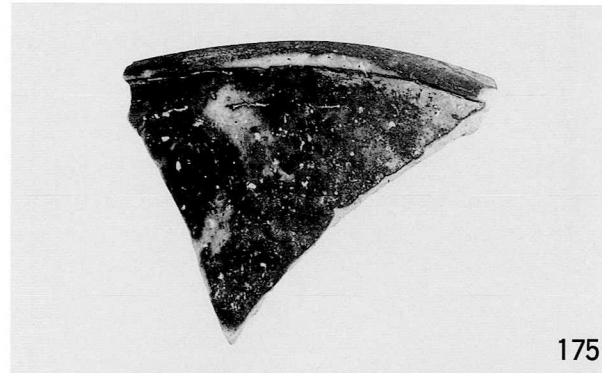
SE－5121（68、70、72、75、76）、SD－5011（79、95、105、106）出土土器

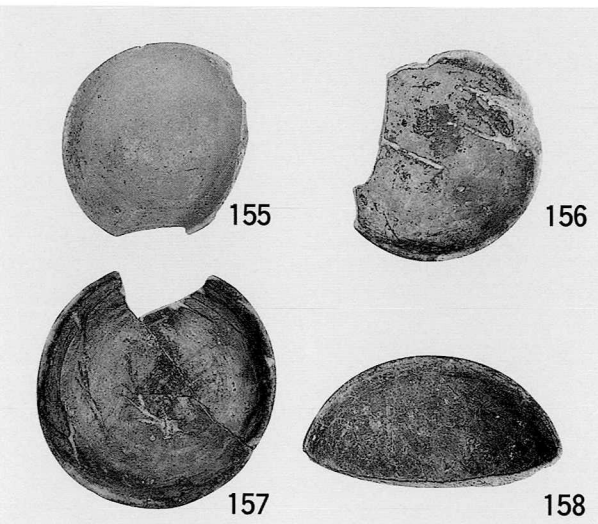


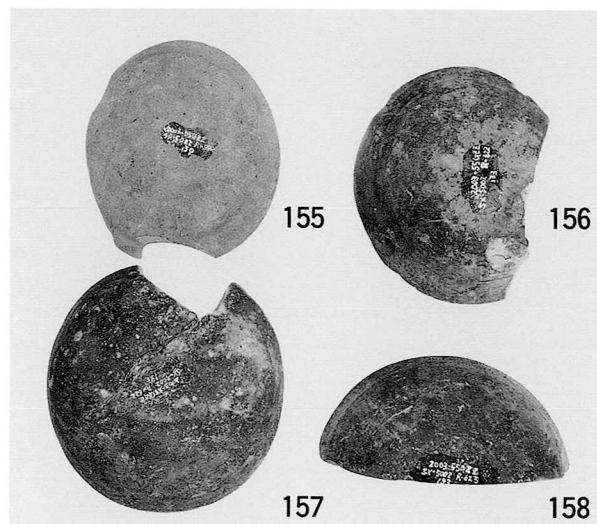




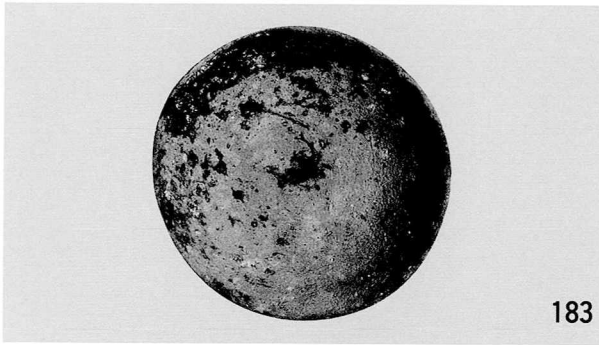


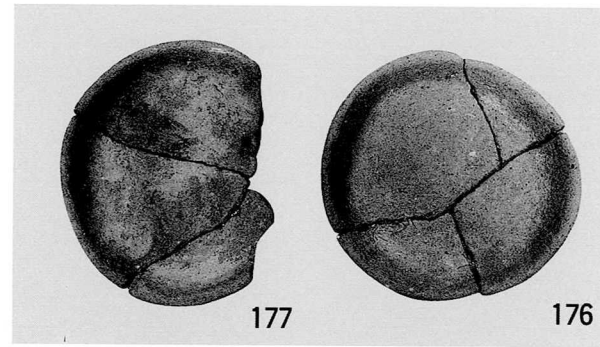


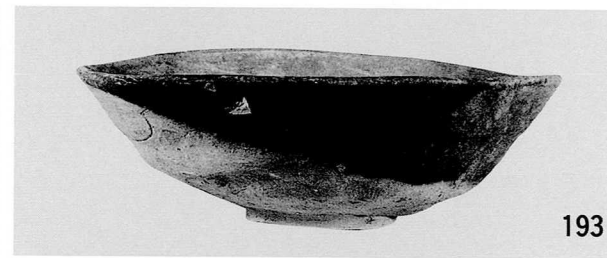


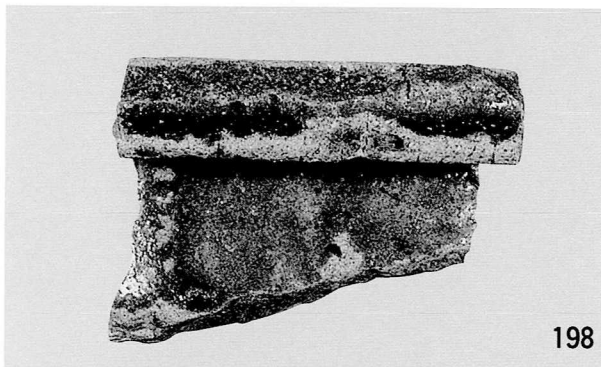


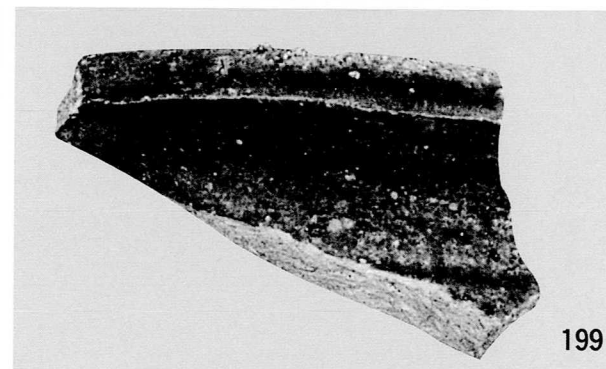
SD－5022（120）、Pit－5208（144）、Pit－5310（140）、SX－5002（155～158、173～175）出土土器

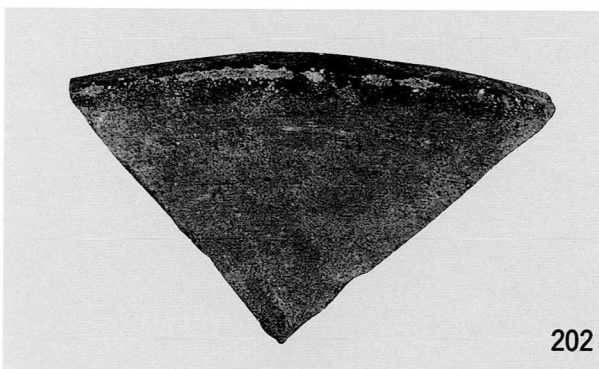


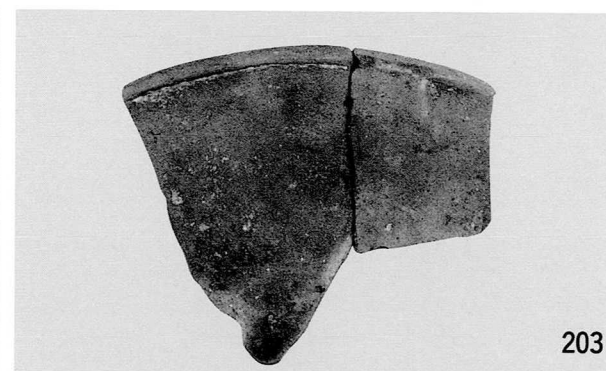


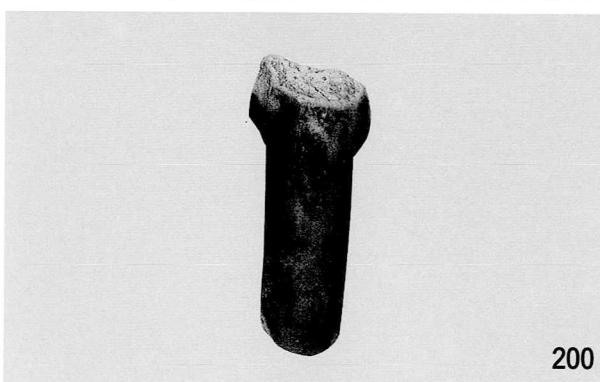


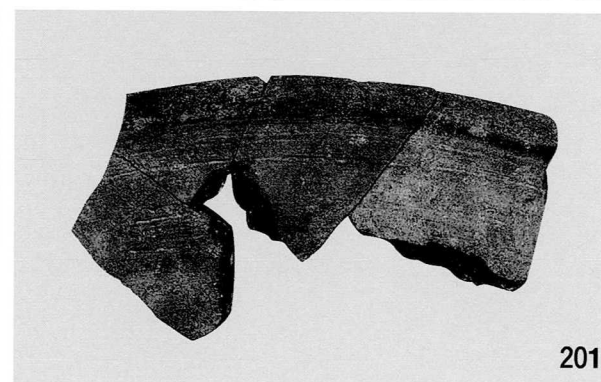




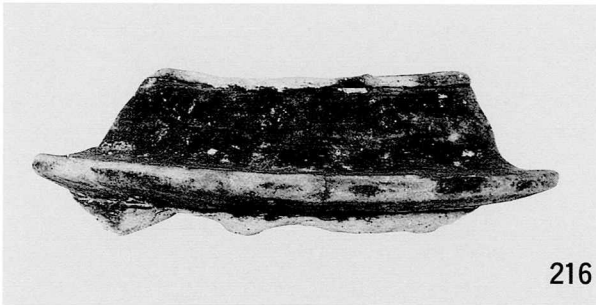


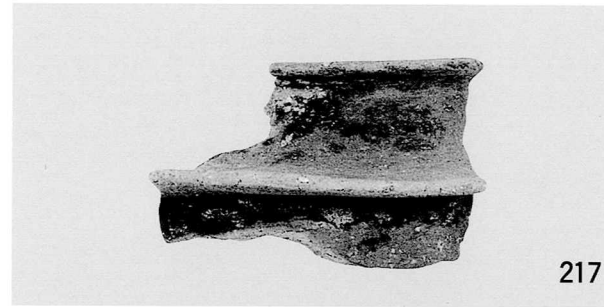


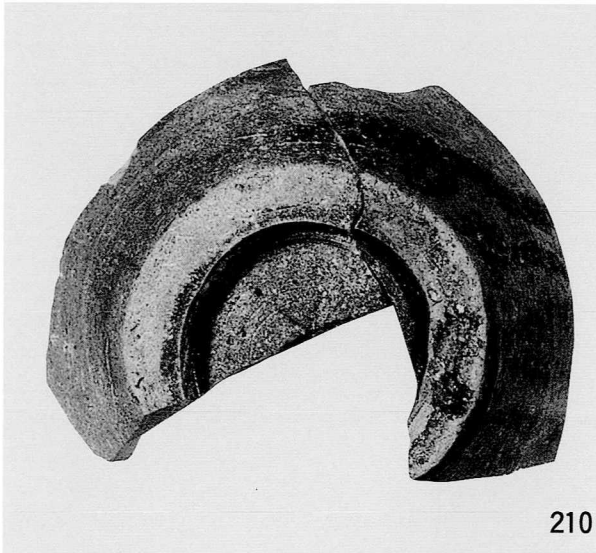


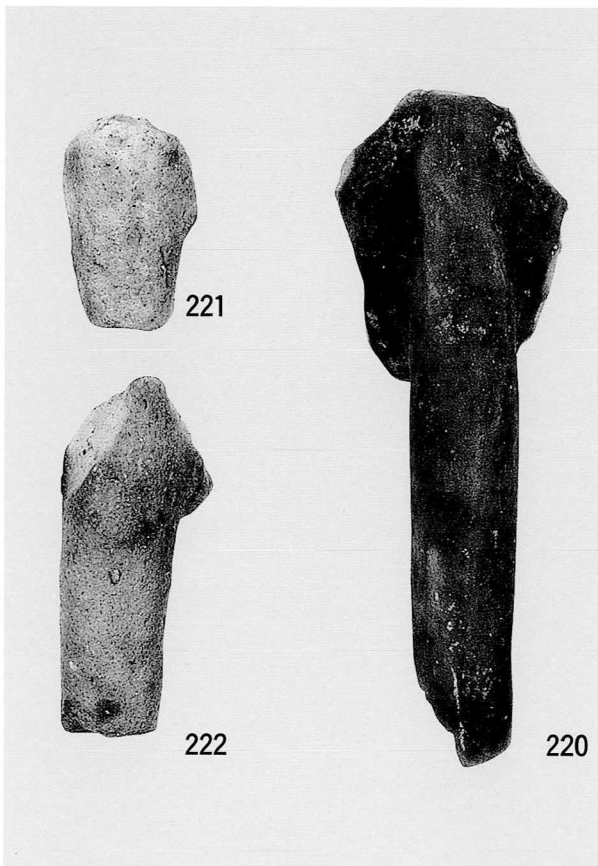


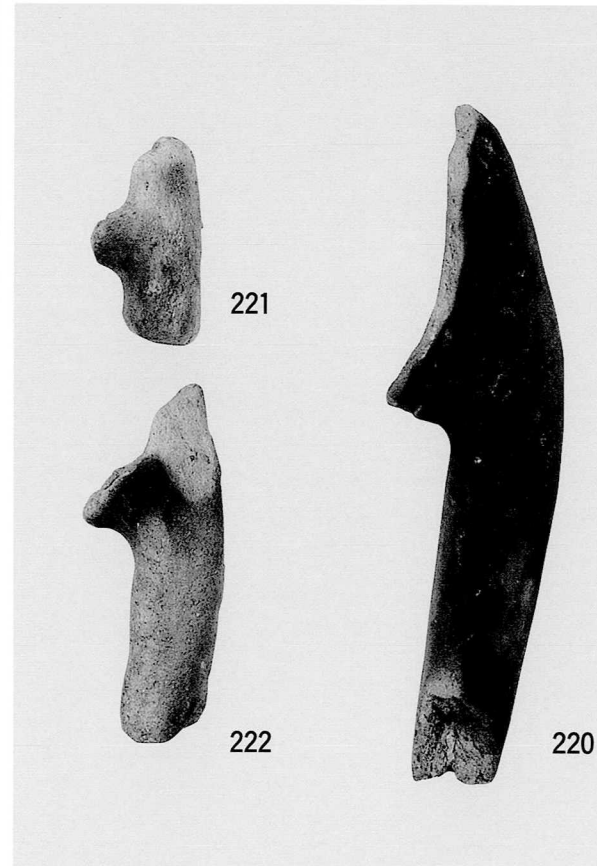
SX－5006（176、177、199、201、203）、SX－5024（191、200）、SX－5081（183）、SX－5119（198）、SX－5134（202）、SX－5333（193）出土土器



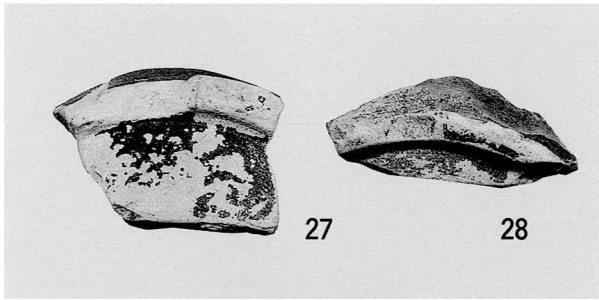


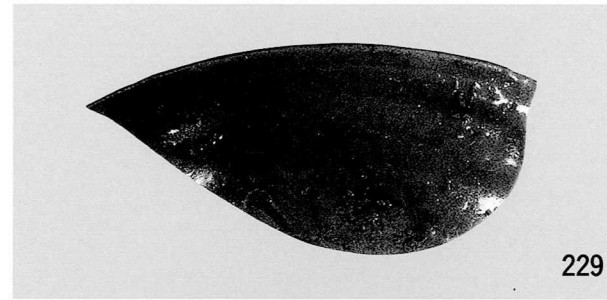


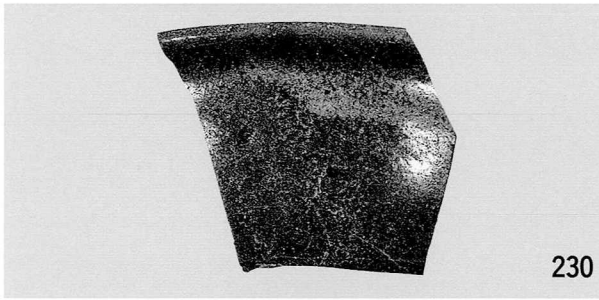


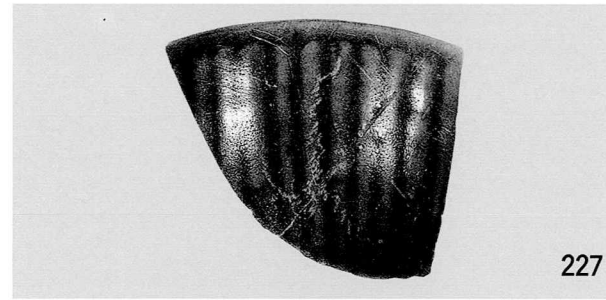


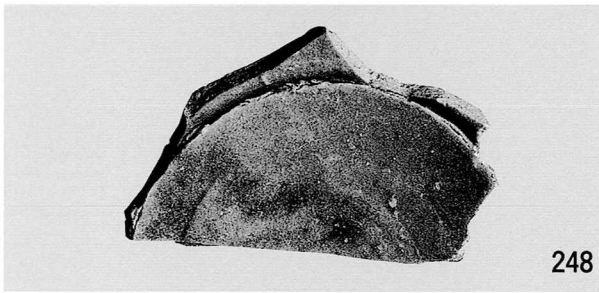
遺物包含層第５層（210、216、220）、遺物包含層第４層（217、218、221、222）出土土器

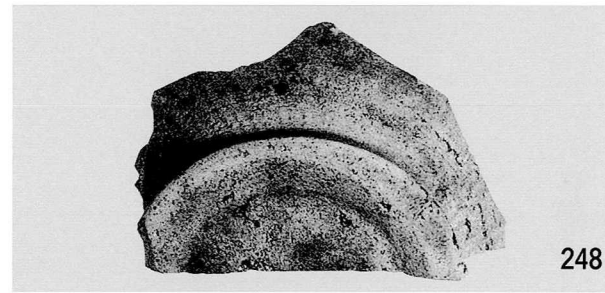


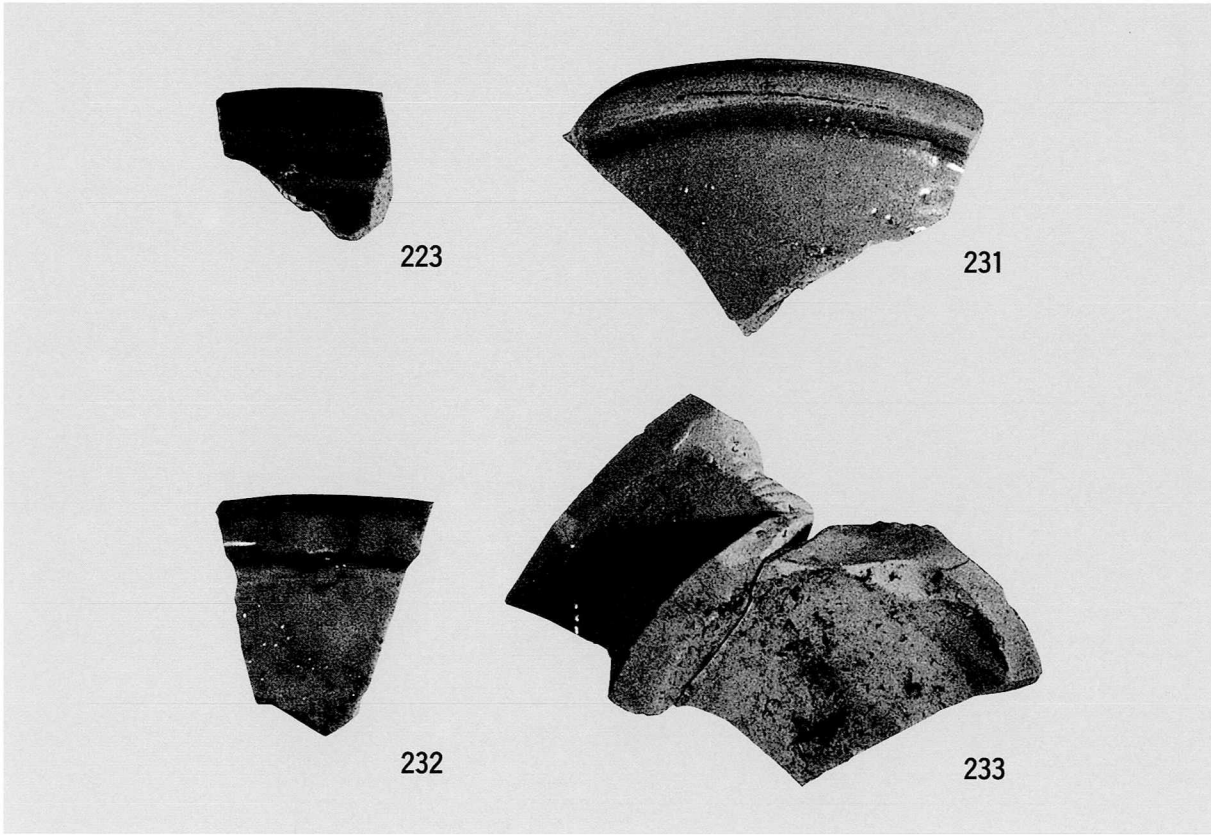




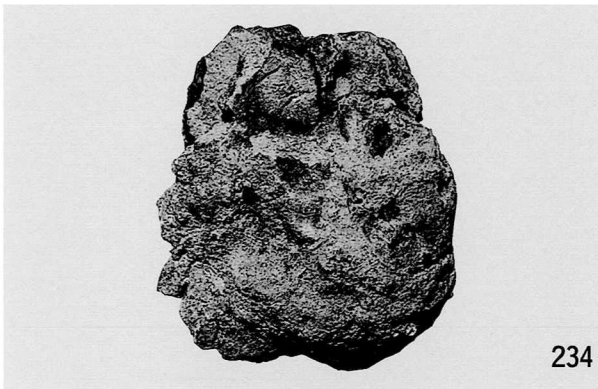


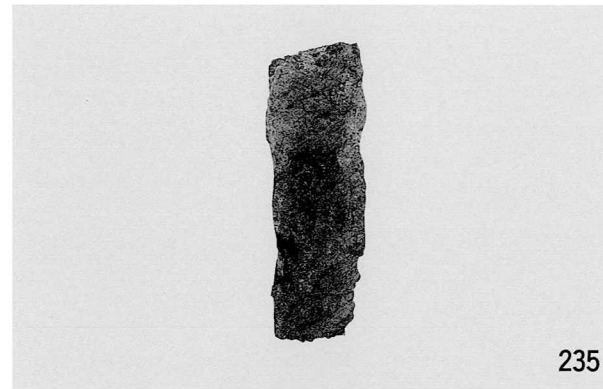


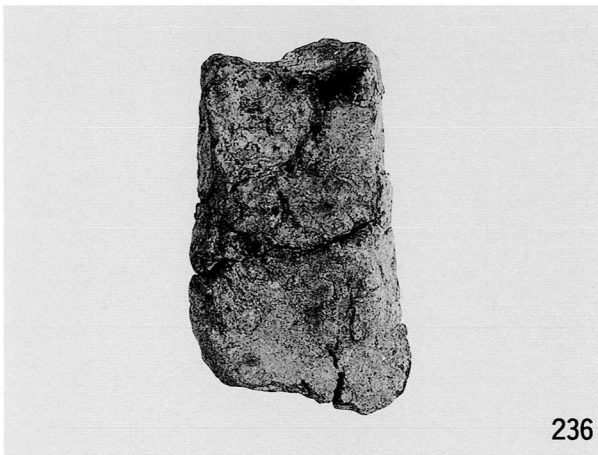


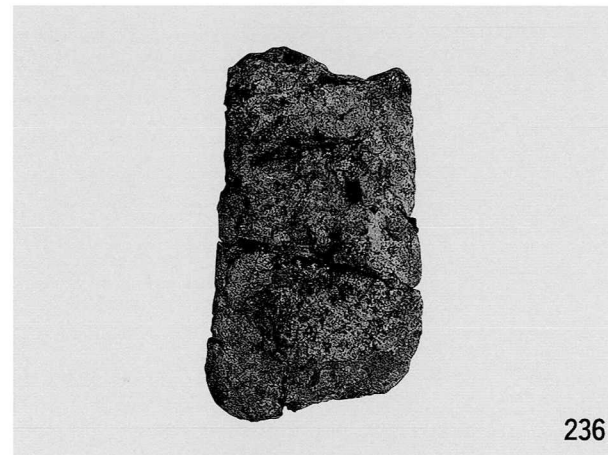


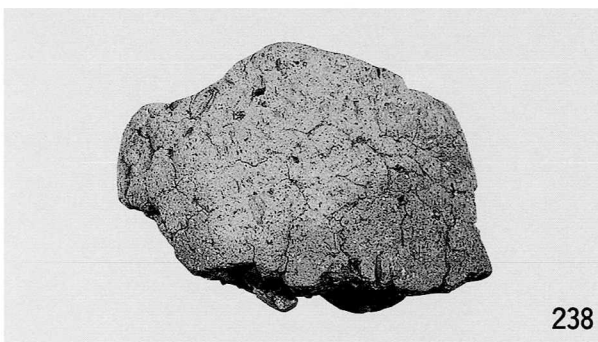
緑釉陶器（27、28）、青磁（227、229、230）、白磁（223、231～233、248）

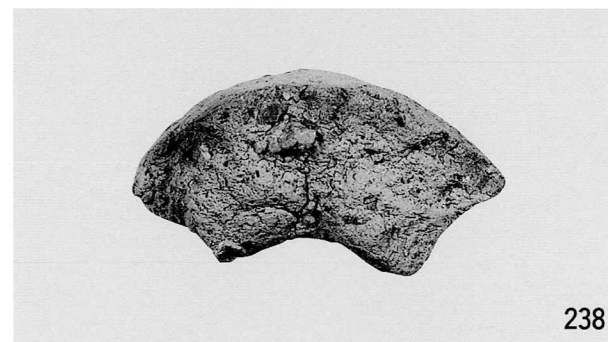


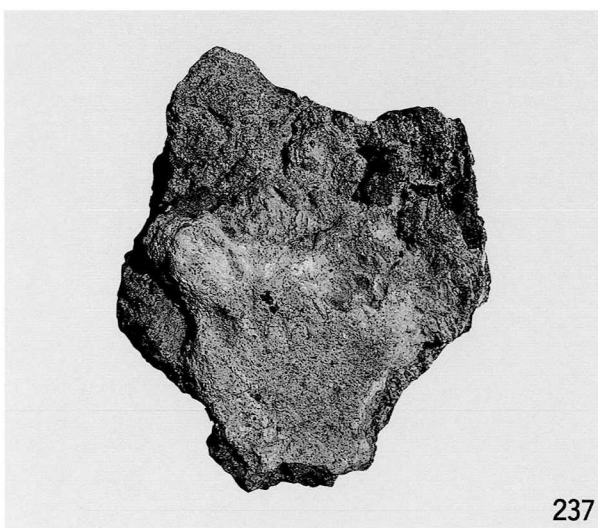


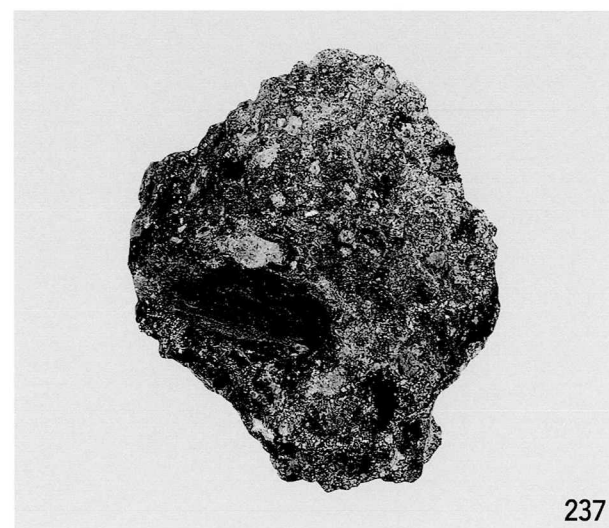












金属製品（234～236）、金属滓（237）、フイゴ羽口（238）

貝塚市埋蔵文化財調査報告　第69集

地蔵堂遺跡発掘調査概要 5

発　行　日　平成17年 3 月31日
編　　集　貝塚市教育委員会
発　　行　貝塚市教育委員会
　　大阪府貝塚市畠中 1 丁目17番 1 号
印　　刷　㈲春木印刷所
　　岸和田市下野町 2 － 2 － 8